早稻田文學社 文學普及會講話叢書第一編

●明治小說文章變遷史

德田秋聲述

●明治小說內容發達史

田山花袋述

附錄　明治小說史研究參考書目

早稻田文學社編纂發行

文學普及會講話叢書發刊の趣旨

眞の文明生活は確固たる思想の根柢を持つた生活でなければならぬ。然るに日本人の生活にはまだ本當の思想の根柢と云ふものが出來て居ない。依然として舊時代の無自覺狀態を脱し切れないで居る者が甚だ多い。外的な物質的な事情が年一年と複雜になりさま〴〵な實際生活上の困難が日一日と烈しくなつて來て居るにも拘らず、一として之に對する根本的劃策が無く、唯徒らに苦悶の聲をのみ放つて居るのは、我が國民現時の狀態ではないか。多くの人は國が文明になつたと云ふ。而もその所謂文明になればなる程、生活上に複雜な困難の增加して行くのは何故か。年一年世の中が亂雜になつて行くのは何故か。要するに我が日本國民には外的な文明生活を支配して行くに足る

だけの內的な文明生活が無いからである。文明に對する根本からの理解が無いからである。つまり眞の思想生活がないからである。

最近に於て我が國の思想界乃至文學界が長足な進步をしたと云はれて居る。けれどもそれもたゞほんの狹い一部についてだけ云へる事で、一般の國民生活は依然として舊のまゝであると云つてよい。新らしい主義や新らしい思想や新らしい文學が幾ら說かれても、一般の國民生活との間には何の交涉もないのである。隨て新らしい思想や新らしい文學が先へ進めば進むほど、一般の民心はます〳〵五里霧中に迷ひ入らざるを得ない有樣である。この狀態の續くかぎりは何時までたつても、わが國民生活が本當に文明生活に導き入れられる時がない。つまり思想生活に對する根柢の理解力の出來ない間は、如何なる新思想の唱導もつひに何等の效果を收め得ないからである。

是に於て吾々は一方にます／＼新思想新文學の向上に努めると同時に、他方に先づ一般社會に確實なる智識の根柢を與へ、十分なる理解力を養はしむるの必要を感じた。之れが今回吾々をして文學普及會なる新事業を計畫せしめた最も大きな理由である。即ちそれ／″＼の方面に於ける最も信用するに足る學者に依賴して、それ／″＼の各方面の歷史的系統的組織的なる講話を求め、之を能ふかぎり廣く普及せしめ、以て眞の文明生活の根柢たるべき思想生活に對する根本的理解力を一般國民の腦裡に養はしめやうとするのが、吾々今回の新計畫の眼目である。

自ら進んで文學者乃至思想家たらうとする人々は云ふまでもなく、一般に苟くも新時代の最も進步したる生活を營まうとする人々にとりて、吾々は最も信賴すべき根本敎育を授ける事を主眼とする。不確實なる智識と、不十分

なる理解力とを以てして、新らしき思想に對するほど危險な事はない。吾々は一方に此危險を救ふと同時に、更に進んであらゆる方面に活動する眞の文明人を養成する根本敎育を施さうとするのである。就中宗敎、敎育、政治、新聞雜誌等、常に社會の木鐸たるべき方面の仕事に從事する人々について、吾々は一層痛切に此の事の必要を感ずるのである。

世間往々にして之れに類したる計劃を成す者がある。けれども多年文學界乃至思想界に於て、最も多くの信用と、最も確實なる地步とを得て來た我が『早稻田文學』社が企てた今囘の計畫の如く、しかく安心して信頼すべきものは、他に決して求むべきでない。之れは吾々の自ら固く信ずるところで、同時に吾々の責任の重大なる事を思ふ所以である。

眞實に思想生活を求むる一般の諸君子、又は將來自ら身を挺して思想界乃

至文學界に活動を試みんとする諸君子は、速に來つて我が文學普及會に加入し、又と得難き本會講話叢書の講習に從はれよ。之れ蓋し思想生活に對する眞實なる要求を有する諸君子にとりて再び得難き好機なることを信ずるからである。

大正三年五月

早稻田文學社同人識

明治小說文章變遷史

德田秋聲述



德田秋聲氏

目次

事もない。政治上の維新は決して文學上の維新では無かつた。僅かばかりの變遷と、外部に彰れないまでも内に充ちて來る革新的推移力とはあつたが、要するに德川文學の末流が、消えかゝつた燈火のやうに明滅し、多忙な世上の大變亂に應接するそれを文藝に反影するだけの餘裕も力も皆目無かつた。

明治十年までに小說と名づけられる程の出版物を數へて見るなら、魯文の『假名讀八犬傳』『西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜扱』、萬賀亭應駕の『釋迦八相倭文庫』五十九六十、二代目春水の『時代加賀實』四十編乃至四十五編及び松村春輔の『復古夢物語』『春雨文庫』『近世櫻田紀聞』を擧げたらそれで盡きる。

假名垣魯文

此のうちで ほんの 僅か在來の 文體に 變遷を見せたのは假名垣魯文だけである。魯文には學殖も識見も無く、加ふるに貧しい肴屋の伜であつて、小僧となつて生長する間に終に文字を獨習したに過ぎぬ、且つ頗る放縱な生活に親み、流浪漂泊の末は、遊女上りの妻と九尺二間の陋屋を湯島の妻戀

坂に構へて談笑諷諫滑稽道場お誂案文認所と云ふ招牌を出した位貧乏の極致に居つた男であつたが、漠然時勢の推移を感知して、文章を殆んど全部假名で書いて、極端に讀みやすくしてしまつた。おそらく日本の文學史中此の位低級な俗受なものを書いたのは有るまい。

英國思想の影響

明治初年の西洋崇拜は今からは到底想像し得られぬ。漢字全廢論が起り、羅馬字採用論が起り、福澤の慶應義塾も中村正直の同人社も新島讓の同志社も皆一圖に西洋化を說いた。中にも福澤の英國思想を、功利說の一點に集めて開國進取を唱導した勢は素晴しいもの、その著書の『西洋時情』が二十五萬部賣れたと云ふのは、今から顧みても出版界の奇蹟だ。此の極端な歐化主義が幾分でも小說の著作に彰れたと云ふのは、たゞ假名垣魯文が一人あるだけ、鶴亭秀賀も山々亭有人も柳水亭種淸も笠亭仙果も二代目春水も皆德川文學の殘膏を舐つたばかりと云ひ捨てゝ差しつかへない。

西洋道中膝栗毛

さて、魯文の『萬國航海西洋道中膝栗毛』は神田の蕩兒彌次郎兵衞北八の二人がロンドンに遊ばうと思つて、横濱の豪商大腹屋に伴はれて行つたもの、無論此の作者の態度は新時代の要求に應ずると云ふやうなことでは無く、たゞ「此の節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向」を凝したまでゞある。無論魯文は當時流行の福澤諭吉の西洋事情で、西洋旅行の大體に見當をつけ、岡文紀の飜譯書とか、巴里博覽會を見物して歸つた宮田砂燕などから實話を聽いてい〻加減に想像で所謂デッチあげた作品である。

彌次「さつき通さんが讀だ番附の樣子じやア博覽會は餘程不思議なものがあるに違ひねへどうだらう己ら達も何か持出して洋人を驚し付てやりてへが早速い〻工夫もねえのウ　喜多「い〻な其品を見せねへからッても評判をさして是〳〵のものが日本にあるといつて新聞にでも書してやらうじやアねへか茲の亭主は横濱に長く居たんで、日本言葉には大概わかると通さん

が云たツけが丁度いゝ兩人で主人に應接していゝ加減なごまかしを吹て遣らうじやねへか夫がよからう　と兩人にて主人に用事あるゆゑ對面したしといひ込みたれば取次の夷人早速に主人にかくと通じたれば何事やらんと席に通し客人の事なれば叮寧のあいさつにて英人「アイシイユウホルストタイムアイアムウヘリヲフライイジツトホールユーワステーイングインヂスタイム　兩人『私達はまだ洋語を知りやせん

西洋道中膝栗毛十三編下

などの引例にもある通り怪しげな英語交りの言文一致で頻りに書きなぐつたものにすぎず同じ書の十一篇の序に

方今文明開化一時に進み余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き市街の兒童等に至るまで芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流

に一變し孔氏の遺書はペケにして英字、佛の横文エビシ、四百餘州は何のその萬國世界五大洲天地の理を知る開端に至るはめでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩舊知事の公達子も無僕獨歩に世間を見知り歸農の扶持は飛鳥川水に流して商法開業父母在せども遠く遊び艦砲一發三千里旦に道を聽くとも夕に死するを可なりとせず。牛を食しビイルを飲み體を壯健にして壽を保ち利を得て國を富ますを以つて今日も報恩とす」

鵺的な文體

とあるはその內容において皮相文明の根柢の更に無いグラ〳〵と動搖ばかりして居る混沌狀態を語つて居るものである。その文體においても極めて鵺的であるが、此の混沌と鵺的が啓文が有する德川明治兩文學干繫の唯一の價値である。啓文の作だけには時代の影響が全然皮相的ながらもよく彰はれて居る。尙ほ當時の面白い現象は同じ作者の『胡瓜扱』であつて卽ち福澤

諭吉翁の『窮理圖解』の廣く讀まれるのを狙つて、その『音通を假用し實學有益の碓論を無用の戲編に飜案せる』ものその一例をあげると

胡瓜扱

第四章　風の事

吹よ川風揚れよ簾れ、中の歌妓の程の能さ、三弦の絲の柳橋。四時の盛りも取り別て、夏來にけらし白妙の、肌をすきやの衣手に、嬋娟とすました左褄。箱持が供に立姿。

とあるは福翁の風の說明を模し、「空氣日に照らさるれば熱して昇り冷氣これに交代して風のもととなる」理を歌妓の生活にあてたものである。古來此の種の模擬文學の例はすくなくないが明治の維新當時福澤諭吉の通俗文體が時文として、非常に勢力を持つて居たに比べ、小說壇が何ら新味な文體を持たなかつたのであるから、此の胡瓜扱一篇が、當時の讀書界に一種小說の新文體新構造を想はせる一つの緣となつたものとして記念すべきである。尙ほ福澤諭吉に就

福翁の小說

いて記憶すべきは、彼に只一篇アレゴリイの小說『かたわ娘』がある事だ。『かたわ娘』は生れながらに齒の黑い眉毛の無い女兒がかたわと近所のものに罵られながらも成長して緣づいて見ると日本の舊風俗では反對に美人になつたと云ふ筋であるが、その文章が例の福澤一流の些の澁滯のない率直な點で馬琴調などとは遙かに飛び離れて新味なものである。

はや十四歲の春に至り、初花のつぼみもほつるゝ時節、たちゐふるまいいとやさしくあいきやうもこぼるゝばかりの娘盛りなれど、たゞいかにせん齒と眉毛となり近所の人々も今はこれを見のがしにせず、竊に指さし噂して文盲連の口々に彼の娘の眉毛はいづれも癩病の筋に相違もあるまじ憐れむべし玉の顏色も近き內に形を失はん、その癩病は兎も角もかの齒の色は怪むべきなり。あの家はいかなる前世の宿業ありて斯る稀代のかたわものを生みしや親は代々たどん商賣くろいたどんを高く賣りしろい飯を喰ひし

報かさなくばここに又說あり。あの親達はかねもちなれども近處の人が借金の斷りに行きしときいつもふくれつらして白い齒を見せたる事なきその因果にて黑い齒の娘生みしならむなどとてほうだいに嘲り笑ふもあり。

など今の眼を以つてすればともかく、當時の時文と云へば一から十まで一齊點の訓讀をそのまゝ假名交り文にしたもののなかに、福翁の此の一篇は輝いた他山の石であつたと云ねばならぬ。

碎けた漢文

所謂小說と云ふ部類には這入らぬかも知らぬが、明治十年前における成島柳北の碎けた文學は昏文と共に忘れてはならぬ。柳北は漢文家であつたが爲に、その文體において小說壇において記すべきものは無いが、彼が明治七年發行した『柳橋新誌』と明治十年に發行した『花月新誌』とはともに漢文ではあるが今日から見れば發賣禁止になる樣な淫靡な文字まで書きつらねてある此の雜誌、及び撫松の『東京新誌』(明治九年四月發行)は當時昏文一囊の小

說を下層社會の下司者が讀む戯作だなどと云つて、頭から手にも觸れなかつた所謂智識階級の人々にとつて、丁度今日の小說のやうな讀み物となつて提供されて居たのである。

言文一致の萠芽

尙ほ此の時代において言文一致の萠芽、萠芽と云ふにもまだ足らぬほどな運動があつた。それは假名垣魯文が假名で小說を書いたやうな意味、つまり成るべく平易にしやうとする努力である。それを强く深く意識した上でやつたのは福地源一郎であつた。福地源一郎の言文一致主張の目的は全然平易に判りやすくすると云ふのであつて、後に起つた山田美妙や長谷川二葉亭やなどが美術品としての言文一致卽ち表現法からの適否で論じた運動とは全然根柢を異にして居る。福地は日々新聞の紙上で嘗つて文章平易の主張からこれからは農夫のかく借金の催促をする文章などは『借金はなぜ越さぬ。越さぬならおれが行く。おれが腕には骨がある』と書く、それを當時諸識家の巨擘であ

つた成島柳北が『朝野』紙上に評して先生何ぞ『國會はなぜ立てぬ。立てぬならおれが書く。おれの筆には骨がある』とは書かざるやと揶揄つた事がある。此の文章の平易から例のとさ文體と云ふものが起つた。それは平易な文章を書い

とさ文體

て一番終りにとさとつけて噂のやうに書くことであつて明治十年に起つた有名な『圓々珍聞』などはみなこのとさ文體で行つたのであつた。

○近頃は頻に秋葉さん近邊が燒ますので其邊の人が社内の人に向ひ餘りつまら無いじやねへか鎮火の神の地内から火事をオッ始めるは夫がサ此間秋葉さんから神主さんへお勅には近年坊主に計り肉食妻帶を許して神佛には構はねへから己も少は燒いても宜はと言聞ましたとき　圓々珍聞

翻譯の二派

要するに此の時代においては小説と云ふものは嚴密な意味でなかつたのであつて、種彦春水の流れを其の儘套襲したものはあつたけれども新らしく起つたものは皆無である。文體に最も大なる影響を與へたものは飜

譯であつて、飜譯には福澤諭吉と中村正直との二派が最も著しい特色をなして居た。福澤派は平易を主眼とし中村派は嚴正を主眼とした。一つは原文を離れやうとし、一つは原文に卽しやうとしたのである。一つは平假名を用ひ一つは片假名を用ひた。そして此の兩方とも殆んど完全を以つてゆるされる程に發達したのは、二家の識見の高かつたのを證する。兩方の例をあげると次の如くである。

世の中に、かえる。でゝむし。はい。いもむしなどいふ虫あり罪もなきものなるに心なき人は見付次第にこれを苦しめこれを殺すことあれども以ての外の事なり（福澤翁童蒙教草の一節原書は英人チャンブル著モラルカラッスブックの飜譯）

瓦德(ワット)　幼年ノ時戲玩(モテアソビ)ノ具ヲ作ルコト巧ナリケリ」ソノ父ハ木工(ダイク)ニシテソノ舖ニ象限儀(クアドランク)アリケルガコレニ因リテ生物體質(フイジヨロヂイ)ノ學（或ハ生命ノ理學ト譯ス）ニ心ヲ留メソノ深奥(オクギ)ニ達セリ（中村正直譯西國立志篇ノ一節）

第二章　飜譯文の勃興（明治二十年まで）

『繋思譚』――『もしや艸紙』――才子佳人の奇遇――逍遙の飜譯――飜譯文學の新生面――周密文體――ジユールベルヌの小説――口譯――東海散史――饗庭篁村――禁短氣――ユーモリスト――『三筋町の通人』――鳴鶴と鐵膓――言文一致の意義

亂譯の時代

『花柳春話』の出た明治十年から、二葉亭四迷の『浮雲』が出る明治二十年までの日本の小説壇は、日本の文壇に創作力が缺如して居たかと思はれるほど飜譯ばかりが世に出た時代である。藤田鳴鶴の『繋思譚』等は飜譯小説史の上で重きをなすものであるが、井上勤の『六萬英里海底旅行』など佛國の科學小説家ヂユールベルヌの、空想的な驚嘆的なものが頻りに飜譯された。同時にまた此の時代に英國文壇の根柢をなした大抵の基礎的作品が不完全ながら邦譯された。例へばアラビアンナイトは『全世界一大奇書』の名のもとに明治十

八年出版され（井上勤譯、鵞瓈皤回島記は即ちガリバースツラベル明治十三年に出版された（片山平三郎譯）のはその一例であつてユートピヤを譯した良政府談及び刺世拉斯（ラセラス）傳なども此の頃廣く讀まれた。當時の飜譯の傾向をあげると

（一）文明開化を狂熱的に憧憬した點で一種科學上の驚異にうたれやうとしたもの即ちベルヌの飜譯の如きもの。

（二）政事的興味あるものにて政治小說とは云ひながらも譯者の立場から云へば時代思想に應じ之を導かむとする見地より純文學の態度を以てせるものリツトンヂスレリイの飜譯は之れである。

（三）は（二）の傾向を極端に走らせたもので憲法翹望時代に民權主張の結果爆裂彈式なもの宮崎夢柳小室案外堂等の『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋（ニシノウミ）血潮の荒波』などが此の例であつて、佛國革命又は露國虛無の反亂を材として露骨に自由民權を寓意して居る。

（四）純粋な興味での文學もの例せばスコットのアイバンホーを梅蕾餘薫としたりその他ゲーテの『狐の裁判』などがある。

（例）

志氣凜然と程もなくビロウカミルデモルラン等は、パスチールの方へ近づきし折柄その横手に當りてブルバートと云へる街衢の中央より思ひも寄らず忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一彪の軍馬スハ敵の我れに先だち寄せ來りしこそ健氣なれ花々しき手始めの戰ひなし革命黨が手並の程を見せ呉れんと急に隊伍を立直し今や遲しと控へし所ろ是は全く敵にあらず巴里の護衞兵の政府に負き人民を援けん爲め此處まで來りしものなるにぞ革命黨は愈々之れに勇氣を增しドット揚げたる鯨波の聲揉に揉んで進みつゝパスチールを距る大凡そ二丁ばかりの土地に陣を張り敵の虛實を望み見る向ふの方は石壁鐵柵後には嵯峨たる山高く雲に聳ひ…………

デューマ作宮崎夢柳譯自由の凱歌の一節

誇張した文體

此の時代の文體の特色を云へば明瞭に誇張と云ふ點が目につく。如何なるものでもエキザゼレートしてある。これは其時勢相が無暗矢鱈に西歐の物質文明に驚き同時にそれを輸入して年一年我が國の社會の面目が進步する所謂文字通りの日進月步であつて、來年さらい年頃には此の島國が什麼に進步するか想像がつかぬ。丁度市區改正前の町家のやうにすこしも落ちつきがない。

未來記流行

未來は什麼に眩い程進步するかと思つて未來記など頻りに出る末廣鐵腸の『二十三年未來記』『明治四十年の日本』巖本善治の『女の未來』などを始め澤山ある。小說の舞臺も大抵非常な未來か過去か遠國かを舞臺にした者であつて、『雪中梅』『花間鶯』など現在のことをかくにも尙ほ百年後の未來から顧みて書くと云ふ有樣、所謂櫻痴翁のもしやもしやで『もしや草紙』をかき明治三十五六年には上野の公園が無くなつて大厦高樓で埋つてしまふなどと

誇大的に想像した時代である。だから小説の主人公も極端に類型になつて、必ず才子佳人の奇遇でなければならぬ。リットンの小説などどれも飜譯されて見ると主人公は才子佳人になつて居る。

だからその飜譯でも原文を誇張してある處が多い。當時元作者の本意を汲むで飜譯せねばならぬと序文に主張した坪内逍遙さへ尚ほその弊の甚だしいものがある。例へばリットンの Rienzi を譯して『開巻悲憤慨世士傳』と題した一節に(明治十七年)

云ふは正しく穏に出て。しらせまほしき尾花艸、招き顔なる言葉に思ひは同じ愛蓮がさと赧(あか)うせし我が顔を、かくすは袖の夕霞もれでる月か花の貌(かほ)やゝ擡げつゝ且いふやう「數ならぬ身をさほどまで

とあるのはその原文が

Blushing again, but with far different emotions than before, Irene, after

a momentary pause, replied, "Yet, my lord, I must consider.....

である。此の譯者にして既に是の有樣であるから他は推して知るべしである。

同じリツトン卿の小說を譯しても織田純一郎の『花柳春話』と鳴鶴藤田茂吉の『繫思談』とは餘程譯者としての立脚點を異にして居る。『花柳春話』は明治十二年の出版で『繫思談』の方は其れから七年おくれて明治十八年世に出たのであるが、此の二つの飜譯に彰れた譯者の態度の相異は、我が飜譯小說の變遷上から見て重大な意義があり、『繫思談』は此の意義ある峠を越して日本の飜譯文學に一生面を開いたものである。

飜譯文學に一生面

『繫思談』は普通世間では藤田鳴鶴の譯となつて居るけれども實は尾崎庸夫の譯であつて鳴鶴はその序者であり校閱者であり佐譯纂評者である。

『花柳春話』の文體は全然馬琴調であつてひたすら俗耳にいりやすく努めたも

の、譯述者織田純一郎が

舊譯は漢文體にして婦女兒童の或は解し難き所なしとせず且舊時は婦女兒童にして英史を讀む者多からずと雖も今は則ち教育の道大に進み其の史を讀むこと殆んど成童男子に異らず故に今其の舊文を一變して苟も四十八字を讀み得るの徒は之を讀むで解せざるの憾なからしめ以つて啓蒙英史の風俗篇に充(あて)んとす

と云つた通りその一例を示せば

花は散り霞がくれを行く雁の影に春暮てかたみに殘すものとては青葉がくれに宿かりて昨日を謡ふ鶯兒(うぐひす)の聲より外に跡もなし然れども人情熱を去り冷に歸するの理とて春の後(のち)なる夏景色は亦一層の詠なり然ればクレーブランドは多くの客を招待して其の別業に滯留せしめ今日山行明日は又船遊とて………

『花柳春話』第五十章

の如きである。當時はもとより誤譯問題などを八ヶ釜敷云ふものは一人もない、渴いた喉が水を求めるやうに西洋小說を憧憬れた風潮は忽ち此の『花柳春話』一篇が洛陽の紙價を高からしめてしまつたのであつた。織田純一郎の飜澤はもとより奔放自在なものであつて誤譯飛譯一さい介意することなく、讀過の情緒を誘つて讀者を魅し易いやうな箇所になるとドンドン自己獨特の例の馬琴調の美辭麗句を阿呆陀羅經式に書きくはへたものであつた。譯ではなくて原書の構想を種(たね)にして旺に自家の創作慾を充たして居たのである。

けれども斯樣な亂調子の飜譯は何時迄續く可きものではない。果然尾崎庸夫の『繫思談』は『花柳春話』とは直反對の傾向に出たのであつた。繫思談の原書名は Kenelm Chillingly : his adventures and opinions であつて、『繫思』の二字は特に其邦音が冠字KCの二字の英音と相近いに因つたのである。

嚴密な態度

尾崎庸夫は織田純一郎等の妄譯以上に亂暴なる極端に反對して立つた

『繋思談』の序文において堂々と

稗史は文の美術に屬せるものなるが故に構案と文辭と相待て其妙を見るべきものなる事論を待たざるに世の譯家多くは其構案のみを取りて之を表發するの文辭に於ては絶て心を用ゐる事なし全く原文の眞相を失ふも肯て顧みざるは東西言語文章の同じからざるにも因るべしとは雖も美術の文を譯するの本意を亡失せる事之より甚しきは無し譯者竊に玆に慨する事あり相謀つて一種の譯文體を創意し語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を存せん事を期しこれが爲めには瑣末に渉れる邦文の法度の如きは寧ろ之を破るも肯て顧みる所に非ず精緻の思想を叙述するに方り往々已むべからざるものあればなり英賢カーライル氏の獨逸大家ギエーテ氏の書を譯するや殆ど其一字一句を増損せず譯文既に成て精彩原文に減ずる事なし論者いへるありカーライル誠に善くギエーテを譯せり但未だ之を英文にする事能は

ざるのみと抑我の英と語脈の源流發達の程度固より甚だ相懸殊せること英獨兩語の其本宗を同ふし其の進度を均ふするが如きに非ず故は原文の語句を增損せざるが如きは得て能くすべきの事に非ず而して之を邦文にする能はざるの病は亦從て多からざるを得ず譯者がカーライルの心を以つて心となさん事西施の顰に傚へるよりも猶甚しきは其自認する所なり然れども既に自ら創意といふ舊格を以て新體を論じ之を邦文に非ずといふものあるも固よりその嘲を甘受せんとす。

と論じて居るのは慥に卓見である。只に文體ばかりでなく、其の中に用ゐた插繪の如きも『花柳春話』の明治初年の風俗畫の樣な洋服姿を無暗に並べたのと異り、特に原書通りに佛人ビゴーの插畫を佛國美鄕畫と銘うつて挿入し、漢英對譯李頃侯小傳名稱備考を添へ、M.A.とB.Aとの區別を學士と得業士となす程に嚴密に取扱ひ、頭註及び一章終る頃に總評として依田學海森田思軒藤田鳴

鴎等の漢文評を添へ最も嚴正な態度を以つてしたのであつた。けれどもその譯文としての價値は甚だしく俚耳に遠く丁度科學書に對するやうに窮屈である。

ケネルムは累代培養せし樹林の下蔭に傍ふて我家へと返りたるが其路は一面青草にて潺々たる溪流其側を通過し今しも別れし吟客がたどり行ける塵埃滿眼の大路に比すれば瀟灑清灑同日の談に非ず之を行く者の心も自ら平靜に歸するなるべし去れども想像の内に充ちたる人に在ては別に自家の景致を胸中に生じ自家の靑天を腦裡に畫くこととならむ

『繋思談　第一篇第十五章の一節』

の如きは譯者の所謂創意せる日本文としては寧ろ退歩と云はねばならぬ。尙ほ當時の飜譯については坪内逍遙の『書生氣質』にある次ぎのやうな一節が一つの參考ともならう。

(繼)そいつは我輩の願ふ所だ親父の供給が絶えてからは我輩も實に究したから何か金儲をしなくては。下宿の拂もできやしない早速周旋してくれたまへ。それじやア今朝ッからやつて居るのは。即ち其 Translation 〔飜譯〕か(山)さうョ。見たまへ雜と如斯體裁さ(繼)どれ〳〵ト言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る(繼)ヤア隨分亂暴な飜譯だな。ヱトなんだ：：是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ。蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ。決シテ疑フ可キ事ニ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ：：ハ、、、イヤニ冗長な曲りくねッた變に讀惡い文章だなア。羊の腸よろしくたア如斯文體をいふンだらう就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極るじやアないか。ナゼこんなに文を延すンだらう反語ばかりいやに重なつて。惡讀くッて解りにくゝッて是じやア素人にやア解

りやアしないせ(山)ハ、、、、ぶつゝけがきだものを。文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかッたり。同じ事を繰返して居りやャ。骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出來るだらう。何々せずんばあるべからざるなりと歟。それ然り豈それ然らんやなどゝやつて居ると。十行二十字は二十分位に一枚かけッちまふ。是之を economy of labour(はねほりの儉約)といふ(繼)ヤレ〱斯いふ飜譯者の手に成た。飜譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかそう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山)ヲット承知だ。それじやアペイジ。トエンチー(二十葉)から〇かうット〇ペイジ。サルチー(三十葉)まで、君にやろう。汗牛堂へは明後日ゆくからなるべくせいだして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから(書生氣質)

周密文體

『花柳春話』から『繋思談』に遷る飜譯上の意義については森田思軒が

我邦小說の趨向將に一變せむとするや織田氏譯する所の『花柳春話』之が嚆矢をなせり。而して是れ實にリットン氏の『マルトラバース』なり而後西洋小說の我邦に譯さるるもの紛然群起せり然れども其の文體は率ね東洋の舊に仍りて未だ生面を其間に開くものあらず。藤田氏の『繫思談』を譯するに及て造句措辭別に一機軸を出だし或は難奥にして通じ難きもの無きに非ずと雖も其の原本を臨する謹嚴精微今日無數の周密文體はその紀文を此に遡求せざるを得ず

と云つて居る此れは思軒が明治二十二年秋の感想であるが思軒の所謂周密文體なるものは即ち新しい酒が古い革袋には盛りきれなくなつて出來あがつた急場の鵺的なもの、當時英國のビクトリア朝時代文學全盛の心理解剖の傾向が、我が維新このかた雜駁と疎笨とを特色に荒みきつた文壇に影響して來て、まるで强飯の膳に胡麤鹽の代りにスープが出された體たらく、大狼狽きに狼狽いだ

突差の思案に斯うもしたら落ち着いたらしく雅かに見えるだらうかと思案したあげく生れたのが、所謂周密文體である。しかし此の文體はともかくも歐文に彰れた感味を傳へやうとするのが第一の眼目であつて、假令氣分を移さうのなどと云ふ程度までも行かなかつたにしても、歐文の語跡文脈に獨特な關係代名詞の微妙な用ゐ方を何う云ふ風に譯したらいゝだらうかと思案にくれた跡が『繋思談』のいたる所に彰れて居る。その他イヂオムから來て居る行間の意味をどうしやうかと工夫した跡もあるが、要するにまだ文法上語學上の感味を移さうと云ふ點にとゞまつて居て、內容上思想上の氣分を出さうと云ふ點には微塵も氣が付いて居らぬ。殊にその會活の如きものは甚だしくたとへば生れたばかりの幼兒の病的な沈鬱な顏を見て女が驚いて

如何なる天上愁人の顏色ぞ其の神仙を離れたるを悲めるにや

と叫ぶ言葉など最も周密文體の惡い方面の特色を發揮したものだ。

ジユールベルヌ

しかしともかくも『花柳春話』と『繫思談』とが導火で盛に飜譯が出て、二十年二十一年はその全盛期であつた。磯野德三郞譯『ハロルド物語』（リツトン）牛山良助意譯『梅蕾餘薰』（スコツト）井上勤譯『狐の裁判』（ゲーテ）大石高德意譯『花情粹話』（伊、ピトリオーベルセジオー）愛花仙史意譯『悲風慘雨』（英、ウキリヤム、ハリソン、エインスウオルス）中村柳塢譯『歐洲情話』（佛、セルバント）大石高德譯『奇遇魯國美譚』（佛、トンベイ）等玉石無數である。が中に特記すべきは佛の科學的驚嘆的小說家ジユールベルヌの作品を數多紹介した事であつて、『六萬英里海底紀行』『亞非利加內地三十五日間空中旅行』『學術妙用造物者驚愕試驗』等は、我が文壇の飜譯小說史から云へば後に影響のなかつた傍系的な慧星的なものであつたが、多く人に讀まれ特種な西洋趣味を鼓吹した點で忘れてはならぬ。元來、ジユールヴェルヌの小說は明治十三年川島忠之助が『新說八十日間世界一周』を譯したに創まり井上勤以外に『鐵世界』（紅荷園主人

譯)『萬里絶域北極旅行』(福田直彦譯) などがある。是らは後の黑岩涙香の『巖窟王』などの趣味の上流と見るべく飜譯の風潮が必ず伴つて連れてくる外國的な新ロマンスの發現した趣味である。

口譯の始まり

さて飜譯の文體は所謂周密文體で妙にバタ臭いコジレたものになつたが茲に一つ注意せねばならぬは明治二十二年後半から翌年にかけて益田克德が毎月二回十二冊完結でリツトンの小説『夜と朝』を譯した事である。益田克德の譯は周密文體でも何でも無い。講談口調に口譯をしたのである。若林玵藏が得意の速記術でひたすら流麗巧妙な吻氣語勢を寫さうとしたのであるが、無意識ながら一種進歩した言文一致體になつて居て面白い。試に今その書き出しの數行を引いて見ると、

英國の都會(みやこ)倫敦に程遠からぬ或村のお寺に迦靈(カブレ)といふ坊(ぼう)さんが居りました。勿論村のことですから別にたいした御宗旨の學問のある人が入用と云

ふ事もなし又智識知尙さんが住職になる譯もありません。

と云つた調子である。もとより『繫思談』飜譯振の反動であつて、一寸福澤諭吉の文章の意氣で小說壇に出たと云ふ風だ。

尙ほ飜譯に就いて比較的忠實であつたのは當時から直譯風であると云はれただけに井上勤の飜譯であつて、例せば

井上勤

斯クテ本船ニ歸リ來レド寂然トシテ人影ナク夕日ノ光イト幽カニ海ノ面ヲ照シツツ晩鳥倦ンデ塒ニ歸リ寄ツテハ返ス仇浪ノ岩ニ當リテ碎クルノミ暮色ニ暗愁ヲ催シ故鄕ヲ思ツテ歸思ヲ惹ク事切ナリ頓ガテ小舟ニ積來リシ菓物ナドヲ移シ運ビテ事漸クニ果テシカバ小舟ヲ本船ニ繫ギ置キ己レガ部屋ニ歸リ來ルニ晩餐ノ準備調ヒ居ケレバ直樣食事ヲ做シ果テツ晝ハ疲ノ强キモノカラ共ニ臥戸ニ入相ノ水夫カ打鐘數ヘツ、手足自由ニ蹈伸シ眠ルトモナク眠リタリ。

井上勤譯『海底旅行』第二十四ノ一節

の様な一體であつて、是を前にしては明治七年に出た上條信の『開化新歩後世夢物語』、是を後にしては明治三十年に出た尾崎行雄の『一讀三嘆』(マクスオーレルのジョンブルエンドヒスアイランドの譯)と共に中村正直の『西國立志篇』あたりから系統を引いた飜譯の一體である。そを創作にしては藤田茂吉の『文明東漸史』に高潮をしめして居る文體だ。又創作で柴四郎の『佳人の奇遇』は讀むで面白く文章の巧妙な爽快な點では當時比類がなかつた。

『佳人の奇遇』の一節

時に金烏既に西岳に沈み新月樹にあり。夜道朦朧なり。少焉ありて、皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち、窓を開て曰く、光景畫くが如し郎君幸臨す、欄外風淸花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期すべからず。徒に相對泣する亦何の益かあらむや。氣を皷し勇を奮ひ、歌舞吟咏自ら寛にすべしと、顧みて紅蓮に謂つて曰く汝小琴を奏せよ。我は大琴を彈せんと

駛空船會社

余高堂の傍に到れば駛空船會と書せられし大招牌を掲げたるを見る。何れの場所より駛空船の出立するやこれを視認めんとせしに其所を知らず只人家稠密なる中にあるを以つて大に驚目せり蓋しこれ手券(テガタ)を受るのみの役局ならんと思へり然りと雖も尚近寄りて之れを見るに他の屋宇に異なる所あり其の屋上平坦にして恰も舟の如きものを保てり精密に之を知らむと欲するも衢上を掩ひたる玻璃の爲めに遮られて熟視すること能はざりし

上條信次の『開化進歩後世夢物語』の一節

英國の貴女は好んで螓首(しんしゆ)を現はし足さへ蔽(おほ)へば裸體と爲るも尚ほ之を恥ざる可し。實に英人の足を人に見らるる事を忌むは支那にもをさ〱劣らぬほどにして黑色の泥濘道を塡むる所を通過するにも決して裳を褰(かゝ)げて、其足を現はすが如きことなく寧ろ泥濘の腰部に及ぶを好む者の如し。

かう云ふ亂譯時代を通じて玆にたゞひとつ砂漠のなかの金剛石のやうに飜譯熱にはすこしも犯されずに輝いたのは饗庭篁村である。もとより篁村の全盛は是の時代よりも後に屬して居るが、その集『むら竹』の前半に收めてあるものは實に此の時代の産物であつて、此を後世の文學史家の觀察眼のもとに置くならば、寧ろ篁村の價値は、此の亂譯時代に世をあげて西洋熱にうかされたのに反し獨り德川文學を繼紹し之れを幾分か明治化した點に輝いて居るのであらう。

饗庭篁村

篁村は明治の春水(三世染崎)魁蕾、應賀、魯文等と相隨した一操觚者に過ぎなかつたが當時の所謂戯作者が八犬傳、梅暦、八笑人の餘唾を舐る外に一歩を出られなかつたが、彼れ一人だけは深く西鶴其碩以下の諸作を涉獵し、元祿前後の隨筆小說に塾し江島屋の文脈を傳へ得た故遂に紅葉露伴等の元祿文學の復興

に際して、篁村宗とまで云はるゝ程自家の特色を發揮することが出來たのである。

篁村は淡島寒月等が西鶴を傳へたに對し、寧ろ其磧を傳へたもので、一部の社會からは篁村は「明治の其磧」だと云はれて居る。

篁村の禁短氣

篁村は文章に就いてよく禁短氣と云ふ事を云つた。其磧は實にその禁短氣の開山であつて筆法は鋭利な方であるが同時に詼諧的な諷刺家たるの素質がある。恐らく明治文壇で一番初めのユモリストとしては篁村を推さねばならぬ。内田不知庵は篁村をユーモリストとし英國のアヂソン及びスヰフトと比較して後

是等の作を一々數へ來れば明治の諷刺家の隨一と推さるる篁村氏も亦一歩を讓るべし。余は明かに忌憚なく直言す。篁村氏の作には讀んで眼底に涙を催ふし來るものを見ず又極めて冷酷に根強く人間を痛罵せしものあるを

知らず。又人間の最も美しき側面若しくは其の理想世界を描出せしものあるを見ず。篁村の開山祖師は畢竟三筋町の通人先生に過ぎざるなり。

と云つて居る。もとより其磧からスヰフトやアヂソンが出て來さうな筈も無いからそれは別問題としても、明治十四五年の頃から、讀賣新聞紙上に、籠泉居士大阿居士の名を以て流麗輕快の筆を絶たゝず、讀賣新聞が高尚に過ぎず野卑に流れず上下を通じて當時聲價のあつたのは彼の功績であつて、歐化熱のなかに孤城を衞つたものと云はねばならぬ。

最初のユーモリスト

しかし篁村は何處までも徳川趣味であつて自分でも好きなものは「內證で勸懲主義」など云つた位てあるから、反例(たとひ)その描く人物が洋服眼鏡でも之を說明して「今時の若い者には似ぬ內氣の性質にて好む事とて算術は和洋とも能く出來讀書もまた中等の敎育は十分に受け狂齋翁に模本を貰ひて器用に書きさへかくばかり揃ひし上に色白の優方なれば」とか「男振よく仁心ありて

學問好き沈みたる氣質ならねど浮歌舞伎でなく道樂といふも茶の湯俳諧父が外出の時は帳場格子の中にて痲痺をきらさず父が店にある時は折々の氣延し」など云ふ癖が著しくある。試に篁村の輕いユーモアとサラサラした處を例に引くと

石榴はポント膝をはたいて其手で煙草入を拔きトキニと云ふをキッカケに、音のする角彫の筒より早いを自慢が脂止めの烟管をとり出しソレ君も御承知のと云ひかけて手烘りの火鉢を引寄せ例の隱れ家へねで切つて煙草を吸ひ附け火鉢の緣をトント叩いてドウモ君に見せたい嬋娟窈窕たるものが顯はれやした實にお目に掛けたいと云つて羽織の紐を結び直す眞似をしてわざと跡を言はずに澄し切つていふ　『三筋町の通人』の一節

文明東漸史その他

篁村の純文藝的努力と飜譯風潮の間を綴つてよく當時の社會に觸れたものは矢野龍溪の『經國美談』と藤田鳴鶴の『文明東漸史』と末廣鐵腸の諸作である。そのうちで末廣の諸作は最も時勢に適應したものであつて、政治小說として此の位廣く讀まれたものは實に空前絶後である。彼の小說『雪中梅』と『花間鶯』の二作は此の時代を記念する絶好のものである。

雪中梅

雪中梅の文は餘程現代の小說に近いが何分にもその基調が漢文にあるから、漢詩など引いて形容し文意を高潮させやうとした跡が澤山ある例せば

小女は枕上にて悄然と物思はしげの顔付なるが色は白雪を欺き鼻筋通り眉秀で眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり數日前に結びしと思はるる島田髷は少しく亂れて黒髮面に垂れ母の寢顔を窺ひてパラパラと淚を落し手巾にて之を拭ふ有樣は梨花一枝春帶雨の風情なり姑くあつて老母はコンコン

咳をして目を開き「オヤお春はまだ其處に居るかへツイウトウトと睡つた内にまた御父さんの夢を見たがなんぞ浮言でも云ひはせなんだか……

等のごときである、地の文が全然文章體であるのに反して會話だけが言文一致なのは此の頃から初まつてずつと後まで續いた所謂舊小說全體を通じた一つの特色であつて、是れが今日から見るときは非常に不調和なものであるが、しかし當時にあつては寧ろ作者の得意とする處であつて、丁度小說を讀むのは山國を旅行するやうなもの六ヶ敷い面倒な難解な峠をひとつ越してはだらだら坂を自然に足が前にのめて行くと云ふ樣な緩急の度を以て讀者を娯ましめやうとしたのであつた。

政治と小說

斯う云ふ特色のある文體は何が原因で出來あがつたかと云ふに恐らく當時の評家の所謂政事論の上に小說の粉を振り掛けしものなりとある通り七面倒な政治問題を平俗な文字に寓せやうと努めて來た事、更に云ひかへれば、作者には小說を書くと云ふ仕事が極めて卑俗な事に考へ

られて居た時代であつて堂々と政事論をやるやうな見識のある男子が暫く身を小説家に窶（やつ）して見ると云ふやうな態度があつたのであつた。當時尾崎行雄氏が

> 政治家は亦新聞記者たらざる可からず亦道德家たらざる可からず亦學者著述家事業家たらざる可からず特に身を小説家に現じて錦心繍腸を鏡花水月の幻境に發露し以て大聲をして里耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便なりとす

と云つたのは最もよく當事政治小説家の氣持を表はして居るでは無いか。『雪中梅』の版權免許になつたのが明治十九年七月七日であつて坪内逍遙氏の『小説眞髓』が世に出たのよりは以前の事である。末廣鐵腸其の人にはさう云ふ「暫く小説家に身をやつして」と云ふ樣な考へは無かつたにしても、さう云ふ氣分が多量に文壇に漾つて居たのであつた。硬軟程よく取り交ぜて俗耳にいり易くすると云ふ此の主意は、文體變遷の大勢から見て、文章體から言文一致に遷つて

行く大波濤の高まり高まつて遂に波頂に澌裂の白沫を碎く處であつた。鐵腸等が地の文の漢文直譯的から直に會話の平俗に遷る巧妙を一種文をやるの術として得意にして居た氣持はその當時の能文家の全部を通じた流行であつて、斯う云ふ風に會話と地の文章とに截然とした區別を立てて居た。

けれども茲にひとつ注意せねばならぬのは一方には之れと反對に地の文と會話とをうまく取り雜ぜて何處までが地で何處までが會話か一寸見わけがつかぬ樣な一體のあつた事である。例せば坪内逍遙氏が明治二十三年の稿になる一圓紙幣と云ふ小說中に

さる程に女の子が件の路次を行きあたりて右へ曲らむとせし時に早口にきいちやんきいちやんと呼びとめて左のかたより年頃十七八の娘の丈矮く肥りて少し赤ら貌なるがかけ來りぬ前髮は式の如く剪さげて舞踏まがひに髮の毛を高く束ね後毛ぼう／＼と風に吹かせ蝦茶色の毛糸のショウルを廣き

背一ぱいに被り泥濘のぬからぬ所を野馬臺の詩復讀中と云ふ鹽梅に新しき駒下駄にて拾ひ〳〵走り來てきいちやん何處へ往ッていらッしやッたのけふ山尾さんはゐましたか宅に、きいちやん新しき駒下駄に目をつけながらア、ゐたのよ、さうと言ひながらきいちんと並びソシテ御内儀さんもゐたの、きいちやん歩きながら仰きイ、ヱけふは朝からどこかへ出たの、さうと言ながら並んで歩きながらきいちやんは感心だことネヱ、なぜ、よくお使ひをなさるからさ、内職もするのおッかさんと一所に、さう感心だことネヱ、それから月琴も餘程あげたの、…………

と云ふやうな一節が試みられて居る。此の體は近松や西鶴やを始め多くあることで別に珍しい事でも無いが、明治二十年前後に斯樣な二つの傾向があつたと云ふのは、軈て後の作家に痛切に感ぜられるやうになつた地の文章と會話との不調和と云ふ事を豫示して居るものと見られる。

小說を現在の樣な純粹な言文一致にしてしまつたのは多く地と會話との不調和と云ふことに刺擊されて變遷したからであつて、後の時代の尾崎紅葉などは此の不調和をうまく綾（あや）なして行く才筆を持つて居たが、山田美妙川上眉山廣津柳浪德田秋聲小栗風葉等は此の不調和を到底綾なし得られない醜惡に感じだして來たのであた。

言文一致の意義

明治二十五六年以後に起つた小說壇の言文一致の運動を、或る人は小說を平易に讀みやすくする爲めの運動と解するかも知れぬが其は間違ひである。文體を平易にしやうと云ふ努力はもつと以前に起つて居る。明治六年ローマ字採用論があつたり漢文全廢論が出たりした位であつて、事實の上から讀み易い文章を書いた點において明治初年に世に現はれた福澤諭吉の文章ほど讀み易いものは空前絕後である。今日の小說を讀むよりも明治初年の文章である福澤全集を讀む方が餘程氣が樂である。

小說壇の言文一致運動は決して平易にせむが爲めの努力では無い。もつと深い藝術上の根抵から動いて來て居るのである。其の點に就いて論究すれば、結局言文一致運動の意義とする所は小說壇に眞に描寫と云ふ一生面が開けて來たからである。描寫とは才筆の事ではない。能文の謂ひではない。言文一致運動以前の小說は才筆や能文やの小說であつたが言文一致運動以後の小說は描寫と云ふ立場に立つて居る。無論此の區別は明瞭には劃き得ない。明治の小說壇に眞に描寫の意義を解き始めたものは坪内逍遙氏の『小說眞髓』であつたが、之を形の上に具體しやうとしたのが山田美妙等の言文一致運動であつて、消極的に平易に讀み易くするのでなくて、寧ろそれと反對に難解になつてもいゝから氣分の微妙を寫し、再現の目的を達しやうとしたのであつた。

* * * *

尙ほ此の時代において直接小說の文體の變遷に關しては影響は無かつたが、

小說壇に安んじて詩壇に新運動が起つた事を忘れてはならぬ。卽ち明治十五年五月外山、井上、矢田部の『新體詩抄』が現れた事であつて、在來の詩形を打破し一時にテニソン、沙翁、キングスレー、グレー等の詩を紹介し、人口に膾炙せしめた事である。

第三章　言文一致體の創始（明治三十二年まで）

馬琴調の破壞——四迷と美妙——雅俗——浮雲——『だ』と『です』——文壇正倉院——『である』調——美妙と紅葉——雅俗折衷——書生氣質の文體——逍遙と鷗外——柳浪の言文一致——撥髮小說——觀念小說——ローカルカラー——樋口一葉——鄕土藝述論——飜譯——思軒調——鷗外と二葉亭

馬琴調の破壞者

馬琴の文調の特色たる掛詞文字鏁りを以つて飾つた七五調はもとより永く存在をゆるされなかつたものであらうが之を理論的に根抵から破壞したものは山田美妙及び森鷗外である。殊に鷗外が明治二十二年一月『今の諸家の小說論を讀みて』と題する論文で、小說と詩歌との區別を心理的に研究した後、

余等は散文の音響を借らずして心を動かすものを以て、詩學上比較的に純

なるものとなせり。此純なるものは十載の久き何れの國にてもかの猥然憂然たるものに掩はれたるが如き迹なきにあらず。故に余は近世に至りて散文詩の勃興せるを觀て、此純詩體の漸く將に暗黑裡より顯れんとするを喜ぶものなり。往時曲亭馬琴と云ふものあり。小說を以つて一時鳴り、之れに繼起するもの皆その武を追ひて還ることを知らず。然れども其の得意の文は純正なる散文にあらず美妙子の慧眼早くこれを看破したり。其の言に云く。文章と詩の眞の定義を、文章は節奏に因らずして物あるひは事を述ぶるもの詩は節奏に因りて物あるひは事を述ぶる者と定めこれを標準として馬琴生涯の文體の何れが眞を得たると問はゞ、前期の文却りて後期に優る。何故と言ふに、前期のは文章らしき流麗にて、後期のは歌らしき流麗なりと（新小說篇第七卷一回）洵に然り。馬琴が後年得意の文は殆ど全く七五の調ありて、韻こそ押さね、其一種の結語たるは掩ふべからず。今の小

說家は、其の文體は種々なるにもせよ、能く結語の小說を戀じて散文となしたり。亦た善からずや。

更に又

試に支那の文學を以て例となさん。その歷代の沿革を觀るに散文の體、六朝に至りて一變し、倂四儷六の文となりて、其の純然たる散文の本體をば何時しかに遺失したり。如何といふに四六文は散文にあらず、結語なればなり。是れ豈馬琴の流麗と同きものにあらずや。既にして昌黎等の偏起するありて、大に散文の復古を謀れり。是れ豈春の屋及其後繼者の作せる運動と等しきものにあらずや

と云つて居る。當時尙ほ俗耳には入ることが出來ず、したがつて般一の影響もさして大きなものはなかつた。けれども鷗外が我國にレッシングを紹介すると同時にそのラオコオン論をも輸入して、繪畫彫刻の差別などにつきても前人未

到な研究を發表して、識者間の文章に冥々の間に動搖を與へたのは忘れてならぬ事である。

吾人は明治二十年から三十年までの我が小說の文體の變遷に就いては、言文一致と云ふ事が最大の特色ある。その動脈をなして居る事を認めるのであるが、之れを議論の上に裏書きしたのは比較的すくない。たゞ茲に揭げた鷗外の詩歌散文の區別を比較的記念するに足りるものとする。要するに小說の文體が動搖に動搖を重ねて殆んど、停止しない有樣であつて、明治二十八九年頃にいたるまで、小說も詩文もあまり變化が激しすぎて全く標準がわからなくなり、明治三十年になつては太陽記者（適天）は東京語を標準にせよと叫び、關根正直は文法の統一を、大西操山は『文學界の新事業』と題して現在使用して居る言葉の矛盾を解決する唯一策は只別に國語を製造するにある、之れが爲には日本の學者社會を網羅する會をこしらへて、三十年四十年の大計畫で新國語を決定せねば

ならぬと云ふ議論を吐いた。

さて斯くまで文體を攪亂させた導火の作物は何かと云ふと、勿論、明治二十年に出た二葉亭四迷の『浮雲』と翌年出版された山田美妙の『夏木立』である。

浮雲と夏木立

『浮雲』は作者が日頃私淑して讀むだと云ふロシャのゴンチャロフの筆意を學んだもの、細微な描寫と云ひ、心理解剖の鋭利な點と云ひ明治四十年後に起つた自然主義の結果の作品と較べて殆んど大差の無いには驚く。『浮雲』の明治文學史上における價値は各方面にわつたつて偉大な影響のある點であつて、茲には詳しく論ずる事は出來ないが、其の文章と云ふ上から見て又吾人は山田美妙の上に置くに躊躇しない。山田美妙が當時議論の上からも盛に言文一致を主張し、且つ一生その主張と戰ひ、戰ひの渦巻のなかに戰死した熱烈な態度は吾人の讚美する處であるが、美妙の主張はその根抵が深くない。

今から考へると殆んど想像もつかない程であるが當時の文壇では、雅俗と云

ふ語が頻りに用ゐられた。そして文學は雅でなければならぬと云ふ桂園一枝が主張した樣な考も頻りにあつた。言文一致の主唱者の美妙までが此の雅俗の思潮に支配された。（尾崎紅葉は無論雅俗の本尊であつた）だから美妙は詩を書く場合には古い言葉を用ゐた。此の間の消息に就いては嘗つて美妙が

雅俗が標準

（一）吾々言文一致派が韻文には古の語格を猶ほ捨てぬ、其の仔細は新語格がまだ雅で無いためで無く、聲調の便利が新語格より舊語格の方に備はつて居るためです。

（二）吾々は言文一致が散文に舊語格を用ゐる必要を見出さぬ、其仔細は散文に於て聲調の便を論ずる所以は無く、既に左樣とすれば聲調外新語格にまさる所の無い舊語格を散文に必する效も見出せぬ爲です。

（三）古語が雅か、新語が俗か、吾々は左の場合以外に之を認別する能力を持

たぬと信じます。卽ち、言語の雅俗は決してその製造の新古によらず、又其體裁の醜美に因らず、只其の意味と用法とに因るものと信じます。

意味も雅、用法も雅であつて其の語は始めて雅。意味も俗、用法も俗であつて其の語は始めて俗。意味が雅、用法が俗、或は意味が俗、用法が雅と錯綜した時には雅俗の區別が充分明かにはなりません

(四)或は言語の新古、或は其の體裁の醜美、或は其の緣因を以つて言語の雅俗を定めるのは迷ひです。

(五)吾々が言語の雅俗に對して持つ考へは右の通り、何としても吾々が之を忘れて獨り舊語舊格或は新語格の一方を以つて正に雅或は俗と定めましやうか。

(六)今日の俗言が美術として今一段進步を受けたなら充分に韻文には適用が出來やうと吾々は思ひます。勿論雅俗の解釋は第三の通りにして後。

（七）第三の説を抱いて居る以上は吾々は新古の語に於て其の道理あつて通ずるかぎりは新古に限界を付けて何れを雅俗と定めません。

（八）語と語法とを混亂するのがいつも言文論の弊です。

（九）韻文を解する人の能力は目耳及び心の三から成り其の效力は心が第一、之に次ぐるが耳、之に次ぐのが目です。不韻文（卽ち散文）を解する人の能力も亦目、耳、及び心の三から成り、其效力は心が第一、之に次ぐのが目、之に次ぐのが耳です。右二者の相違と類似を圖に示せば

韻文………心………耳………目

不韻文……心………目………耳

（十）韻文が果して散文より人間の理解力の助けを多く受けるものか、是は前にも唱道した論ながら吾々には從ひかねます。韻文も散文も其の人間が有する理解力の助けの數量は相同じです。前の第九は其の數量の同じなのを

圖に示した物です。

(十一)文を誦して澁つて其眞意を盡さぬのは澁滯です。之を誦して澁らず其の眞意を盡くし得るのは不澁滯(假稱)不澁滯と樂調とは猶異なるべき物です。

(十二)其の情は盡くしても其の聲は必ずしも樂調ではありません、不澁滯で眞意は誦しても猶ほ樂調では有りません。

(十三)散文から起る發音(讀誦)の最上は不澁滯です。韻文から起る發音(唱謠)の最上は所謂樂調です。

以上十三條、是が、今始めて公言しますが吾々の言文一致主義の根本の論です。

沈默の二葉亭

と論ずるあたりは彼の主張のたゞ雅俗の問題よりほかに拘らぬ淺薄さを示して居るのではないか。是れに較べると二葉亭は別に議論として は何も主張しなかつたけれども、偶然に『浮雲』を出したのである。そして沈默の間に根底のある煩悶を經て意義の深い作物を公にして來たのである。逍遥の

『小說神髓』の主張も、美妙の言文の運動も、皆二葉亭の手にかゝつて豫想外の深い意義を以て具體化されて居る。かと思へばずつと後に主張されたローカルカラーなど云ふこともちやんと四迷の小說に織り込まれて居る。それやこれやを思ふと如何にも四迷は謎の樣でもある。何となく、Silver speech, but golden silence の面影がある。これをたとへたなら何と云ひ得やう。大古の原人が始めて宇宙の森羅萬象を見て神話を作る。とこの神話が其の人種後來の子孫の活動の全部を抱合する暗示となるやうに明治文壇にとつて『浮雲』は神話的作物である。作者の心はたゞ謙抑（ヒユミリチイ）と熱とがあるばかり。作者自分も何の說明もつかない範圍に屬して居る。

浮雲に就いて

アリストートルが所謂劇の三一致、即ち劇に時、處、事件が三つとも飛び離れてはならぬと云ふ規則、此れは日本では小說の上にも劇の上にも皆目なかつた。すくなくとも此の傾向さへ認める事が出來なかつた。文藝批

評と云ふ見地から見て、本居宣長が『源氏物語』に關して云つた事など今日の進步した批評眼から見て奇蹟と思はれる程に卓見を吐露して居るが、此の三一致論的な傾向は作品は勿論批評の上にも寸毫も彰れなかつた。

それが突然長谷川二葉亭氏の『浮雲』(二十年六月上卷出版)において彰れて來た。當時から文壇未曾有の新作だと云はれた位時流からとび放れたもので、其の規模は狹小で舞臺は主人公岡田一家の外には出ず、時日も一ケ月以內、小說に出て來る人物は文三、お政、お勢、本田のたつた四人である。前の亂譯時代の才子佳人の奇遇と云つた樣な極端に理想主義の弊害を發揮した作風が天下を風靡したに反して、此の地味な質素な作風は全く驚嘆そのものであつた。その作風において全然前驅者が無かつたと同樣に文體においても獨特である。

「アラ月が。……まるで、竹の中から出るやうですよ。鳥渡御覽なさいよ。」

庭の一隅に裁込むだ、十竿ばかりの纖竹の葉を分けて出る月のすゞしさ。

月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は椽側へ上つて座舖へ這込み、稗蒔の水に流れては金瀲灧。簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添えて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ籬によろぼい懸る夕顏の影法師が婆娑として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が忽ち螢と成つて飛び迷ふ。艸花立樹の風に揉まれる音の、颯々とするにつれて、しば／＼人の心も騷ぎ立つとも須臾にして風が吹罷めば、また四邊蕭然となつて、軒の下艸に喞く蟲のみ獨り高く聞こゆる。眼に見る景色はあはれに面白い。とはいへ、心に物ある兩人の者の眼には止まらず。唯お勢が口ばかりで

「ア、佳いこと。」

トいつて、何故ともなく莞然と笑ひ、仰向いて月に見惚れる風をする。其の半面を文三が偸むが如く眺め遣れば、眼鼻口の美しさは常に變つたこともないが、月の光を受けて些し蒼味を帶んだ瓜實顏にほつれ掛つたいたづら髮二筋三筋、扇頭の微風に戰いで頰の邊を往來する所は慄然する程凄味が有る。漸く文三がシゲシゲと眺めてゐると、頓て凄味のある半面が次第々々に此方に捻れて……パッチリとした涼しい眼がヂロリと動き出して……見とれてゐた眼とピッタリ出逢ふ。螺の壺々口に莞然と含んだ微笑を細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持つてゐた團扇で隱蔽して、耻かしさうなこなし。文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん」

但し震聲で

「ハイ」

但し小聲で

「お勢さん。貴孃もあんまりだ。餘り……殘酷だ。私が是れ………是れ程までに……」

トいひさして、文三は顏に手を宛てゝ默つて仕舞ふ。意を注めて能く見れば、壁に寫つた影法師が、慄然とばかり震へてゐる。今一言…………………の言葉の關を踰えれば、先は妹背山。蘆垣の間近き人を戀ひ初めてより、晝は終日、夜は終夜、唯其人の面影而已常に眼前にちらついて、砧に映る軒の月の拂つてもまた去りかねてゐながら人の心の測りかねて、未摘花の色にも出さず、岩堰く水の音にも立てず、獨りクヨ／＼物をおもふ胸のうやもや、もだくだを、拂はぬも、今一言の言葉の綾……今一言……其の一言をまだ言はぬ……折柄がら／＼と表の格子の開く音がする……　四迷

以上は後に論ずるにローカルカラーの自然描寫の一例にもなると思つて稍長

く引用したが、斯くのごとき文體は現小說壇の文體に比較してその字句の多少生硬不穩當の點はあれ、時日において三十年間のギャップがあると云ふことを一向認められぬではないか。さて此の『浮雲』の文章の由來に就いて

餘程前の事だ。何か書いて見たいと思つたが、元來文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで坪內先生の許へ行つた。何うしたらよからうと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかと云ふ。

で仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふまでもなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速先生の許へ行くと篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいゝ、この儘でいゝ、生じつか直しなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

所でこれは圓朝ばりであるから、それは、「私は……………でございます」

調にしたものか、それとも「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪內先生は敬語のない方がいゝと云ふお說である。自分は不服な點も無いでも無かつたが、直して貰はうとまで思つて居る先生の仰有ることであり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると「私は…です」の敬語調だ。自分とは別派である。卽ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので、「です」調に定めたと云ふ。自分は始め「です」調でやらうかと思つて遂に「だ」調にした。卽ち行き方が全然反對であつたのだ。……『余の言文一致由來』

と二葉亭は云つて居る。坪內逍遙の助言も此の言文一致にとつては大なる

だ主義とです主義

力があつたに相違ない。處で此の引例にある「です」主義の一例を示すと。

「しかし、なア」……

何が「しかし、なア」です。友禪の長襦袢に男靴は「ぶる」の脈體（みやくたい）です。連絡の無い無理な楔子（くさび）は轟く胸の兆候です。「見」と云ふ趣は言葉の外に髣髴として居る工合。悟ッたか、相手の書生の眼には微笑の雲。

「目と眉とは宜いかはり口が如何にも見苦いな。けれど後（うしろ）から見れば」……

思はず敏くなる力造の鼓膜。

「まあ……白も白いから……美とは見えるだらう。が匿すには及ばんて。見たゞだな、君も」

「でも」。透かし出したと云ふ樣な挨拶。

「見たンだ。見たンだ。挨拶が鈍い、勢が無い」。

やゝ根城は陷ちさうになりました。今の處、羨ましいのは米で男を洗つた昔の智惠です。『花ぐるま』の一節

此の「です」主義の生れるについても餘程の波瀾曲折があつたらしい。

私は始めは無論崇拜してゐた馬琴調に似寄つたものを書いてゐた。然るに此處に私の文章の上に一大革命が起つて來た。それは私が斷然馬琴の文章を捨てゝ、言文一致といふ新しいものに就いたことである。

　その革命の動機は何であるかと云ふに、私が西洋の文は言文一致であるのに氣付いたことである。も一つは英國文學史を繙くと、詩人のチョオサアの肖像が揭げられてある。チョオサアはもと作文を主張して今日の英文の基礎を作つた英國文壇の大勳功者、その人の傳記は如何に自分の頭を刺戟したであらう！私はその時から自分も彼の如く俗文を以つて文章界に立たうと決心したのである。此の時丁度大學敎授のチャンバアレン氏が、文明

と言文一致とは離るべからざるものだと云ふ論文を「羅馬字雜誌」に出して、盛んに言文一致の必要を絶叫し出した。辰巳小次郎氏などはそれに反對した。その議論は言文一致はロォマ字ではよいが、漢語の交つてゐる日本文には不適當だといふにあつた。すると今度は物集高見氏が神田の書肆中央堂から『言文一致』と云ふ木版の小册子を出版して、言文一致を皷吹し出しだ。此の本には上欄に平家、源語等の文章を置き、下にそれを言文一致に直した文章が載つて居た。時勢は終に熟した。玆に於てか私も決心して明治十九年に『風琴調一節』といふ言文一致の處女作を出した。其時の文章の語尾は「だ」で「………がそれだ。」「何々したのだ」といふ調子であつた。

然るに世間の攻擊は實に大したもので、「俗だ」と罵り、「下品」だと譏る。私は包圍攻擊の中心點となつた。で終にまた工夫して「です調」を使つて見た。そこへ二葉亭四迷君が突然「浮雲」といふ言文一致の小說を著はした。

文體は「だ」調であつたが、これは同君新案の「だ」で私が攻擊されたと反對に世間に喝采せられた。その後、同君は私に向つて「君のですの方が道理らしい」といはれたが實際に於ては私は敗北者であつた。

（言文一致の犧牲）

文章ははじめ下流に對する語法の方が以上のものより簡單ゆゑ、言文一致體の基礎となるだらうと思つたまま、此の文のとほり殘らずそれが地を占めて居ましたが、また此の頃になつて考へて見れば些し違つた注意も出て來ました故、今は大抵同等に對する語法をして地を占めさせて居ます。

山田美妙「夏木立」の序

又森鷗外が當時の事を記した次の一節は美妙の努力を正當に認めたものである。

「トランスクリプチオン」より一步を進めたるものは、近頃、大に世に行は

るゝ落語の筆記なり「百花園」と云ひ「花がたみ」と云ふ皆是なり、落語の筆記も亦音によりて之を寫したるなれど、その羅馬字會の爲す所に殊なるは單に音にのみ依らずして寢、假名などを正す處に在り然れども美術なる言は未だ必ずしも美術なる文ならず圓朝が辯は善しと雖もこれを筆に上ぼしたるもの庸劣なる小説家の文にも劣りたらむ雄辯法の研究をなすものは兎まれ角まれかゝる筆記を嗜讀する人は其の趣味の卑しさもおもひ遣られて氣の毒なるものなり。

落語筆記の類より一層高き趣味あるは世間に所謂言文一致なり言文一致體は假名を正し或る一定のてにをは用ゐて今の言葉を綴りたる文なり此の體の雄ともいふべき山田美妙齋氏の如きは美術なる言文一致體の文を作りて大に國文の進歩を圖られたり。森鷗外「柵草紙」

二葉亭と美妙とは所詮言文一致の大立物である。尚ほ二葉亭と美妙との文體

に就いては皮肉屋の正直正大夫齋藤綠雨がつぎのやうな事を書いて居る。

一、美妙宗、この宗には秘藏のお經あり言文一致と名く飽迄お經に醉つて衣紋をつくろふ外見上戶なり一頭はお難有を唱ふる者頗る多く小說の捷徑ここを渡れと大繁昌を極めたれど當節はチト甘酒流じやと口上を添へてこれが美妙宗の本體じやといふものはあまり開帳せぬが得手なり想ふに雜兵の服を着て敵將に近かんとしたる何某の軍略に傚へるものならん。或者はこの宗を銀流しと申したり不埒なることをと段々考へ見るに早く剝るとにはあらずして早く出來るとの謂なりし扨々名譽の事共かなこの宗の初級にはマア斯うやるべし「向ふから來たのは男です、下駄を穿て居ます、が跡が減つて居ます、そして頭は刈込前の散髮です、フケの雪が襟の麓に積つて居るさうです、是が女ならどうでせう髷を結つて居るに相違ありません」又時々千古未發の新說を挿むことありその雛形は下の如し「酒を猪口に注

げば猪口の形です、酒を桝に注げば桝の形ですと實に酒は方圓の器に隨ひます。水も亦其通りです、が水は醉(ゑひ)ません。けれども酒も水も流動體です」總じてこの宗は熱心に經文を誦するなり他宗の耳へ入らうとも入るまいとも斷えず休まで言文一致經をくりひろげゝること、頭に尊稱辭ゴを加へ「デ、ゴザイマス」で結べば御苦勞で御座いますと申たき程と知るべし

二葉宗

壺がオロシヤゆゑ緻密々々と滅法緻密がるをよしとす「煙管(きせる)を持つた煙草を丸めた雁首(がんくび)へ入れた火をつけた吸つた煙を吹いた」と斯く言ふべし吸附煙草の形容に五六分位費ること雜作もなし其の間に煙草は大概燃え切る者なり緻密が主にて本尊に向ひ下に居らうと聲かけるときあれど敢て問はぬなり唯緻密の算段に全力を盡すべし算段は二葉より芳しと評判されること請合なり

珍語新造語

さて言文一致が第一に惹き起こした影響と云ふのは、文體が當時の所謂俗文になつてしまつて、種々な珍文句が文章のなかにとりいれられた事である。當時の「早稻田文學」が、頻りに奇體な造語の亂出するを諷してつぎのやうなものを掲げた事があつた。

文壇博覽會

或人近ごろ文壇の正倉院に遊びしとて列品の目錄を寄せられたり重に輕文學壇の列品なるべし

(氣形)西鶴の脫毛、船來のペダン鳥、モネー鳥、通人氣鳥、生ぎ鳥、盲蛇、人眞似猿、シツタカ鰤、無腸公子、大口魚等

(器財)ネタ箕、ピガ箕、ソネ箕、螺大小品々、馬琴の斷絃、白うと絨の小具足、杓木定規、生木にて作りたる額品、笑の中の針、小さき錨數百

(食物)手前味噌、から饅頭、豆腐のニガリ、輕燒、世間水、向ふ水、じや水

（珍寶）小刀細工の藻屑、歐米大家の像（鳥羽繪多し）、テニハのみにて綴れる論文、焉哉乎也のみにて綴れる小說、魂入れざる涙佛（なみだぶつ）、天狗の羽

案ずるにこは參考室を見おとしての報道ならむ。

美妙にも珍語例の澤山ある方で曾て意地穢き男を形容して「餅と酒とが胃の腑の中で決鬪を試みます。腦髓の政府は食慾の法律を設けてこれを禁錮罰金に處しました」と云ひ夜になるのを「太陽は今まさに沒します、沒すれば日は暮ます。暮れゝば地球の中は夜です」など云つた。美妙は又頻に外國輸入のマーク、、。？！………――（）「」『』‖＊＊＊など多くつかひ、口の惡い綠雨は之を評して「極めて器械多し」と云つた。

が其の文章の特色に就き彼がひそかに言文一致にあらずばかくのごとき變化自在に生きた事件の刻々の推移が寫せまいと誇つたのは次の樣な一節である。

この隅田堤を、一散に驅來る車、輪が二あります、乘つて居るのは女です。

夜目にはしかゝと見えませんが、年の頃二十一二色は白く髷は島田です、車夫は汗を拭き〳〵襦袢のシミの材料を我知らず造つて居ます。車や提灯をつけんか、巡査は叱りました。ハイ只今、車夫は答へました。蠟燭がないの？女は問ひました。提灯を點けてから速力は前に倍しました。恰も韋駄天の如くです。が酒代の有無は知れません、三圍前迄來た時横合から出た一人の男、突然女の頭の物を、奪て逃ました、女は驚いてアレーと一聲、盜賊！盜賊！叫んでも及びません、發矢――雲を霞です。

今日となつて「シミの材料」とか云ふ文字は餘程變にきこえる。その當時も笑つたものは多かつた。が美妙は得意になつて「欠伸の原素」『笑窩の校正」などてふ珍語を用ゐた。雜駁なモザイックの様な此れ等の文章が當時の讀書社會の趣味にはそれでも尙ほ新味があつた。

此の亂脈な文體に對して尾崎紅葉はどう云ふ態度をとつたか。紅葉はもと美

紅葉の「である」調

妙と共に言文一致の最初の實驗者と傳へられて居るが、彼は美妙程にザックバランに俗になることが出來なかつた。彼が江戸趣味は何らかそこに新機軸を出さねば滿足しないものがある。即ち二葉亭の「だ」調、美妙の「です」調に對して、彼は「である」調と云ふのを起したのであつた。紅葉は此の意味でもその雅俗折衷の傾向を發揮して居る。美妙紅葉はその文章の根柢が雅俗の相對矛盾に苦み、前者は俗を專にして、後者は絕對に雅を保存しやうと努力した。けれども二葉亭だけは雅俗以外の別な根柢から出發したことをわすれてはならぬ。彼には圓朝と云ふ地山の石があつたことを忘れてはならぬ。

美妙と紅葉

山田美妙の言文一致の主張が、直に紅葉に彰はれて、『色懺悔』となる。『色懺悔』は美妙の『夏木立』『胡蝶』と同樣に言文一致試作の代表作のやうに傳へられて居るけれども、美妙と紅葉とは全然出發點を異にして居る。

明治二十二年、神田南乘物町吉岡書店の主人、理學士吉岡哲太郎氏が『新著

百種』と云ふ雜誌を出す事となつて、其の第一輯の小說を尾崎紅葉に依賴したのである。此の時は山田美妙が硯友社に居るを快しとしないで、別に自己獨特な見地から言文一致を創めて盛な勢で『夏木立』を出し、(夏木立は叢書にして雜誌の樣に出版し每篇言文一致の作物を載せた）世間に名を成して居た折からであつたから、紅葉の苦心は別にある。

卽ち紅葉は會話を多くとりいれる爲めに文章を碎いて平易にしたのは事實であるが、必ずしも獨特な西鶴調を捨てたのでは無い。寧ろ之れと反對に、西鶴に三馬、也有を加へた樣な一新文體を組織したのであつて、美妙とは慥かに逆まに出たのであつた。

此の山中の佗住居。遁世してより若干の月日、今の法名だに知りて呼ぶ人あらざるに。まして俗の名……若葉……他人の名か。鈍や我が耳に珍らしくも聞こゆるなり。我が名……若葉……俗の名……俗の時。それを思へば

早や涙。聲も萎れて。

「はい。若葉と申しました。」

書置の名宛は若葉。討死せしは慥にその夫。傷はしやと思ふ心はいと切に

「運あらば目出度歸ると是には書いてござりまするが。あなたの其のお姿では。まさしく討死なされた事と存ぜられますが……。」

「仰せの通り。敢ない最後を遂げました。」　紅葉『色懺悔』

の一例を見ても、洗練幾十度かしらぬ舊文體であるが、たゞ地の文よりは成るたけ會話を多くした處に言文一致の體が出來たのである。

雅俗折衷　が間もなく會話だけ俗語で地を文章體にすると云ふ不調和が堪えがたく醜惡で不便に感ぜられ出したから、雅俗折衷にない全然クオテシヨンを拔いてしまつた文章を以つて全篇を書きあげてしまつた。『三人妻』前後兩篇合して三百八十頁、『伽羅枕』二百六十六頁、悉く地の文章である。

その一例をあげるとこ

大殿には十七年前に御逝去なし給ひしぞ！あつとお花は膝なる手をすべり落し、見開く眼に用人の顏を凝視て、少時は瞬なかりき。驚駭はさる事なり。愁傷の程はさぞやと察し入れど、とさまざま丁寧にお花を慰め、當代の殿に此の次第を言上すれば、本意なかるべし不便の事なりとて、私に御謁見を許され、數々の下賜物もありて、此の事は家臣の手前あれば表沙汰にはしがたし。我とは同胞に相違なけれど、其の地にて緣切りたるからには他人と思へ、此の後音信不通なるべし。我に一人の姉あり、今は柳生某守に緣組みたるが、其方のことを詳知りて、女子の同胞なき身はその子懷し、一度は名乘りあひたきものと日常仰せ給へば、姉君喜びたまふべきに內密に對面せよかし。我より添手紙せむとの御意をかの用人取次ぎたれどお花は思ひに思ひし實父亡くなりたるに氣拔して、もはや窮屈なる思ひして、

姉などに遭はでもと思ひければ、頼みなき身の杖になることもやと、難有く御禮申して御手紙と下賜物(くだされもの)を戴きて歸りぬ。 伽羅枕

廣津柳浪

四五年おくれて廣津柳浪は小說を全部會話ばかりで仕あげて見たいと云つたのであるが、紅葉は之と正反對に地の文ばかりで行つた。所詮江戸趣味と深刻趣味の根柢の差が這麼對照を來たしたのであらうが、紅葉は寫實主義の作家でありながらも、寫實主義が當然導かねばならぬ筈の言文一致體に斯樣な反對な傾向を産むやうになつたのは、當時の寫實主義が內面から發動しなかつたと云ふ何よりも明白な證據である。寫實主義者と云ふよりは事象一切を必ず江戸趣味の雰圍氣(ふんゐき)に溶かし込まねばやまぬと云ふ强い個性を持つた氣分主義者と云ふのが至當である。

紅葉の苦心

紅葉の雅俗折衷は遂に小說から全部會話のクォテエションを拔き去つてしまふと云ふ、今から思へば沒常識殆んど狂に近い事をしてのけた

のであるが、流石紅葉も斯うまで會話を度外視しては又窮極してしまつた、今度は全々正反對に秋毫も地の文の無い會話ばかりの小說を書き出した。『夏小袖』『戀の病』など何れもモリエールを飜案したもので百頁以上の小說であつたが之も一行たりとも地の文が無い。

紅葉が斯く〱の如く極端から極端に、それも何年か時日の間隔があると云ふのでは無くて二十四年の十月地の文ばかりの『伽羅枕』を書いたかと思へば翌年の八月會話ばかりの『夏小袖』を書きその年の暮には又會話沒却の『三人妻』に筆を執り又その翌年の春に會話ばかりの『戀の病』を書いた。丸で猫の瞳のやうに極端から極端に飛んで歸つた。斯う云ふ現象はどう云ふ譯で起つたのであらう。當時の人は只紅葉が才氣の走るにまかせてやつたのだと思つたかも知れぬ。あの瘦せ我慢の强い才人紅葉が、雅俗の調和のうまく出來ないのに憤つてそん麽ことをしたとも思はれる。が、吾人の說明は別にある。曰く內容から

起らなかつた寫實主義に惱まされたのだ。坪内逍遥は堂々と『小説神髓』に逸速く寫實の旗を樹てたが、それを樹立すると同時に描寫論で根柢を革新して置かねばならぬを忘れてしまつたのである。西鶴流の文章で、西洋の審美學から來た寫實主義を具現し完成しやうとしたからである。紅葉の一身にゾラと西鶴とが爭つて苦しい煩悶の怨靈を現はしたのである。

此の意味から云つて逍遥の『小説神髓』は我が文壇を片足だけ引つ張つてはやく進歩せよと促したもの丶、進歩する方ではどうにも苦しくて堪らぬ。若し長谷川二葉亭が『浮雲』を世に問ふと同時に、『新描寫論』を世に出したなら、紅葉はあの樣に文章に鏤心彫骨（るしんちやうこつ）しなかつたかも知れぬ。此の意味からして紅葉が文章に種々苦勞を重ねたと云ふのは、單に凝り性とか藝術的良心とか云ふ以外に、別に深い意味の時代苦があつたと觀察され得る。

坪内逍遥の小説界における新運動は、その主張する寫實主義上の見解より、

『小說神髓』と書生氣質

『小說神髓』の一書が在來の小說の內容を根柢的に革新したことは明白であるが、單に小說の文體と云ふ上から見ると、其の影響は左程大きくは無かつた。明治十八年に出た『書生氣質』は『小說神髓』の主張を具體的にした創作、卽ち寫實主義の粉本として世に出たものであるが、『明治文學史』の著者岩城準太郎が指摘した次ぎの四ヶ條の文體上の不徹底は中つて居る。

第一、『小說神髓』に「模寫主意の小說には求めずして誹刺諷誡の法備はり暗に人を敎化する力あり」と說ける旨を實にせる者ならむも開卷第一に「其れとは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誡因果の關係云々」と叙べしが如く本文中作者自ら此主旨を說ける箇所屢々見えたり。其の筆致も亦描寫に少くして說明に多く世態の模寫よりも寧ろ其の解說に近からむとす。

第二、人物の心理描寫に筆を着けたりと云ふも其の極めて低き程度に於て然

るのみ。主人公として特に提出すべきなく各人の性格の悉く模糊たる類型に終れる所は所謂氣質物の常態として暫く之を措くも全體の結構到底事件に重きを置くを免れず。而もその變化は概ね偶然の機會に出で人物の性格より來る必然の結果ならず、奇禍奇遇等舊時代傳奇の面影を存する事多く特に大團圓に近づくや急轉直下奇機續發偶然は偶然を生みてめでたしめでたしとなる所宛然夢幻劇の型なり。

第三、新舊思想の衝突を描いて切ならず內面生活に存する深刻なる衝突を看過して唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せる觀あり。

第四、其の文體においても未新時代の寫實小說に相應する迄に發達せず、全體の體裁爲永一派に比して著しき進步なく特に地の雅文は掛詞文字鎖り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ゐたり。其の他通篇諧謔に富みて輕妙を極むと雖も多くは地口駄洒落の類にして所詮一九魯文の餘唾に過ぎず。

以上は現在の批評壇から見て、『書生氣質』に峻烈な批判の鞭を加へて見ての結果であつて、恐らく是れ以上に此の小說を非難する事は不可能であらう。また此の四ヶ條の缺點に就いては作者逍遙が無理解の爲めに生じたものでは無くて、作者に十分の理解があり新理想もありながら、何分にも周圍が周圍で先づ此れ以上には出ることが不可能事であつたと見ねばならぬ。が要するに內容が飛び離れて新くなつたに比較して、此の新內容を盛るべき器は案外に舊いものであつた。元來坪內逍遙は文章において馬琴の流を汲み深くそれに浸つて居るから、內容上の猛烈な革新熱があるに係らず、外形は何處までも德川時代文學の大殿將の如く、今日に到るまで、その複雜なる思想を形に彰はすに、『小說神髓』以來あまり變化の無い自家一流の文體で一向不都合を感じて居らぬ。

逍遙と鷗外

逍遙が今の早稻田大學、昔の東京專門學校に新たに文學科を創設するにあたつて、根柢の異つた和漢洋三文學の調和を主眼とした當時もさして

變化もなく全然自分獨特で終始して居る。此れ森鷗外と面白い對比をなす處であつて、鷗外の文章が甚だしく敏感で常に根底を革めて變化するに反し逍遙の文章の同じ根底に立つて漸層的に進むで來たのを想ふと二家の性格なり事業りりが能くわかる。鷗外の文體の變移のやすやすとなされるのは田山花袋も之を評して

鷗外は新時代の文章に內容の方面から非常に大きな影響を與へた人だ。單に文章として見ても、大家の風があつて飜譯の文章は思軒などとは大に趣を異にして居た。あの堅い文章が柔かい『染ちがへ』となり、それから今日に至つたことを考へると型を破つてドシドシ出て行く態度がいかにも羨やましい。『文づかい』や『うたかたの記』を書いた人が『心中』だの『百物語』だのゝ文章を作ると云ふことは不思議な位だ

と云つて居る。

柳浪の新努力

美妙が『夏木立』や『蝴蝶』やにおいて、又紅葉が『色識悔』によつて小說壇に言文一致體を創設しやうとした努力は、勿論文章を平易にすると云ふ意味ではなくて、微細な刻々の感じを表現するには是非とも現在用ゐて居る生きた言葉を用ゐねばならなかつたのである。言文一致を試みた點で美妙齊よりも早かつたと傳へられて居る廣津柳浪の當時の言に

「言文一致はかくのに易いといふのは、恐らく眞面目に試みた事のない人の云ふ事だらうと思ひますね、言文一致が流行するから、己もやつて見やう位の人の說だらうと思ふ、一體乾燥無味である言文一致を以つて人物を眞に活動させてゆくには非常に困難なのです、言文一致を易いといふのは研究したことのない人の云ふことです、今の批評家には發句をつくるとか、新體詩をつくる人が多いやうですが、其如頭をもつて見るから言文一致が易いなどと云ふのでせう、詰り主觀的に傾いてる頭を以つて、客觀的

にかゝうと力めてゐるものを見るから、矢鱈に非難もするのなんでせう。

とあるのを見ても言文一致試用者の意氣が仄見えて居るではないか、しかし此の初の言文一致はあまりものにならなかつた。

言文一致の試錬

かやうな言文一致は當然ひとつの試錬を受けずには濟まぬ。試錬とは何であるか、即ち西鶴や馬琴やの雅調に養はれて來た紅葉露伴等の作者の思想が、果して俗な平板平調で無味な言文一致で盛り切られるであらうか。紅葉露伴の身にとつては如何にも書き馴れ捿み馴れた雅調の產家に後ろ髮をひかれる。たゞ語尾を『である』『のだ』と變化させたばかりでは堪え難い醜を感ずる。鶴的で到底滿足が出來ない。流石は山田美妙、言文一致主張の音頭取だけあつて、死ぬるまで言文一致でやり通したが、紅葉露伴はさうは行かなかつた。會話だけは絕對に言文一致としても、地の文の敍景や抒情やはどうしても有りきたりの雅文を用ゐないと腹の蟲が治まらぬ。紅葉露伴のみならず當時の作者

にあつては此の雅俗の衝突矛盾をどうして調和させやうかと云ふのが共通の問題であつたが、遂に紅葉が『雅俗折衷體』と云ふ旗幟を樹立した。紅葉は自分の家の客間にも雅俗折衷の扁額を掲げ、西鶴調を盛にやりだし、露伴も之と同時に『風流佛』『葉末集』等の小說において自家獨特な圓滑自在な雅俗折衷文を出し、紅葉も『伽羅枕』『三人妻』で新體を開き硯友社一派を始め此の文體が一時小說壇を風靡してしまつた。紅葉露伴によつて雅俗折衷文が試みられたのは實は明治の文壇に西鶴の文調が將に消えんとする燭光が一きは輝いた樣に死に花を吹かせた樣なものであつた。

が雅俗折衷體の峠を越して再び小說壇に地も會話も全部言文一致が主張されるやうになつて、はじめて落ち付いた一文體一藝術品に完成しあげられたのであつて、美妙を先時代の創始者とするなら、此の大成者は柳浪風葉花袋である。特に柳浪は此の間にあつて餘程苦心したものであつて、明治三十九年出版の『唾

玉集』（青々園宙外編）にのつて居る柳浪の『今後の小說の文體』に就いての談話の數節を拔いて當時の文體變遷上の機微を偲ぶ。

將來の小說の文章は、言文一致でなければならないし又自然爾なると思ひますね、誰も云ふ說であるが今日の儘の言文一致ぢや無論いけません。けれどもです、例へば雅俗折衷にある一種の韻致の如きも段々注意してゆきさへすれば、言文一致にも出來ないことはないと思ふ、私が言文一致を用ひてゐるのは、決して難きを避けて易きに就く爲めにやつて居るのではありません、詰り種々の人物を描いて活動させたいと思ふ考へから這入つたものなんです。斯う云ふ風にかくには、是非俗語の對話を用ふることの必要を感じる、對話は俗語であつて地の文が雅俗折衷では不調和のやうな氣持がする、其の爲めと今一つは作者が成るべく作中の人物に就いて說明的の筆法を用ゐないやうにとの心掛けからも、自然言文一致をとるやうになりま

した、例へば人物の性格や人物の心の變化せる狀態などを見せるにも、作者が說明して讀者に合點させるやうな事はせずに其の自然の働きで其の趣の見えるやうにと思つてゐるのです、斯う主義を立てゝ見ると、雅俗折衷文を用ひると、其の煩ひは受けるが、其の利は受けることが出來ません。何故かと云へば、一體雅俗文の長所は景色を寫したり作中の人物に代つて說明したり、其の外形容することにあるのです。然るに今說明的の筆法を棄てゝ雅俗折衷文を取れば全然その面白みはなくなくて仕舞ふ。

柳浪が此の樣に誤つて居るにもかゝはらず尙ほ他の一節において雅俗文で行くと文章の面白味で助けて行くから讀ませるには幾らか樂であるが、言文一致では直に人物その物の活動を見せやうとするから一層困難なのであらう。

と云つて、遂に讀み易いと云ふ點で、雅俗折衷に屈服して居る。此の讀み易い

と云ふことが雅俗折衷以上になるやうになつて、始めて言文一致は完成されるのであるが、之れは遂に柳浪風葉の力では出來なかつた。

是れは要するにまだ文章と云ふものに囚はれて居たから言文一致が讀みにくゝ思はれたのであつて、文章と云ふ文字の枝巧から離れて新式な描寫論から內的な大革命を起した田山花袋が遂に言文一致の最後の最大な功勞者である。けれども花袋も理論の上でこそ描寫論を唱へたれ、その著した小說においてはさう馨しい新しい匂が溢れて出なかつた。何故ならば花袋自身も嘗つて雅俗折衷の文章をかき、又文章家として抒情文や紀行文やを得意がつた昔もあつたからで、根本から生れ變ることは不可能事で、月桂冠は寧ろ今まで雅俗折衷など云ふ小說を露更書いた經驗の無い島崎藤村や國木田獨步や正宗白鳥の手に落ちやうとして居る。

短篇小說と云ふものゝ起つたのは明治二十二年『國民の友』に端物小說即ち長

短篇小說の起源

篇を一部づゝ切つて出すことを始めてからである。最も長篇を端物にして出す風潮は前からもあつたのであるが『國民の友』の初刷が一時に美妙齋主人の『蝴蝶』春のや主人の『細君』思軒居士の『探偵ユーベル』(飜譯)を出して一時話柄となつた。これにつき坪内逍遙の當時の記錄に

件の端物以來(件は右の國民の友の小說なり)世間の小說が總て端物形となり前年の如く册子の小說を出す事稀になりぬしかれば斯如くなりしは『國民の友』の影響かと云ふに是は自ら別の理由あり他なし此の以前より文章推敲の必要を感ずる者又之を說くもの交々出で暗に糊口の一學にかく俄文客を抑へたり『國民の友』の推敲論(筑水漁夫)の如きは其殿なりしかるに大手腕あるにあらずば長篇を推敲せん事難ければ漸く名を重んずる餘り小說次第に短くなれり、さりながら此現象には尙ほ外に理由あり、一つは社會が骨の無き長物にあきたると一つは小說雜誌が流行して作の短かきを貴びし

が故なり……………以上理由さまざまなれど總括して云ふ時は世人の目漸く肥えて文章の妍醜に心附きしと著者が其名を大切に思ひはじめしによる。

此麼次第で先づ短篇小說が『都の花』にあらはれ又此の年新たに發行された『新小說』において思軒居士竹のや主人南翠外史等が短いものを書くやうになつた。此の短篇が糊口の爲めに書く人減り名の爲めに書く人殖えると云ふ結果を產み、文章を重んずるの風頓に盛になり、一方には高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』が出る。それと同時に文章の彫琢盛なると共に浮華虛飾の弊が相伴つて起り、小說家の責任論が出たり、民友社側からは「文學の目的は人を樂ましむるにあるか」など云ふ論鋒が突き出され、小說の內容論がきざし初めて來たから當時の作家には文章に關して動搖が多かつた。此の動搖の間に言文一致が鍊られて來た。

尙ほ此の他に言文一致以外では森田派の飜譯や紅葉流の折衷やがあつたが、

特に注意せねばならぬは西鶴が始めて我が小說壇に復活して來た事である。其の頃西鶴の本など世間に見やうと云つたつて見られぬ位であつた、僅に淡島寒月氏が之を珍藏し、愛讀して居たのを露伴や紅葉やが借りて讀むで、遂に眩い輝きで西鶴のリバイバルが出現したのであつて、二十二年の暮、蝸牛露伴が木曾の天外から飄落して『風流佛』を出すにいたつて西鶴熱が白熱程度に達し、我が小說壇に牢として拔く可からざる影響を胎すやうになつたのである。

東西新聞小說八宗

要するに此の明治二十二年は小說の文體と云ふことが非常に問題になつた年であつて、女學雜誌が近代文三家（德富森田簑庭）とか近體小說十家を擧げ『東西新聞』が小說八宗を擧げて重に文體の上から小說を論じたなどその證である。

撥發小說

一、本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと練馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、

不羈など云ふ想像を絶えず念頭に蓄ふべきこと、
一、總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと、强いことに心を注ぎ、兼てやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得と致すべき事、
一、『鬼の目に涙』『一寸の蟲にも五分の魂』『武士は喰はねど高楊枝』『柔能く剛を制す』など云ふ説を毎朝百遍づゝ唱へてよくよく服膺すべきこと。
一、言葉使ひはモサ言葉を男子の理想とすれど今更に死語を復活すべきものにあらねば、只精神を彼れにとりて今様の言葉を用ふること。
一、總て奴（め）と云ふ尾語を添へ用ゐて、憎々しげに物すべきこと『うぬ美人め』『うぬ天人め』『うぬ幸福め』『うぬ風流め』『うぬ文學め』の類なり。總じて喧嘩口調をよしとすること。

是は明治二十六年の『早稲田文學』誌上に載せられた小說學校撥鬢科の敎則と

云ふものである、村上浪六の小說に對する罵倒冷笑の意を籠めた辛辣な評であるが、能く浪六の文體の特色を發揮して居る。穿ち得て妙である。筆が極めて粗笨で殆んど荒唐無稽であつたが浪六の書いた『三日月』『井筒女之助』『奴の小萬』『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』等は盛に讀まれた。浪六の筆は尙ほ今日と雖も多數の讀者を持つて居り、『五人男』『八軒長屋』『馬鹿野郞』など版を重ねて居る。

浪華節を小說で行つた樣な此の文體は當時寫實傾向と直反對に出たのであつて、嚴密に云へば小說では無くして物語である。だからして趣味は何時も事件の上にあり、文章はたゞ氣拔、磊落奔放で最も讀みやすい。細叙してくだくだしい面到を見ずとも、寄席で浪華節を聽いて居る樣に慰樂的で且つ興奮的である。

づう〳〵しき野面のツそりと牛の如き根性を備へながら、またその機敏さは風に毿つて燕の飛ぶに似たる黑田健次が心のうち、もはや佐原男爵夫婦

は我が掌の物として半歳一年を此まゝ此家に喰潰すは何の苦もなけれど、長居して裙から襤褸の下り藤を見られむよりは、世諺にいふ前途を遁る遠目の傘の善い女房、わざと放れて絕間なく附纒はむと、取次の書生に一圓の煙草料を呉れて馴染みつゝ

是などはその一例であるが、元來浪六の出現は偶然的であつた他の作家のやうに冷かに文壇の傾向を觀望したり打算したりした結果書いたのでは無くて、泉州堺の小役場の書記と云ふ彼の前身から一足飛びに新聞小說をかき出したのである。寫實派の人から見れば、大閤樣でも恐しいものは闇夜に何とやら此の無鐵砲な素直な文體には隨分度膽を拔かれ、浪六その人は手剛い飛入り、全く怕しい他山の石とせられたのである。

觀念小說の起るまへ

觀念小說と云ふ部類の中では泉鏡花の『夜行巡査』と川上眉山の『うらおもて』廣津柳浪の『黑蜥蜴』の三つを標本とする。

觀念小說の前驅的にあつた春景は寫實小說と撥髮小說とであつた。明治廿五六年後三四年間の小說壇が必至的に要求した小說の一體である。當時寫實派は極端にその弊害を暴露しだしたのであつて、所謂逍遙が主事派鷗外が個想派と盛に寫實の惡傾向を論じた後に生れたものである。逍遙の主事派と云ふのは氏が讀賣紙上に『小說三派』と題して主事派、性情派人間派と分類して、舊作家のやうに事件ばかりをゴタゴタと書く主事派では駄目、性情性格を描かねばならず、更に進むで完全な人間血の通つた人間を出さねばならぬと敎へ、加之當時の小說壇に主事の弊ばかりあつて性情派も人間派も秋毫も無いと痛論した。此は氏が明治二十三年に發表した論文で、同時に森鷗外もその得意なハルトマンの哲學から類想個想小天地想と分類して、逍遙と同じ樣に類想個想の惡弊に落ちてしまつて、矢鱈に事實を並べて、淺薄を極めるやうになつて、

明治二十四年の事ばかりけろりかんとして見てあらうか雪の白さ年ごろ添

うた亭主の身の丈積つて見ずとも知れた事なりしかる所當今の社會小説に見られよ一概には申されぬが一方は十が八までは「よくつッてよ」の寫實一方は鶴の毛衣をきた廿四年度の孃さま若旦那、兎角に廿四年度を離れぬは止むを得ざるべき自然の沙汰なれども特殊相に偏つて普遍相がズブ無いゆえ昨日の目にはめでたけれど今日の目にはおかしくなし酷評すれば場當りの政治小説と叔父甥の間柄なり。

と逍遙がその小説的批評文『梓神子』の一節に云つて居る通りになつた。更に之に加ふるに元祿文學復興と云ふ當時の形勢は、沃艶な色魔界を寫してその實想を得やうとし、いき、いなせなどますます外形にとらはれだした。此のいきいなせの進化した樣な撥鬢趣味は益々粗笨淺薄となり、更に當時の社會には日清戰爭と云ふ多忙なことさへあつて、江見水蔭の軍事小説などが飛び出す時代であつたから、小説壇は一種の闇黑時代であつた。這麼闇黑時代的な混雜に旗幟

を樹てるものは何時の時代何處の國でも必ず傾向文學である。

觀念小說の文體

卽ち新しい小說は何物か寫實以外にあるものを捕へねばならぬ。あるものとは社會を如實に觀察した後に得る結果、作者が社會に對して懷抱する一種の觀念、勸善懲惡とは全然別な意味の解決小說主觀小說が、鏡花眉山の所謂觀念小說であつた。だからして小說が何處か議論を包むだ袋のやうになる。自然主義の具體的先驅者の獨步の小說が議論的になつた樣に、寫實の暗黑面に一導の光明を輝かさうとした鏡花眉山の文章も、二人ともあのやうな纖麗妖艶な筆を持ちながら何處か議論的になつて居る。同時に觀念小說の傾向が文體に及ぼした影響はたゞ小說を議論的にしたと云ふのであつて、寧ろ惡影響と云ふのを至當とする。だが觀念小說の傾向が、當時の小說壇に題材を全く一新したと云ふ功績は甚大なものであつて、その文章を議論的にしたと云ふのは作者があまりその理想を表すに專らであつて、事件が自然に遠ざかり、社會

観を體現しやうと急ぎすぎてしまつて、心理解剖も微細なプロセスも描かずにしまつたのを罪とせねばならぬ。例せば觀念小說の代表作とも見るべき川上眉山の『うらおもて』が全體議論文であつて、主人公波多野十郎と勝彌との議論的會話が八割の頁を費し、

我は志を翻へせり。庶幾くは今よりして其善惡を超脫したる一步高き人となる事を得べきか。我は再び御身に謝す。御身はまこと我が爲めに有難き道師なりき。曩に我は御身の好誼に對して少しは人らしく報ふ處あらむといゝし事を覺ゆ

とか。或は

我嘗つて世に弄ばれたるが故に飜つて世を弄びたるのみ。我は既に我が善を味ひ盡しぬ。また我が惡をも味ひ盡しぬ。我は善の苦しみを知つて其の樂みを知らざりき。惡の樂しみを知つて其の苦みを知らざりき。我はたゞ

飽まで我意を振はむとせり。端なくも今日とは或る大なる力によつて遮られき。我は愕然たりき。あゝ知らざりき知らざりき

など云ふ文字がザラに出て來る。これがその昔西鶴張りの文字を連ねて、「涙の雨も凌げぬ浮世」とか「戀の流れをせきとめた思川」など云ふものを書いた眉山其の人の文體が所謂觀念小說によつて受けた影響であつた。

觀念小說より社會小說へ

觀念小說とは聽て主觀小說の謂である。惡質な輕薄な寫實主義を父に持ち、お轉婆あがりの撥鬢小說を母に持つて生れ出た胤の觀念小說も、遁れぬ遺傳的運命の拙なさに三四年たゝぬうちに耄祿せねばならなかつた。若い小說家の生若い主觀から蒸しだした觀念とやら、實世間に經驗ある人の眼には、這麼小說は幼稚空疎で讀み續けられず、高山樗牛が

一言すれば今の小說家の根本的缺點は是の實世間是の活社會の共同趣味を捉ふることと能はず、其の主觀性の餘りに幼稚に且つ狹隘なること

と喝破した通り、犢牛ばかりでなく早稻田文學記者も新小說記者も同樣な批評を盛にしだしたのであつた。其處で小說の傾向は自ら成るべく現在の社會に接近し成るべく多數の人に興味を與へ得べき人物事柄思想を表現しやうとする樣になり、現世的社會的な寫實風が鼓吹されだし、その結果成るべく現在の流行の言葉衣服などを細寫しやうとする所謂末節にのみ拘泥する淺薄な作風が出て來るやうになつた。宙外の『緣不緣』『新機軸』抱月の『衆生心』柳浪の『縺れ糸』『骨ぬすみ』天外の『三枚襲』などから云ふ傾向の間に產出された作物であつて、お蝶は十五歲ばかりで、普通の容色(きりやう)で決して醜(みにく)い方では無い。眼に愛嬌が無いのと、顏が長過ぎるのと、頭髮が縮毛と云ふほどではないが、大うねりにうねつて居るのとが疵であるが、近所の若物等の月旦(しなさため)にも十の指の內には數へられる方で、母親のお爲が宅(うち)のお蝶はと自慢をした事もあるさうだ。輪を太く榮三郞好(えいざぶろうごのみ)に結ひ、朱塗の櫛に深く前髮を押へて、もみあげを濃く

見せる爲めに後毛を態と垂げて、其の先をぷッつり切揃へて居る。新秩父の黃の勝つた糸入の牛房縞の袷に、菊盡の大形の唐縮緬と紫色の綿博多の晝夜帶をお太鼓に絞めて居るが、これは不斷着に今着替へたところで簪兒も手箱の内に藏はれたところである。柳浪『骨ぬすみ』

是が當時又社會小說と呼ばれるものゝ端緒をなしたのであるが、社會小說の價値に關しては高山樗牛金子筑水等の斬魔的な啓蒙的な批評があつて、大なる勢力を得るに至らず、殊に文體の變遷と云ふことから考へる時は何の變遷をも與へなかつたと云ふ事が出來る。

井原西鶴の影響

井原西鶴の影響が我が小說の文體に現はれだしたのは明治廿三年であつて、尾崎紅葉の『二人女房』と『伽羅枕』と及び幸田露伴の『葉末集』とをその標本的作物とする。西鶴の復活に關しては內田魯庵の綠蔭茗話中にある左の一節を籍りて當時の事情を偲ぶ。

西鶴が正しく明治の文學史に影響を與へたるは爭ふべからず。紅露以下の文學は畢竟元祿復興の紀元を開きしなり。而して其復興の起源を尋ぬるに本と愛鶴軒書棚の故紙堆裏より來る。愛鶴軒は淡島氏、名は寶受郞、今は向島弘福寺の境内に住す。初め淺草森川町に在りし頃中西梅花、尾崎紅葉、幸田露伴等諸子屢々其廬を叩きて文詩を談ぜしが、之より先き明治八九年頃淡島氏は小川町の古本店某方にて古書一とからげを購ひし中に偶然西鶴の置土產を發見したり。豫て京傳種彥、馬琴等の隨筆にて其の名を記臆せしかば日夕繰返し〳〵繙讀して終に自づと其の妙趣を理解し其の後胸算用一代男を讀むに從ひて愈々獨得の趣味あるを喜び花晨月夕暫らくも離さず之と親みしが此の時西鶴あるを知るものは極めて少かりき。勿論饗庭篁村氏等は既に涉獵しつゝありしがたゞ元錄の珍書として愛翫せしに過ぎず。之を文學上の價値あるものと認めしは卽ち愛鶴軒なり。愛鶴軒は實に明治

に於ける元祿復興の祖なり。ニコラス、ローが沙翁沒後殆んど百年なり。西鶴が現はれしは沒後二百年にして愛鶴軒卽ち我國のニコラスローなり

西鶴が紅露の二家に深く作用した事は何の異論も無いが、しかし吾人の見を以つてすれば西鶴の本領は決して紅露の二家に於いて復活しては居らぬ。

ローカルカラー

此の時期で我が小說の變遷上最も忘れてならぬ重要な項目はローカルカラーと云ふ事である。卽ち描寫上の地方色の出しかたが一部の小說家の重大な硏究條件となつた事であつて、その極の最初は、無意識的ではあるが前に例をかゝげたかの長谷川二葉亭の自然描寫、浮雲第三回の月光を寫す所第七回の上野の秋色を如何にも楚々として景情を漲しめたあたり及び飜譯ではあるが『あいびき』に現はれて居る自然などは、浮雲以前の小說壇には絕無の試みであつた。けれどもそれはまだ眞實の意味のローカルカラー尊重では無かつた。たゞ二葉亭以外の作家があまりに人事に重きを置き、且つ人事の僞つたも

のを僞つたまゝに描いたのに對して、彼は極めて率直に描いた。だからして時潮と逆行し、痛快に圖抜けた程度は偉大であつたけれども、それはたゞ一班的不偏的に率直に書いたと云ふに止まつて居て、まだ地方的描寫に於ける眞個の特殊化が無かつたのである。

恐らく日本でロカルカラーと云ふ事を眞つ先に言ひだしたのは柵草紙であつた。森鷗外に其の當時の事を聽いて見たら次のやうな答であつた。

わたくしの記憶によれば、柵草紙に物を書いてゐた頃、度々「ロカアルコロリツト」と云ふドイツ語を使つた。其頃「ロオカルカラー」と云ふイギリス語には、わたくしはまだ國文中で出逢はなかつた。間もなく右のイギリス語を新聞や雜誌で見ることになつた。わたくしは自分がドイツ語で表現した概念を、少し立つてから、人がイギリス語で表現してゐると、當時思つた。併しわたくしの言つた事を聞いて、人が言ひ始めたのだか、それと

もわたくしの言つた言はぬに拘らず、人は人で言ひ出したのだか、それはわたくしには判斷が出來なかつた。

樋口一葉とローカルカラー

そして誰の作が一番初めにローカルカラアを具體的に出したかと云へば、先づ樋口一葉の『たけくらべ』であらう。幸田露伴も『潮待ち艸』に『たけくらべ』を絶唱し、別にローカルカラー云々の事は意識せぬ位ではあるが、しかも

單に大音寺前の有樣を叙し、つゞきて其のあたりの兒等の學ぶ小學校のありさまを叙し、さて其の小學校の生徒たる信如と云へる兒を一寸叙し出せるばかりなれど遊廓近き地の自然と他と違へる樣眼に見る如し

と云ふのを始めに縷々地方的特色の文字に溢れて居るのを賞讃して居るのは評者作者と同じく暗々裡にローカルカラアの要諦を摑んで居るものと見られる。實際において一葉の文の至るべき處に至つて居る名文であることは識者の一致

する處であつて、一葉の文章を批難した評家は一人も無い。今其の有名な大音寺の描寫と云ふのを少し例にひく。

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騷ぎも手に取く如く明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる家もなく、かたぶく檐端の十軒二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ處とて半ばさしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干しつ夕日に仕舞ふ手當ことごとしく、一家内これにかゝりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に慾深樣のかつぎ給ふ是れぞ熊手の下ごしらへと云ふ正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商

賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神……

此の小說の出たのは明治二十八年であつたが翌年一月初號を發行しためさまし艸(鷗外、露伴、綠雨等の雜誌)では明に此の作者にはローカルカラーがあるなどと云ふ評語が現はれた。無論一葉自身はローカルカラーも何も介意した譯では更に無い。其の間の消息と理由とを最も力づよく說明するものは嶋崎藤村の女史の作品が女史の生涯と密接に相觸れて居た事は最も吾儕の注意を引く點である。同じ女史の作物の中でも、初期のものは離れ〳〵の感がある。「大晦日」あたりから急に接近して來て、「たけくらべ」となると最もよく相觸れて居るらしい。

と云ふ平凡だが深意ある評語より他は無い。一葉のローカルカラーは無自覺なだけに渾然として居る。一旦自覺が生じて來る時は、意識的になり渾然の味は

ひが無くなる。即ち一葉の後に起つた後藤宙外の田園文學がそれである。たゞし宙外の田園生活は必ずしもローカルカラーの爲めではなくて其の第一の目的は文士須く都會にあつて生活難に苦むよりは意を決して田舍に退き悠々自適して大作を世に出すべしと主張したのであつた。宙外にあつてはローカルと云ふ語義が地方の特殊相と云ふのではなくて、都會を離れた田舍と云ふ意味になりて居る。宙外の運動は眞の意味のローカルカラーを描く文藝ではなくて、紅葉一派の江戸趣味、町趣味に反抗した田園の趣味の皷吹である。山村水廓趣味である。之れを代表する宙外の第一の作は『闇のうつゝ』であつて二十九年九月に出た。

甲駿の境なる籠坂峠の更二うねりで頂上といふところに、道をよけて少しの窪地あり。茲に年經たる橡木の、幹のふとさ、帶にて一捲位なるが立てり。技繁りあひて四方幾十坪をか蔽ひ、こんもりと暗き木蔭に、笠にかくる程の泉湧きて、さらさらと心地よき音絶えねば夏は旅人の此所に生命を

拾ひどころと、橡水の名此の堺隈に高し。今こゝへ須走の方より、汗忙しく拭きながら、息はづませて、上ッて來た商人體の男、べつたりと崛起げし橡木の根に腰かけ、少し動悸鎮めて、清水に喉をしめし膚を拭ひ、その根に戻りて、鞄の中よりソーレスの小匣取出し、巻莨をふかしながら蘇生つた樣な心地になり。悠然と向ふを見やれば、茲の老木の靡ける枝に巓はかくれて、大塚小塚その外の小山ふまへて立ちひろがれる富士の裾、半腹のあたり濃綠に紫の斑うるはしく、斷れ〲の白雲横なぐりに飛ぶことはやし「オヤ風か」と前峯の松の狂へる如き枝ぶりに目止まる途端、ヒヤリと襟元に落ち散るものあり　宙外『闇のうつゝ』

ローカルカラーに就いては三十年に「帝國文學」の記者が、スチブンソンが『遊船紀行』のうちの森の香キップリングが「七海の歌」ドーデ、ジョオジ・サン、及び尾崎紅葉の『二人女房』、『多情多恨』に於ける東京家族の特色及び幸田露伴が『木曾

の瀆貢』の一段の文致などを引いてローカルカラアのことを論じ、暗に宙外等の田園文學に對して

新らしき作家のうちには田舍の生活に筆を染むるもの多きが如し。然れども夫れは大方場面のみを田舍と稱したるのみにて人物と云ひ事實と云ひ都とも付かず田舍ともつかぬが多し。讀者をして全く心をその場面にうつして田舍にある想をなさしむるものなし。

ローカルカラーと郷土藝術論

田園趣味とは根柢が異つて居るが、後藤宙外等の田園文學の新運動に甚だ力強い根據を與へ理論的に此の派の文藝の爲めに萬丈の氣焰をあげたのは片山孤村であつた。孤村が明治三十九年四月『帝國文學』に鄕土藝術論を說いたのは、花袋藤村等のローカルカラーの文藝と相對して忘れることの出來ない新藝術鼓吹の努力である。孤村の鄕土藝術論は我が小說壇とは遠く飛び離れた獨逸に於ける鄕土藝術運動の紹介にとゞまつたが、はじめ『神

經質の文學』と云ふ長論文で世紀末的な文藝、デカダンの文藝が淺薄な物質主義から脫胎された廢頽の藝術に過ぎずと說き最後に鄕土藝術論に於いて自然主義、寫實主義、象徵主義などは寧ろ技巧の變化に過ぎぬ。例へば千古の詩聖ホメールは寫實的技巧に於ては或は小新聞の三面記者に劣つて居るかも知れぬが、ホメールは不朽の生命を受け、三面記者は一日にして忘られて了ふ――けれども主として都會文學たるに過ぎぬ。氣宇狹小にして俗臭に滿ちて居るのは勿論である。此の俗臭紛々たる市井の氣に代ふるに淸新なる「土臭」Erdgeruch に富むだ鄕土の野趣を以てするものが鄕土藝術の目的である。鄕土藝術とは卽ち「田園文學」では無いかと反問する人があるだらうが、鄕土藝術は歷史及び國土なる偉大なる根本解念に基いて居る點で、所謂「田園文學」よりも遙かに進步して居る。遙に質實である。又遙に廣大な目的を有つて居る。

と叫んだ。此の論は、他人の議論に首肯するを恥辱と思ふ不心得な最近の文壇において、騷しく反響に反響を産むやうな所謂世俗のプロジットは得なかつたけれども彼が紹介したリエンハルトの主張や鄕土詩人グスターフ・フレンセンなどの文學は小說壇の識者に沈默の間に影響を與へたものと見る。

此の意味から云つて宙外などの田園文學はたゞ紅葉等の江戶趣味に相對的に對して起つたと云ふだけで、都會も面白いが田舍も面白いと云ふ程度に過ぎない。根本的に新生面を開いたのでは無くて、一寸取扱の範圍を擴げて見たゞけである。

宙外の田園文學に比べると島崎藤村の『破戒』は一段の深さを加へて居る。田園文學の域を越して鄕土藝術の芬圍氣內に這り込んで居る。此の鄕土藝術と云ふ立場から見て、『破戒』は最も紀念すべき作品であつて、文體變遷の上から重大な意義がある。

單にローカルカラーと云ふ努力の上から云つて、『たけくらべ』の樋口一葉は無意識であつた。後藤宙外は田園趣味の皷吹に過ぎ、その寓居を態々猪苗代湖畔に卜したりなどした點で世間の注目を惹いたけれども、要する取扱擴張と云ふ以外何物もなかつた。水平的努力であつたが、垂直的な高上は無かつた。矢張り無意識と云ふに外ならぬ。藤村にはその意識があつたか無かつたか判らぬ。が今までの硯友社的な筆致を寸毫も弄ばなかつた處女的な創作力は、直接端的にローデンバッハなどの主張が體現されたのであつた。世間では長塚節の『土』も立派な鄕土文藝であるなどと云ふが、あれは必ずしもさうでない。根氣のいゝ細寫主義で鄕土の事件を取扱つたまでゝあつて、孤村の所謂國土と歷史とを重じた點は殘念ながら覿取することが出來ぬ。

尙ほ序に一言して置きたいのは田山花袋が西鶴について左の言をなした事である。

私はいつも西鶴を讀む度に思ふが、此の作者位日本でローカルに注意したものはない。これ卽ち西鶴の『元祿の西鶴』『難波の西鶴』『旅行家の西鶴』たる所以で、また飽まで寫實的價値を有して居る所以である。田山花袋

飜譯文學の變遷

此の時期に於ける飜譯文學の變遷も亦意味深い跡を殘して行つた。二葉亭の飜譯したツルゲネエフの『あひびき』は彼の小說と同じく前驅者も模倣者も無いが、矢張今日の人の飜譯と比較てし、その文體も移植の方法も三十年の時代の差異を發見するに苦しむ程である。

特色のあるのは森田思軒と森鷗外との飜譯であつて、前者は『十五少年』に後者は『卽興詩人』にその最高潮を示した。

思軒には思軒調がある、それについて德富蘇峯が面白い言をなして居る。兎もかくも思軒は最も讀みやすき飜譯を出し同時に一種の力を移植することに努めて優に一家をなして居る。

思軒の文章は及ぶ可し。其の會話及ぶ可からず。
思軒の飜譯は餘りに念入り過ぎて却つて粘皮の痕あり。
思軒の文章は字烹、句鑄。恰も磨き竹を以つて建仁寺垣を結びたるが如し。
思軒の小說は、御姬樣が味噌漉提げて豆腐買に赴く風情あり。
思軒の文は淡中腴味あり。鍛練の文、一字、一精神。故に思軒多く作らず。

尙思軒自身の飜譯の態度及び作例を見るに

英吉利の文章を佛蘭西に譯し、佛蘭西の文章を獨逸に譯すると云ふ事は其の差違が西洋の言葉と東洋の言葉ほど甚だしい懸隔が無いのです。それで、とても私には出來まいけれど、もし能ふべくば、其の言葉の姿の西洋と違つて居るのを違つて居るまゝ幾分か見せたい……啻に意味を取るばかり、で無くして、言葉の姿も合せて取らうとした……副詞、形容詞の數多く重なつたのを譯する場合、或は長い句と句とを繫ぎ合はした關係代名詞を

譯する場合等について幾分か詰まらない縁の下の力持をした……森田思軒

然り、死なる哉、死なる哉。且つや余が心理の聲は反覆余に向つて縱ひ余が死、死、と求むるも、余は到底死を得るの憂へ無き者なる事を、擔保せり。凡そ死刑を申し渡さるる者の、寒き、雨多き、冬の夜の夜半、濕りたる陰欝の室の内にありて、炬火の下に於てならで、他の時他の處に於て、之を申渡されし者ありや。今や八月の月に於て、此の如き美はしく晴れたる日の朝の朝の八時に於いて是等寬仁慈愛の相を具へたる陪審官上にありて、而かも余を有罪と斷ずることあるべきや。余の眼は再び、かの太陽の光を浴びて立てる黃色の小花の上に注ぎて、復た他に轉せず。

『死刑前六時間』(ユーゴー)思軒。

思軒の此の文體は創作小說壇に大なる影響を與へた。二十一年に出た須藤南

翠の『朧月夜』などは特に適切な一例である。試みに南翠の自家本來の作風と云はれる『荒海貫一』の一節とを並べて左に掲げる

池上は双の手を疊に突きて照子が友愛至切なる情訴を聽きまた主君の令妹として吾に斯くまで敬禮を施さるるに感じて常には喜怒ともにその色を見て知り難き面には帝王截開の爲めに過つて人の妻を殺したる時の如き秋色を帶びバチルレンの微でも尙ほ覩んとする明かなる双眼には蒸溜器の點滴の如く淸らけき涙のはらはらと瀉りぬ。之れを覩る照子は益々その人の誠衷(まごころ)の心に嬉しくて婦人に多き涙宮(るゐきう)には漲り騷ぐ洪水を招きたりける。‥

『朧月夜』　南翠

笑ひが至つて冷やかであつた。冷かなうちにも自ら掩はれぬのは苦しいと云ふ機關の濫り、今まで油をさした惡魔が此の機關で搾殺される苦しさ、德性と云ふ技師も中々意地がよくない男と見える。吾が顏を吾れ自ら見る

ことは出來ぬが、山登(やまと)は目がないだけの脳府の大明神が其の裡面(うちわ)から見せたであらう。『此の木兎(つく)め、言脱(いひぬ)けやうとしても、此の辻番には活きた大哥(あにい)が眼張(がんばつ)てるぞ』是れは余の感情である。また冷やかに笑つて呑み込むで面目なげに余に對つた。………『荒海貫一』南翠

因に須藤南翠は明治六七年の戯作者殘存時代から小説に筆を執り絶えず順應の才を振つて時代々々の文體の變遷に應じ一々影響をうけ或程度まで成功した。彼を稱して文體のカメオレンと誰やらが云つたのは蓋し至言である。『朧月夜』の文體に關し坪内逍遙は思軒體に四六駢驪を加味したものだと評した。

鷗外の飜譯

『即興詩人』は『埋れ木』の後に鷗外が譯したアンデルゼンの傑作『インプロヴイザルトン』であつて高雅な擬古調を以つてし、激越に缺くる處はあるが溫籍であつて朗々玉の樣な味ひがある。茲に二葉亭の飜譯振りと鷗外の飜譯振りとを比較して面白い對稱が得られる。それは二葉亭は飜譯をしても創作らしく見えるに對し、鷗外のは創作をやつても飜譯らしい匂ひがする。

鷗外は學に忠であつて、二葉亭は人間に忠である。鷗外は其の深遠の學識と確立した審美見に基き、典據に忠實にして一點一劃を濫にせず愼密で注意周到のいたす處である。此の好譯文を以つて明治二十四五年の頃にドーデー、ハックレンデル、クライスト、ステルリン、トルストイ、ツルゲネエフ、アービング、ブレットハアト、ホッフマン、シユピン、フレンチェル、レルモントフ等を譯し範圍を全歐に擴げた紹介をなしたのであつた。茲に其の『卽興詩人』の一部を例に引用する。

街のはつる處に「コロッセウム」の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へ行くにやと畫工に問ひしに、否、かのよりは逈に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたを景色と倶に寫すべしと答へき。葡萄の園、古の混堂の跡を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。綠の枝を手折りて車の上に挿し農夫はその

下に眠りたるに馬は車の片側に弔り下げたる一束の秣を食ひつゝひとり徐に歩みゆけり。やうやうエジエリヤの洞にたどり着きて、われ等は朝餐を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏は天井も四方の壁もすべて絹、天鵝絨なんどにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蔦の、おほいなる洞門にかゝりたるさまは、カラブリヤの谿間なる葡萄架を見る心地す。『即興詩人』鷗外

『即興詩人』が世に出たと同年卽ち明治二十六年には内田魯庵がドストエフスキイの『罪と罰』を飜譯した。此の年は民友社の『十二文豪』とか博文館の『世界文庫』などがあつて眞面目に海外の文藝を移植しやうと云ふ運動が勢をなして居たのであつた。ゾラの小説などを讀むものも澤山あつて、古本屋から買ひ込むだ一群の洋書のなかに偶然ゾラのナナがあつて漠然ながらも寫實主義の權威を認めて驚異の感を抱いた小杉天外もあつたし、外國から歸朝した勢旺勢に

「おほん」と高く澄し込むで外國輸入チヤキチヤキの新文藝を樹立するため山岸荷葉が『東京文學』を發行したのも其の當時であつた。

第四章　新文章の完成（明治三十三年以後）

文壇末流論――武藏野――小栗風葉――文士講談――二大缺點――諸家の意見――自然主義と言文一致――田山花袋と新文體――實經驗――沒技巧論――柳浪と自然主義――文章の力――文の新舊――寫生文と新文體――漱石と寫生文――漱石と露伴――近代文學の特色――Sensualism――Impressionism――Symbolism――ソフトな文體

文壇末流論

明治三十三年と云ふ年は種々な意味で明治文學史中に新たなる一項を劃する事である。此の年森鷗外は九州の一新聞で『文壇末流論』と云ふものを書いた。その論旨は要するに當今の文壇は紅葉露伴等大家は高踏自重してしまつてあまり世間に出ず、殆んど隱居同樣の姿となりそれに代つてやくざな末輩がワイワイ騷いで居る小生意氣な文壇であると云ふことを論じたのである。所が新しく勃興した諸派の文士はそれを非常な侮辱として諸方から鼻呼

吸く荒く駁論を試みた。綱島梁川内田魯庵後藤宙外島村抱月等は各々獨特の批評的見識を以つて森鷗外の言に反對したのであつた。特に「讀賣新聞」に居た星月夜の島村抱月の筆鋒が最も鋭く

今の文壇は決して紅葉露伴の續きでもなければ、其の末流でも無い。潮流は明に一回轉した後である。此の新潮流に掉すものは、縱し紅葉にもせよ、露伴にもせよ、既に前期の生涯を終へて我等と平等なる新驅逐場裡に這入つたものと言はねばならぬ。其の上は男兒はたゞ一管の筆あるのみ、時猶淺し、本末大小の分はまさに是れから以後に定まるのである。我等と諸家と大に爭ふべきはむしろ此の後にあると信ずる。

と論じて旺なる意氣を示した。そしてその意氣は島村抱月一人ばかりではなくて實に文壇の全般に亘つて居た。勃興の徵は前の明治三十二年既に明かである。丁度日淸戰役の影響をうけてその戰後に緊張して來る年頃にあたつて居る。高

山樗牛の時代精神論が出るし、東に『ほとゝぎす』西に『己が罪』と云ふ讀者の範圍の廣大な小說が新聞に出始める。正岡子規は雜誌『ほとゝぎす』にその寫生文を創めた。之れを前年の『早稻田文學』『新著月刊』『めさまし艸』など廢刊された文壇の大不景氣に比べると𨻶に一陽來復の趣がある。文壇は𨻶に紅葉、露伴、得知、篁村、綠雨などの手から、鏡花、風葉、宙外、不倒、抱月、天外、蘆花、幽芳の手に遷つたのである。此の年又後藤宙外は田園生活論を發表した（田園文學ローカルカラー鄕土文藝に關しては前項に論じた）

獨步の武藏野

明治三十四年の小說壇は卽ち樗牛が之を通觀して紅葉露伴を葬れよと絕叫した年であつて國木田獨步の『武藏野』が出た。同じく泉鏡花は『高野聖』を出した。共に都會離れた地方の描寫であつて、一種のローカルカラーを發揮した文體であつたが、鏡花の『高野聖』の方は鏡花一流の神秘的な色彩のある筆致で飛驒地方の山深い景色を活躍させたのであつたにも係はらず、未だ

その地と景色との雰圍氣から直接生ひたつた生命に觸れず、且つ其の小說の傾向が超人間的であつて文壇の新意義に添つて來た新文體だとはゆるされぬ。それに較べると獨步の武蔵野は慥に新たなる立場を開拓したものであつて、彼は武藏野を寫すにあたつて、武藏野特有の自然相を捕へてそこへ自己の新しい生活を樹殖しやうとした。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か。さなくば夫婦連れで遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠かりゆく。獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分は一度犬を連れて近所の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやう

な音がした。足もとに臥て居た犬が耳をたてゝきつと其方を見詰めた。それぎりで有つた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗樹も隨分多いから。若し夫れ時雨の音に至つてはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題に迄なつて居るが、廣い廣い野末から野末へと林を越え、森を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り行く時雨の音の如何にも幽かで、又鷹揚な趣きがあつて優しく懷しいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗つて北海道の深林の時雨に逢つた事がある。これ又人跡絶無の大森林であるから其の趣は更に深いが、其の代り武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣は無い。

是は其の一節である。此の一文がローカルカラーと云ふ上では眞に記念すべきものであることは、時代から云つて二葉亭の『浮雲』それから一葉の『たけくらべ』、そして獨歩の此の『武藏野』と指を屈すべきである。今までの文學では同じ

植物を描いても、見越の松に月が出る式なものに過ぎなかつたが、獨步は始めて大平原の林野に美觀を求めた。後に獨步はよく『驚きたい驚きたい』と云ふ事を云つた。それはあらゆる常套の疲れた氣持から全く離れて、われわれ人間の先祖が始めて太陽を見、月を見、夜が襲つて悲み、朝になつて狂喜したやうなびつつくりした新しい初心な氣持で小說を書き度いと云ふ願である。そして獨步は此の初心な氣持になつて武藏野を觀察した。自然主義の三作家として後に花袋、藤村とともに其の眞價が社會に認められるやうになつたが、自然描寫乃至ローカルカラーの點――廣く文體の上から云つて花袋藤村よりも逈に具體的に意義ある鮮かな影響を後に及ぼしたものである。片上伸が自然主義者の文章を評してザクザクと鑿を打ちこむやうな文章と云ふことを云つたが、その趣は獨步の文章において遺憾なく發揮されて居る。花袋が新しい文體を理論的に鼓吹したに對し獨步はそれを着々と體現して居たのであつた。けれども其の當時

にありては獨步藤村の作品は一向世間に認められなかつたのである。試みに明治三十五年に出た獨步の『少年の悲哀』藤村の『舊主人』に對する當時の『早稻田文學』『めざまし艸』廢刊後唯一の文學上の高等雜誌たる『帝國文學』は實に左揭の如き批評を下したのであつた。

■少年の悲哀　作者姓は國木田、名獨步。すこしは文壇に野心のある男と見えたり。作は拙劣讀む可からず、筆の稚氣ありて乳臭を脫せざる、詩中二三年生さへ、此れ程の惡文は作られる可し。吾等本篇の作者が厚がましくも此の如き作を投じて自ら疚しとせざる勇氣に驚倒せずんばあらざる也。

■舊主人　詩人藤村の作亦新小說に出でたり、下婢の口を假りて婦人の姦通を物語らしめたるもの、作として見る可きなく、探るべきなく、稱すべきなく、殆ど小說の形體を備へざるに似たり。思ふに氏は新體詩人として成功すべき者にして小說家として失敗に歸すべき者に非ずや。かつて一葉

舟落梅集及び文學界に出でたる美文及び小説の如き新體詩に比すれば甚だしき軒輊を有し、平弱委靡氣力なく輕快なく、平麗暢達の僅かに見るべきものあるに過ぎず、舊主人の作の如き、亦等しく此の非難の繰り返さるゝ迄にして何等進捗の形跡を印せざるが如し。詩人なれ〳〵强て小説壇に旌旗を飜さんとして却て失敗の井中に陷る勿れ。

風葉の言文一致

小栗風葉も三十年頃から全然言文一致で書きだした。其の當時の事情を風葉自身が語つて居る。曰く

俗文體といふ形式のも書くは書いたが、甚だ變テコなものだつた。つまり坪内先生が一時書かれたやうな文體、後藤宙外君が『ありのすさび』に用ゐたやうな文體で、僕も『國民の友』へ『鐵道工夫』といふやうなものを書いて見たが、他は言文一致でありながら句の終りだけが、しぬ　たり　なり　けりなぞの文章語で行つて居る。木へ竹を接いだ如きものが出來上つた。併

しこれではどうしても思ふやうに、透明に直截に自分の考へが出て居らぬから、殆ど涙を揮ふばかりの大決心でやつて見たのが『新著月刊』へ出した『十七八』といふ短篇である。あれは僕の言文一致の最初の作であつた。

風葉と同じく硯友社の出の人は皆言文一致を書きだしたが、ただ一人泉鏡花だけは、文章の巧妙なる點において師の紅葉よりも眉山よりも傑出したと謂はれる。鏡花は結尾の言葉だけでああるのだに代つても、文章が一流の型に掛つてしまつて牢として抜く可からざる鏡花調が出來てしまつた。露伴はその强烈な理想主義的傾向から寫實主義に轉じたけれども彼は言文一致と云ふ事よりも、逆に言語の改良と云ふことを叫び、最も讀み易く最も自家に適した文體を創出した。明治三十六年世に出した『天うつ浪』は其の代表で次の樣なものである。

自信は强くとも、學問は博くとも、氣の働きは八方に鋭くとも、まだ世に老いぬ心の柔輭(やはらか)に嫩(わか)ければ、人には知らさず秘め置きたることを、つけ

つけと覿面に云ひ出されては、胸の眞正中をしたゝかなる箭に羽中の節せめて射込まれたる思ひして、ハッと驚き惑ひしが、元來底の弱からぬ男なり、忽ち我れに返つて惡びれず、靜に我が腔内の血の跳りの鎮まるを待ちながら、身動きだにせずして大人しく島木のいふところを聞かんと仕たり。島木は人の情の流れの瀨に、慣れきつたる鵜の目の働き敏捷く日の光の明らかなるに我が影を怯づる若鮎の振舞の、優しくもしほらしき水野の樣子を見て取つて、曾て吉右衞門より聞きしと、今直接に聞きしとの二つの談話に照らし合はせて大概の事は曉り盡しつ、今更にまた油然として愛憐む心の起るに堪へぬが如く言葉づかひも碎けて露隔氣なく……『天うつ浪』

文士講談

明治三十三年五月新小說は臨時增刊『春鶯囀』を出して文士講談を試みた。紅葉小波鏡花眉山水蔭秋濤得知露伴等が講談師のやうに小說を口演してそれを筆記して世に問ふたのであつて、言文一致工夫の一努力であつた。

無論「新小説」の編輯者の立場から云へば此の方法を幾度か續けるのちには立派な言文一致を齎すことが出來るだらうと信じたのであらうが結果はたゞ座興に止まつてしまつた。次に其の當時の所謂文士講談の筆記を偲ぶために眉山と露伴と紅葉との例を引く

文士の口演といふ、何うやら素人義太夫といつたやうな格で、隨分堪(たま)つたものではない處も澤山にございませうが、忍で暫くの間の御辛抱を願ひまする。實はわざ〳〵お聞かせ申すのであるから、何か變つた獻立をと思ひまして、西班牙種の英雄譚(ロマンス)で、口演などには至極妙といふのを撰びました處が、生憎く其の原本が未だ手許に參りません。そこで間に合せの摑み料理、いつの事でしたか阿米利加の雜誌やら本やらを亂雜(さつた)に讀み散らした中にあつた談話(はなし)を不圖思出しましたまゝに、ざつと煮返して冷めない中に今と差上げる事に致しました。『五十年』眉山

今日は上野公園の精養軒で蓮田法學士が佛蘭西へ留學を命ぜられたため其の送別會が開かれた。會は非常の盛會で、參集者は無慮二百名と註された。"が東照宮の森に夕鴉が塒を求めて啼き噪ぐ頃に、人々も思ひ〴〵に歸途に就いた。………『不安』　露伴口授鵜伴筆記

扨私のは茶碗割と題するので、今より約そ二百餘年前、頃は元祿年間の物語。よく今日でも言ふ事でありまする。昔の人は物堅い、律義であつた、それから見ると今の人間は實に惡黠い。成程惡黠い。………

『茶碗割』　紅葉口演木川忠一郞速記

要するに三十五六年まで否それからまだ後の四五年すくなくとも『破戒』が出た明治三十九年頃までは言文一致の試錬時代であつて島村抱月の如きは才にま

かせて言文一致にしたり文章體にしたりしたし、その頃批評壇の最高權威を以つて自ら任じて居た高山樗牛などが全體文章體を以つてしたから文章體は如何にも識者らしく見えて居た。そして文體は混亂に混亂を重ねた。「帝國文學」の記者が『文學と嵌細工』と題して

見よ近時『美文の珠玉』『美文斷片』其他類似の題號の下に、和漢文中の佳言好句をば、亂雜に綱羅排列せる片々たる小册子の續々として上梓せられ、日ならずして再版せられ、三版せられつゝあるを。苟も一個の文章家とならむと欲する者は一片の銀貨を投すれば足る。一たび此の小册子を繙かばいかなる場合に於ても忽に乾坤を動す底の絢爛たる一大文章を得べし。著者は蓋し文學の技を以て嵌細工的の技藝と同一視して植字職工をして一躍して天下の大文章家たらしめむとするもの

と嗤つたのも理ある事であつた。蓋し當時から我が小說壇の言文一致に就いて

は（Ａ）所謂地の文と對話との不調和とそれから（Ｂ）口語體の動詞で時を表はす嚴密な規則が成立しないのとが二つの大なる缺點であつて、明治三十六年發表した高木敏雄の『明治小說壇の革新』と題する論文中に此の點に觸れた部分があるから左に籍りる。

我が言文一致の二大缺點

句法の緩急は動詞の「時」の撰擇に影響を及ぼす。試みに歐羅巴の大家の散文的叙事を見よ。本來の叙述的「時」卽ち文法家の所謂持續過去と持續現在と章を異にして互に相連り篇中の人物をして自己の經歷を物語らしむる場合に於ても說者其人が直に身を過去に移して過去の人たると、現在の見地よりして靜かに過去を觀察するとの相違により或は持續過去を用ゐ、或は完了現在を用ゐて其區別を明にするに非ずや。今日の言文一致體の此の如き精密の區別を示すに未だ十分ならざるわれ之を知る。然れども某作者の如く特に讀者の注意を惹くべき一瞬時の出來事を寫すに大過去を用ゐ永々し

き句法を用ゐ、却てわれ等をして既に數百年前に終りたる長時間の靜かなる出來事の記錄を讀むが如きの感あらしむるは殆ど之を忍ぶ能はざるなり。既に現代の人生の描寫をその目的とす、その用ゐる文體が明治の文體たらざる可からざるは勿論なり、われ等が日常用ふるところの所謂漢字交り文はそが現代の思想を述べ現代の事物を叙し得る範圍に於て明治の文章たるのみ。最も進歩せる明治の文體は所謂言文一致體なり、われ等の理想はこの兩者の調和にあり、明治の小說は現今に於ては先づ此の後者を用ふべし、前者に至りては天才に非ざれば不可なり。唯茲に原則として守らざる可からざるは作の全體を通じて同一の文體を用ふべき事なり。之を稱して文體の一致といふ。この一致を缺くものは形式上文藝たるの價値を有せず明治の批評家と作者とは此の點に關して一般に趣味識を缺ぐ。試みに現代の大家と稱せらるるものゝ作を見よ。一篇の小說中、叙述描寫の部分に於ては

普通文を用ふるにも拘はらず、人物の對話に於ては言文一致の說話體を用ふるものあるに非ずや而して作者にその誤れるを悟らず、評家その不調和を咎めず。嘆ずべき哉。

諸家の意見

前者の地の文と對話との調和は三十九年の藤村の『破戒』以來うまく行つたのであるが後者「時（テンス）」の問題は未だ殘つて居る。けれども三十九年當時卽ち『破戒』が世に出た頃においても言文一致は社會的に確立しない。試みに當時における識者の意見の二三を參照する。

□理想的言語を作れ――文章は單に言葉のまゝ――其のまゝに寫し出したのを以つて上乘とは云へぬ。もしこれを上乘とするならば、蓄音機は實に天下一の名文家である。……言語を良くすることを怠り、或は又忘れて居つて、文章を言語と同一に仕やうとするのは、進步の大法に背いた墮落的、懶惰的、苟安的の考である。

幸田露伴

□漢文の覊絆を脱せよ。　芳賀矢一

□先づ言語を改良せよ。　徳富蘇峰

□早晩日本の文體も一定さるべき必要がありますが、或體に一定するとなれば何うしても言文一致體でありませう。　下田歌子

□老成の文章家と言はれて居る連中で自分は言文一致は嫌ひだと言ひながら矢張り次第に此の文體に化せられて來たのは事實である。何々したと云ふ結尾が好ぬと言ふ人の文を見るにしたをしたりと改めた丈で、餘は言文一致だ。　内田魯庵

□今の和漢文體は當分は中流以上の人が用ゐて一面樂むと云ふ狀態になるであらう。然しそれが又一だん進むと言文一致が全く國民的のもの社會一般が用る所の文體となつて、和漢文體は遂に專門家の手に渡さるるのであらう。　上田萬年

□言語の愛はやがて其の智識を產むのである。今日迄の言文一致は言語を愛する人々の手に依つて開拓された。……諸君は言語を愛するといふ心を抱いて硏究の途に上られんことを切望するのである。島崎藤村

自然主義と言文一致

明治三十年代後半の我が小說文體を說くには必ず自然主義と聯關させねばならぬ。我が小說の內容を根抵的に一變させて明かなエポックを作つた自然主義運動は文體の上にも亦勃興しかゝつて來た言文一致に强い理論的根據を與へた。さて自然主義は誰が提唱先祖であつたか知らぬが、之を口にした年代の上から云へば森鷗外など最も古い。明治二十九年十一月の日付してある鷗外の論文に

吾人の眼を射る文學の方の新顯象から云へば、佛蘭西のゴンクール、フローベルこの方製作に自然主義といふ名の附いた一種特異な產物がある。其の筆の使ひ方はどこまでも實際のまゝを平に叙して、くだらぬ事をも除か

ず、特色のあることも別に氣をとめぬ。…………………扨この第十九世紀の新しい產物たる藝術は我國にどういふ影響を與へたか。此の問はもとより明治このかたの藝術に對して發するのだ。文學の方を見れば、僅に一人の二葉亭が自然派の一面たる心理的分析の作を出した事がある外には、擧げて云ふ程、此の影響を受けて居ぬ…………若し第十九世紀の自然主義に根ざした藝術を包容するために昔の抽象理想的審美學が不足になつたやうに、後の藝術を包容するために今の具象理想的審美學が不足になることがあつたら、己は喜んで今の藝術觀をその方角に廣めもし、又ずつと土臺から變へもする積だ。二十九年十一月　鷗外

田山花袋と新文體

けれども事實に於て之れが影響指導を最早く文體に與へたのは明治三十九年以來『文章世界』文章講話の題下に田山花袋が自然を說き、センチメンタリズムの破壞を說き、傍觀的傾向、ローカルカラー、外面描寫、內面

描寫、平面描寫等を說き、『これからの文章』と題して

將來の文章において、書かうと思つたことを完全に顯はさうといふことに就いては充分に辭句も練り文體をも研究しなければならぬが、其內容に於ては、自然を御手本にするより他、他に人爲的人工的小主觀的技巧を加へる必要はない。いや必要がないばかりではない。そんなことをすると折角切開いた草藪がまたもとの不毛の地になつて了ふ。知識、觀察、自然に近い主觀の情――これがこれからの文章の要素と信ずる。

と云ふにいたるまで、最もよく文章を指導したものである。さて自然主義が文體の變遷と一番深い關係を有するのは實經驗を寫すと云ふ事である。此の傾向が遮二無二に急轉直下に言文一致を小說の文體として根抵を成してしまつたのである。

實經驗を重んぜよ

小說に描く材料は實經驗で無くてはならぬと云ふのは自然主義主張の當然の結果である。此の作者の實經驗をそのまゝ寫せと云ふ主張は抱月泡鳴花袋天溪の諸氏が云ひだした事であつて、例せば花袋がその『描寫論』において

生死を堵しても實行に赴く人は、一種のキャラクターには相違ない。しかしそれは藝術家には遠い。

しかし實行は其の藝術の背景を成してゐる。であるから、私はかう云ひたい。熱烈なる實行家にして、それに捉へられざる忍耐と智識とを有せる人――精神上の火水の爭ひをもじつと默つて見て居るやうな人――

此處に至つて藝術家の心理の悲痛と云ふことが起る。熱烈なる實行の精神を有しながら、それに捉へられざる心の忍耐、苦痛。

と云つた如き、又島村抱月氏が『文藝と實行との間に描はる一線』において觀照

主義を說き、實行しながらそれを靜觀し味到する心境を藝術と云つたごときも此の主張であつて、抱月氏の實行觀照論は、ずつと後の作ではあるが『斷片』と云ふ氏の小說中に

兄への義理、世間への義理もすまない。されどもやつぱり思ひ込むだ人も忘れられない。すまない私と忘れられない私とが鬪つてるうちに、もう一人第三の私といふものが出來た。その私はたゞじつと二人の爭ひを見て居る。時によると面白いとさへ思つて眺めて居る。私の今の覺悟といふのは、それだ。どつちに身方をしろたつて出來ないからの事だ。これでもう十年年を取つて居たら、すまない〳〵の私に身方して、血管の中で煮える血をじつと抑へて、冷ましたかも知れないし、もう十年若かつたら、一も二もなく其の血の中に飛び込んで了つたらう。けれども今の私は其の眞ん中ほどに立つてゐる。さう此の頃では思ふやうになつた。

と云ふ一節が巧に氏の實行家としての藝術家、藝術家としての實行家の面目を現はして居るでは無いか。尙ほ泡鳴氏にいたつては極端なる實行論者であつて實行卽藝術の主張は『新自然主義の結論』において

普通の自然主義を踏んで更に深く突き入つた僕等の新自然主義の生活や描寫には………僕等の實感を、刹那々々の變化中に全部として表象體現するのだ。換言すれば常に耽溺して常に新らしくその耽溺の淵は肉靈合致の自我その物であるのを發見することだ。

と云つたのに現はれて居る。是等の思想は直接作家を指導したと云ふのでは無くて、作家も批評家も(實際には又作家が自ら創作の主義を主張したのである)同時に感じて實驗描寫の風潮を捲き起した。藤村花袋獨歩の出現は多く實驗描寫と云ふ立場であるが、實驗ばかり描いては種に窮すると同時に當時喧しかつたモデル問題なども出た。實驗が絕對の主張ではない。要するに自然主義思潮

の知的要求から來た物質主義或は科學主義の叫びであつて、軈て之れがロマンチシズムの方面の情的要求から來る主觀と合體して全我的活動をなすにいたるに從つて、實經驗描寫の慾が薄らぎネオロマンチシズム等が主張されるやうになつたのである。さて實經驗を寫すとか眞實を描くとかの傾向の結果從來の小說にあつた文字上の遊戲は全然排斥される事となつた。卽ち無技巧論、沒技巧論乃至新技巧論が盛に起り出した。

かう云ふ燎原の火のやうな勢で盛に新文體を說き新しい酒を盛るべき新しい革袋を要する聲、眞實に觸れよと叫ぶ聲などがどのやうに舊體の作家を刺戟したことであらう、其の模樣は眞山靑果が新しい潮流に對して俄に恐怖を覺え出した舊作家の心持を描いた小說『御詠歌』の左の一節に彰はれて居るではないか。

停滯して居た文壇は、その頃眞實と云ふ言葉に呼吸を吹き返した。一冬の間光つて居た藁屑が、春二三日の雨に腐れるやうに、舊い人は急に沈默し

て「吾は人生の從軍記者なり」と云ふやうな叫聲が所在に起つた。私どもは然う云ふ間に、妙に革命的の調子を帶びて來る先生を、怪みつゝ眺めて居た。「僕と云ふものが知れるでせう。斯う云ふ時代があつたんだからね」

先生は或る日四五年前の寫眞など見せた。縞ものの二枚襲に、故と羽織を着ないやうな、瘦せてる頃の寫眞であつた。

「全く世間は才ばかりで通れるものと信じて居たよ。」

私は何時か舊い雜誌で讀んだ、先生がある夜カーライルの英雄論を讀んでひどく感激したと云ふ記事なぞ思出した。と、先生は笑ひながら肱をまくつて二の腕にある文身の炎跡や人に出せない創跡なぞを見せた。

沒技巧論

小說の文章に沒技巧と云ふ事を說きだしたのは、文章の型を打破すべしと叫むだ田山花袋である。花袋は文章の型と云ふ事に就いて

私が明治の文壇に就いて特に深く感じて居ることは、文章に型が出來て、

其爲に沒落の憂き目を見た者が多いといふことである。卽ち一種の調子といふやうなものが出來てそれに乘せられて書いて居るうちに、知らず〳〵型が厚くなり、自分で氣付いた時はもう二進も三進も動けなくなつて、遂に文壇的悶死をする。實に文學者に取つては型の出來るといふこと程恐しいものは無い。だから若し自分の文章に多少なりとも型が出來たと自覺したものは、一刻も早くその型を破つて出ると云ふことに全力を盡すべきだ。……………要するに宇宙間のあらゆる現象は一事一物みな一つの言葉しか持つて居ない。その言葉を發見して、丁度それに當て嵌めて書き現はしたものが卽ち最も好い文章で、且つ完全な文體であると思ふ。

と云つた。沒技巧と云ふのは又全體から見て無脚色の小說と云ふ事と同じ變遷の浪に揉まれて居る。自然主義の洗禮を受けない前の小說に比べて見ると自然主義派の小說は慥に無脚色である。長谷川天溪の言葉を籍りて云へば軍隊の方

では豫定行動と云ふ語が用ゐられる。而して多くの作家は、作中の人物に同義の豫定行動を取らしめたのである。丁度司令官が活動方面の地圖に靑線や朱線を劃して、某聯隊は甲地より乙地に、某師團はＡＢＣ線を進めと命令する如く、作中の老若男女一群を、自己の編製した人生觀の地圖面に動かしたのであつたが、自然主義の小說ではさう云ふ豫定行動の練習では無くて始めから實戰をやつて居るのである。眞劍の筆を執つて居るのである。一生懸命だから何の餘裕も無い。夏目漱石の所謂セッパ詰つた文藝である。所謂技巧に丹念して居られぬ。玆が自然主義派の文藝と他の文藝と文體上において根本な差異を劃する所以である。

無技巧乃至沒技巧と云ふ言葉の一面には文章は下手でもいゝと云ふ是認がゆるされる譯だ。以前は小說家になる第一の要素は文章が上手でなくてはならぬと云ふ事であつたが、自然主義派はさうでは無い。尙は自然主義以前の文學に

あつても不思議にも文章が下手な爲めにパラドキシカルにも効果を收め得た作品が數ある。例せば廣津柳浪は其の一例だ。彼はあの時代で會話は別だが、文章の一番下手な作者であつた。

柳浪と自然主義

柳浪と自然主義。此の間には何の緣故も連鎖も無い。けれもど柳浪には何となく自然主義的暗示があつた樣である。自然主義的小說には醜惡が材料になつた。そしてその醜惡が柳浪にあつては深刻小說となつた。『黑蜥蜴』に出て來る隻眼瘡面の醜婦、『變目傳』に出て來る侏儒變目の醜貌は、寧ろ醜に過ぎた位である。たゞ自然主義は平凡を材とした對し柳浪は之を材とすることが出來なかつた。柳浪が十年後れて文壇に出たら自然主義の陣頭に立つたかもしれぬ。當時にあつてさへ『めざまし草』は次の如く評した。

他人の書かむとも思はざる處、他人の書かむと思ひても敢て書かざる處、敢て書きても能く書き得ざる處に獨得の技を擅にして、今の小說壇に雄飛す

る此の作者が、此の篇は特に此の作者の一面の美を表はしたりと云ふべきか。文章の上より云へば、すらすらとして嫌味のところ無く、絢爛といふべくもあらざれど、さればとて乾古と云ふべくも無く、底光りすると云はゞ云ふべきものにて讀み行く中に目を射るやうなる奇拔勁拔の句に逢ふと云ふはにあらざれど知らぬ間に作者が與ふる情景に卒然として逢はしめられてハッとも思はせらるれば、ホッとも思はせらるることとあるは、先以て我が敬服するところなり。おもふに作者の力を入るゝは辭句の間に多からざる代りに意の上に多しと云ふべきか。麗水と駢べ云はんは如何なれど、或意味にては麗水一方の極端ならば、此の作者また一方の極端なるべし。我は論無く此の作者に與せん。言葉づかひの手品をもて讀者の眼を惹かんの如きは正面より云へば好ましからぬことなればなり。されど此の作者辭句の間に意を用ゐぬと云ふにはあらで、對話なんどは今の屈指の作者にも決

して劣れりといふ可からず。これまた我が實に敬服するところなり。次に此の作者が此の篇における用意として特に見ゆるは、今戸心中其の他に見えたる如くある事情を叙し、或る人の思を叙するに成るべく作者が直接の批評的説明若くは命令的説明を讀者に向つて發することを避けたることに是亦我が悅服するところなり。

鐘樓守の飜譯

尙ほひとつ舊作家における面白い一例は尾崎紅葉が臨終の床にありながら飜譯したと傳へられるユーゴーの『ノートルダム、ド、パリ』卽ち『鐘樓守』である。坪內逍遙が此の飜譯書に序した一節に

聞く山人が文を作るに忠なるや、身重痾の褥に在るも、删潤校訂皆之をみづからし、雕心鏤肝の細巧、殆んど一日だも缺くことなかりきとか、然るに病革るに及びては流石の剛健なる意氣も、稍々萎え撓みけるにや、讀みて上卷より下卷に移るときは、故人が水莖の匂ひ次第々々にかすけく隱然と

して一種の病牀日誌につきて、日々病勢の進みゆく樣を讀むが如き心地する、いと痛はし

と云ふ一節があるが、而も此の紅葉の雕心鏤肝の細巧が無くなるに從つて、反對に新らしい効果を產むやうになつた事は左に引いた小島烏水の評言にある通りである。

余は病勢は氏の文を削かずして却つて救けたりしを思はずんばあらず、いかにとなれば下卷の文の比較的洗煉を缺き、圓滑を缺き、短句、苦句、澁句錯落として瘦臂に横はり、地に抛ちたるところ、文字倦鴛となりて、却て俄に沈痛の聲を發したればなり。酷しい哉修飾の眞を害する。

文章の力と云ふことに就いては明治四十二年の太陽臨時增刊『文藝史』の筆者が首肯すべき説をなして居る。曰く

文體變遷上の最大區劃

紅葉は極めて客觀的ならむと企て、露伴は自己の理想——極めて

平凡陳腐なるものだが――を本位として居る。露伴は此くの如き理想むしろ空想が現實生活の上に實現せらるべきものか否かを考察せぬ。紅葉は其の描くが如き性情は現人生に見らるべきものか否かを觀察して居らぬ。要するに共に明治の時勢を離れて、自分勝手の世界を夢見つゝあつたのだ。適に紅葉は客觀的ならむと勉めたが故に表面上なりとも當時の明治時勢を書き現はした點もある。併しそれとても、根柢は類型で、たゞ明治の人情風俗に當て箝めたと言ふだけで、『浮雲』に見ゆるが如き深刻なる社會觀察もない。復た『書生氣質』に於けるが如き大膽なる描寫もない。然るに尚ほ當時の讀書界は彼れ等の作を歡迎し、文壇の名將は、紅葉を中心とせる硯友社一派と露伴とであると思惟したのは何故か。これ實に文章の力に外ならぬ。

太陽記者の謂所文章の力とは、即ち小說の現實的要素から分離した文體と云

ふ意味である。卽ち內容と文體とが分裂して考へられる時代の小說に就いて云つたものであつて、明治文壇を文章の上から見て最も大なる區域を劃すべきは、卽ち此の內容から遊離した文章力が、紅葉露伴を限りとして滅びてしまつて、內容外形不離の文體が藤村獨步花袋白鳥等によつて創められる間が、最も意義の深い文章の起源である。

世間の大多數の批評家は、美妙柳浪紅葉等によつて創められた言文一致の文體を以つて文體變遷上の最大なるエポックの樣に心得て居るけれども、これは決して根柢からの革新でも何でもない。今日になつて言文一致の創始は、やれ美妙だとか、いや柳浪だとか、隨分先祖爭ひがあるが、誰が先祖でも此の方は偶然的であつてさう大したこととは思はれない。眞の意味の功績は花袋や泡鳴や獨步や藤村やによつて力說された沒技巧論、無技巧論に歸すべきである。

紅葉露伴までの文章史は作者の學問や作者の境遇乃ち作者の個性や生活やを

度外視しても辿つて來ることが出來るが、自然主義勃興の結果沒技巧無技巧論の洗禮をうけた作家の文章にいたつては、文章が深くその作者の個性や生活に喰ひ込んで居り滲透して居るから、その文章史は生活の歴史であり個性の歴史である。

此の文章と生活の滲透と云ふことは、決してかの大町桂月等の所謂『文章は人格なり』の謂ひでは無い。桂月の文章卽人格論は大昔からゐる。嚴密に云ふと文章と云ふ語は新代の小說に對しては用ゐられる言葉では無い。文章と云はずに描寫と云はねばならぬ。紅葉露伴以前は小說家となるには一通り和漢の典籍に通ぜねばならなかつた。けれども新しくなつてからは夏目漱石の如きさへ『小說家は無學でいい』と云ひだした。文章は不必要だ。文章は寧ろ描寫の邪魔物である。

二葉亭の『浮雲』が自然主義以後に認められたのは此の意味で領(うなづ)かれるではな

いか。硯友社時代一番文章の下手と云はれた作家が、一番長く生き延びて居るのも同じく頷かれるでは無いか。かくのごとく文章の上手下手と云ふ事を單に形式的に解して居た時代から、內容を主にし作者の個性を主にする時代への推移には實に驚くべき革命があつたのである。

露伴獨自の文體

上田秋成の『雨月物語』の白峯と典亭馬琴の『弓張月』の爲朝白峯陵に詣づる一節と幸田露伴の『二日物語』とは全く同じ材料を用ゐたものであるが、此の三者の間の差違はどうであらう。秋成の雨月物語は安永五年今から百三十九年前の著作であるが、明治三十一年の露伴氏の筆が別に進歩したとも思はれぬ。試みにその一節を比較して見ると、

現にまのあたり見奉りして、紫宸清涼の御座に、朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふを、思ひきや、麋鹿のか

よふ跡のみ見えて、詣でつかふる人もなき…………

と云ふ秋成の文に對して露伴氏のは

九重の雲深く金殿玉樓の中にかしづかれおはしませし御身の、一杯の土あさましく、頑石叢棘の下神隱れさせ玉ひて、飛鳥音を遺し麋鹿痕を印する他には誰ひとり問ひまゐらするものなき、かゝる邊土の山間に物淋しく睡らせらる御いたはしさ…………

となつて居る。別に文體の進歩も何もない。もとより露伴氏は二日物語におい て擬古的な努力をして秋成以上の舊式な文章を書かうと企てたのかも知れぬ が、玆に吾人が露伴と秋成との間に時代のギャフプを認めないのは、露伴氏の文 章に新代の匂の無いのを云はうとするのではなくて、日本文の語路文脈が如何 なる材料を取り扱つても、秋成や馬琴やの型以外に出ないことを云ひ度いが爲 めである。尙ほ高山樗牛の『瀧口入道』が『平家物語』と同樣であるのも一

例である。が之も其の樗牛がニイチェ主義を傳へるに文體上に何の不便も感じなかつた如く全く舊式な文體を以つてした露伴の『出廬』逍遙の『浦島』『かぐや姬』の如き韻文體にさへも尙ほ且つ自由に新人生の複雜な問題が含み得らるゝを鑑みる時は果して眞の意味の文體の變化と云ふものは、如何なる點から必要とせられて起つて來たのであらうか。これは此の講義以外更に根柢から研究すべき一問題である。

寫生文と新文體

小說の文體に根本的の變化を與へた動力は疑ふまでもなく自然主義の運動であるが、自然主義以外に忘れてならぬものは明治三十二年正岡子規が雜誌『ほとゝぎす』に書き始めた寫生文である。

病の牀に仰向に寐てつまらなさに天井を睨んで居ると天井板の木目が人の顏に見える。それは一つある節穴が人の眼のやうに見えてそのぐるりの木目が不思議に顏の輪廓を形づくつて居る。其顏が始終目について氣になつ

ていけないので、今度は右向きに寐ると、襖にある雲形の模樣が天狗の顏に見える。いかにもうるさいと思うて其の顏を心で打ち消して見ると、襖の下の隅にある水か何かのしみが又橫顏の輪廓を成して居る。仕方が無いから試に左向きに寐て見るとガラスごしに上野の森が見えて其隙間に向ふの空が透いて見える。其隙間の空が人の顏になつて居る。丁度畫探しの畫のやうで橫顏が稍逆さになつて見えるのは少し風變りの顏だ。再び仰向になつて今度は顏の無い方の天井の隅を睨んで居ると、馬鹿に大きな顏が忽然と現れて來る。

箇樣に暗裏の鬼神を畫き空中の樓閣を造るは平常の事であるが、ランプの火影に顏が現れたのは今宵が始めてゞある。『ランプの火影』子規

ある論者の如きは自然主義よりも今日の小說の文體を誘致したものは寧ろ寫生文であると力說して居る。さて寫生文が何故にかく文體變遷上重要な位置を

とるか。無論それには種々の說明がつくのであらうが、事實の上から見て此の派から夏目漱石、高濱虛子、伊藤左千夫、鈴木三重吉、長塚節の如き作家が叢り起つたと云ふ事が寫生文派の爲めに萬丈の氣焰をあげさせるに至つた大原因である。さて其の所謂寫生文と小說の文體とについて吾人は一考を要すると思ふ。

寫生文と夏目漱石

夏目漱石氏の小說は明治大正の小說壇における一つの大なる發現であつて、殊にその先蹤の辿る可きものが絕無である點で小說發展史上特筆せねばならぬ。氏は始め『ほととぎす』に倫敦塔を出したので、ほととぎす派卽ち子規から脈を曳いた寫生文の一派の樣に思ひ、多くの文學史家も亦その部類にいれやうとして居るけれども、田山花袋氏が

虛子は漱石に比べると、主觀の色が餘程薄くなつて居る。それだけ興味がないと共に自由になつてゐる。またそれだけ作の背景をなして居る作者の

主觀がぼんやりして居る。何うにでも出て行かれるやうな餘地を殘して居る。虛子と漱石とは子規の脈を引いて居る、しかし虛子が其の正統であつて漱石はむしろそれから遠く離れて居る。漱石には今では寫生文と言つたやうなところが無いと言つても好い。

と云つた通り、寫生文脈にとつては傍系であり寧ろ根柢を別にして居ると云はねばならぬ。元來が寫生文脈と云ふもの左程根柢あり主張あつて生れたのではなくて、たゞ正岡子規が漠然理想派の文藝を排し、特に彼の淡々たる人格上の特色に從つていつとなく一派の風格を成した特色から『ほとゝぎす』一派の風が出て來たので、その出現は丁度、かの撥鬢小說が、武士道の變態たる仁俠趣味や傳法肌で日本人の特性に偶然當て嵌つたと同じ樣に、多年談林風の俳諧や墨繪などで涵養された日本人の素朴、單純、平淡の特性に旨くぶつかつただけである。文藝批評家の見地から出した理論的革命の產物では無い。正岡子規自

身も寫生文の主張に就ては僅に『病牀六尺』の一節に

理想の作が必ず惡いといふわけではないが普通に理想として顯れる作には惡いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考を表すのであるから、其の人間が非常な奇才で無い以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より小供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想といふ事が其の人を感ぜしめる事は無い事はないが、略々學問あり見識ある以上の人に見せる時には非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を滿足せしめる事は出來ないであらう。是れは今日以後の如く敎育の普及した時世には免れない事である。之に反して寫生と云ふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居るだけ其れだけ、寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄なやうに見えても、深く味はふ程變化が多く

趣味が深い。子規『病狀六尺』

と云つて居るばかり、極めて漠然たるものである。たゞ單純な元始的な寫實主義の主張としか思れぬ。殊に同じ『病牀六尺』に

目的が其の事を寫すにある以上は假令うるさいまでも精密にかゝねば、讀者には合點が行き難い。實地に臨んだ自分には、こんな事は書かいでもよからうと思ふことが多いけれど、それを外の人に見せると、そこを略した爲めに、意味が通せぬやうな事はいくらもある。…………自分の經驗を其儘客観的に寫さければならぬ。（三十五年八月廿八日）

と云つて居るが、此の主張は元來漱石が反對の立場に立つて居るのであつて、子規の此の細寫主義に對して漱石は『文學論』において

素人の考を以てすれば吾人の心に浮ぶ意識をその儘有體に紙上に寫すことは左程困難ならざる樣思はる可けれど試みに靜座して吾が腦裏に出現し來

るところのものを追究する時は其の意外に煩雜なるに驚くべし。かの宗敎家が無念と云ひ無想と唱ふるは皆此の妄念雜念の世の中を知り盡して始めて口にし得べき言語なり。走馬燈の如くに廻轉推移して非常の速度中に吾人意識の連鎖を構成する成分を一々遺漏なく書き出さんことは決して人間業に非ず。『文學論』二五五頁

と唱へ、科學の時を重んずるに逆に文學は時間を全然沒却するものとし、覺悟印象のみを以つて眞僞を決し、且つその得意の間隔論において作家は燃ゆるが如き情熱を以つて作中の人物に同情せねばならぬと主張しその引例にあげたゴールドスミスとバーンスとの詞の比較においても極力バーンスを賞揚して居る位である。

しかるに此の夏目漱石が何故に非人情小說とか餘裕派とかを主張しだしたか。

れる。が要するに漱石は文章家であつて文章に重きを置き、一種の理想家であつて、子規などよりも露伴に近い。彼と露伴との比較は曾て浩々歌客が

漱石と露伴

それには當時の文壇に於ける種々の事情と文學者としての漱石の立派との關係、云はば一種の處世的見識と云ふものがあつたからとも云は

漱石の文を露伴のに比し候時は、露伴のは漢文和文（所謂）より來り、漱石のは英文俳文（特に寫生文）より來れるの別あり。露伴は描寫の筆路を客觀に行りながら主觀蔽ふべからずなりゆき、漱石のは文體は人格なりと云ふショーペンハウエルの說の如く、その文は人格の現はるゝを期しながら且つ客觀に之くの傾あるに似たり、前者は自家の理想を蔽はんとしてその個性の力勁きが爲めに鋒鋩自から露はれ、後者は自家の理想の含まれたるものを殆んど個性の露るゝ刹那に於て、客觀的に放過し去る、試にわれ等が好んで用ふる漢詩論の神韻と空靈との品類を以て視候はんに、漱石の文の精

髓は神韻にして露伴の文の極致は空靈に在りと申すべきか。と評したごとく純客觀の寫生文派とは餘程離れて居る。漱石自身の素養から云つても文章に執する方で、その文章の愛憎についても次ぎの樣な事を云つて居る。

一體自分は和文のやうな柔いだら〳〵したものは嫌で、漢文のやうな強い力のある卽ち雄勁なものが好きだ。また寫生的のものも好きである。けれども俳文のやうな妙に凝つた小刀細工的のものは嫌ひだ。俳文は氣取らないやうで、ひどく氣取つたものである。これを喜ぶのは丁度樂隱居が古茶碗一つをひねつて嬉しがるのと同じ事だ。徒らにだら〳〵した「源氏物語」みだりに調子のある「馬琴もの」「近松もの」さては「雨月物語」なども好まない。「西鶴もの」は讀んで面白いと思ふがさて眞似る氣にはなれぬ。漢文も寬政の三博士以後のものはいやだ。山陽や小竹のものはだれて居て厭味である。自分は嫌だ。

漱石の所謂餘裕派

自然主義のセッパ詰つた文藝に對して、夏目漱石は一寸買物に行つて神樂阪で遊んで來ると云つた樣な餘裕のある文學を主張した。此の主張は自ら外形の上にも表はれて來た。彼の文章は眞實とか實經驗とかに忠實と云ふのではなく、讀者の意表に出るやうな奇拔な警句で充滿されて居る。そして幾らでも文字を弄ぶ。例せば『艸枕』の一節で次に引いた例などは自然主義の小說家なら二行で書いてしまふ。獨歩なら單に『散髮屋の主人は手荒く余が頭を掻き廻した』位で濟ましたのを、漱石は何度までもミルトニックな形容を弄して居る。

『頭垢丈落して置くかね』

親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、斷はりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此の爪が、黑髮の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する。

余が頭に何十萬本の髮の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こそぎにされて殘る地面がべた一面に蚯蚓腫にふくれ上つた上、餘勢が地盤を通して、骨から腦味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を騷ぎ廻はした。

「どうです、好い心持でせう」

「非常な辣腕だ」

高濱虚子

漱石は寫生文脈ではないが、虚子は純粹に此の派を繼承して居る。そして又小說の文體の變遷に及ぼした寫生文の影響など云ふことも餘程な自信を以つて說いて居る。彼は明治四十年頃寫生文の純客觀的態度より主觀的態度にかはりつゝあることをも認め、寫生文の發達に努めた事は特筆すべきである。明治四十年頃虚子は自ら

もとより寫生文も技巧ばかりではない。內容の方にも主張がある。けれど

も技巧の點に於ては今日迄の文壇にありて、急先鋒に立つたと云ふことに躊躇しない。自然派の叫聲は寫生文派の者にも多少の刺戟を與へた。けれども寫生文派の文章が今の文學に直接に及ぼした影響は決して少くない。若し今日に於ける新技巧を論ぜんとならば、決して寫生文を閑却することは出來ない。寫生文の主張するところは文字通り寫生である。自然の寫生である。如何に自然を寫生すべきかにある。卽ちフローベルの一字を苟もすべからざる程度に於て、我等はいかなる思想をも自由に表白し得ると信ずる。ナチユラリズムはもとよりシムボリズムとかミスチシズムとかの何れたるを問はず、悉く技巧の上に習練を要することは無論である。寫生文家は今日尙ほ主として新技巧に向つて不斷の努力を續けつゝある。寫生文家がナチユラリストとなるかシムボリストとなるか新ロマンチストとなるかは未來の問題である。

と云つて寫生文の爲めに文章變遷史上に重大なる位置を要求した。吾人も此の要求を妥當だと思ふがしかし寫生文は日本の小説壇の開拓に渾身の勇を出して働いたのだとは認めないで、偶然にサイマルテニアスリーに起つた明敏な頭腦の働きが、端なくも自然主義運動と偶然の一致を見たのであると斷ずる。

近代文藝の特相

さて近代文學は內容と形式とが一致して居るから內容を度外視して外形を論ずる事は不可能である。最近代の文體の特相は內容の特相と一致する。その內容の特相に就いて島村抱月が

(A) 個人主義的

(B) 幽欝的傾向

(C) 生　活　難

(D) 現實暴露の悲哀

の四つを數へあげた。

此の四特相は誰しも首肯する處であらう。そして此の特色は一々自然主義勃興以後の文體に特相をなして居る。無論二十年前後の才子佳人を描いた小說や撥髮小說などには秋毫も見られぬ處である。（A）の個人的主義的傾向は材の上から見れば自分一個人に關する事件までが描寫の料となると同時に、文章が下手ならば下手ながらにその人の個的な特色として尙ほ且つ立派な文藝の要素となり（B）の幽欝的傾向は科學の發達急にして生活が極端に多忙になり煩瑣になつた結果人間が神經過敏となり小說の文體の如きも極めて微細な點にも神經の微動を見せるやうになつた。（A）の例が岩野泡鳴小川未明ならば（B）の例は水野葉舟があり森田草平がある。便宜の爲めに次ぎにその例を揭げる。

電柱から電柱に繫つて黑い繩のやうなたるんでゐる線は灰色の曇つた空の下に遠くまで連つてゐる。其の行衞を見ると遠くの森が黑くなつて何處やらの製造場の煙突から黑い煙が上つてゐる。何處を見ても晴れた靑い空も

見えなければまた賑かな喜ばしい色合も見られなかつた。
英太は行くべきあてもなく電車路について歩き出した。方角も分らなかつたけれど北と思つた方を指して歩いて行つた。赤い電柱が泣いてゐるやうに淋しく立つてゐる。其處を曲つて森の方に來ると公園の入口であつた。
青銅で鑄られた門が立つて居る。彼は其門を通つて公園の中に入つた。
冬枯のし盡した淋しい公園には獨り樫の木の葉が白い裏を返してさわ〳〵と寒い風に吹かれて鳴つてゐた。而して葉の落ち盡した青桐の木や柳の木が禿頭の人のやうに立つて居る。ある木は神經の鋭い無學の男の立つて居るやうに思はれた。ある背の低い木は優しい窶れた女の頭髮の亂れたやうに細かな枝を擴げて垂れて居た。…………未明の『鳶』より
暖かい、水蒸氣の立ち罩めた…………もう春も手の届く處にある樣に思はれる晩であつた。私は森の中に住んで居る人を訪ねて歸つて來る時。……

……私を送ると言つて一所に家を出て來た人と二人連れで其薄暗い森の中を出て、話しながら步いて來た。

道の傍にはぱら〳〵に家があつて、片側に若い人の丈を隱す位な杉が植つて居る。その間からはもう、家に燈がつきはじめた。――全くの黃昏ごろで、逢ふ人の顏が、薄い闇の中から、ぼつと浮んで居るやうに見える。

その道をうね〳〵步るいて來た。二人はこの薄ら寒い、ぼつとした、うるんだ樣な夜をしみじ〳〵と身に感じながら、話もせずに行く。

ふと目の前に黑い人影が浮ぶ樣に見えた。…………そして、すれ違つた。

…………と、私が振り返ると、目の前に女の顏が見えて白い齒を出してにつと笑つた。

私は止まつてしまつた。そして息をひそめて、四邊を見た。…………女の後影は黑く見える。二三軒の家からは燈火がちら〳〵見える。…………空

にはまだ薄いが晝の光が何處かに殘つて居る。星が光つて見える。

私の動かないのを見ると、友は『何うした』と言ふ。私はふと言つた。

『何だらう』

『何が？』

『何が？…………つて今の女さ』

『今の女つて何だ』

『…………』

『…………』

と私の目には白い齒――女の笑つた時に見えた白い齒が、薄闇の中にはつきり見える。何處からとも知れず、血の濕みの無い顏が、霧の中からふつと見えてにつと笑つた樣だ。

『吾々の目に見える世界。…………』と、今、自分が立つて居る處が狭く、薄靄(うすもや)

の奥に他の世界が思はれる。………今は――この春の黄昏…………女の白い歯が深く眠つた夜の夢の樣にも思はれるが、私は、私はふとこゝろの目で形の見えない世界の事を思ふ――葉舟

(D)の生活難に至つては正宗白鳥があり(C)の現實暴露の悲哀を描いて田山花袋がある。普く知られて居るから例を引くまでもあるまい。無論此の四特相は內容の上から云つたもの。近代の作家は誰も皆此の特質を具有して居る。更に文體そのもののうへに表はれた明かな特色を尋ねると次ぎの三つのイズムが非常な強い影を投げつけて居る。

三つのイズム

(一)　官能主義　Sensualism
(二)　印象主義　Impressionism
(三)　象徵主義　Symbolism

である。所謂文章で讀ませた時代には官能を經て來る文學などはあまり用ゐな

かつた。まして嗅覺、觸覺に訴へるやうな文藝は無かつた。官能的な特色を發揮した作家は水野葉舟の如きがあつて別に引いた例など好適なものであるが、茲には小説ではないが北原白秋の「思ひ出」の序を特に例に曳く。

長い霖雨の間に果實の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものの卵はねばねばと瀦水のむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃めきを先だてゝ、烘くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて惡臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮒のあたまは苦しさうに泡を立てはじめる。七八月の炎熱はかうして平原の到るところ街々の激しい流行病を仲介し、日ごとに夕燒の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖の漁師原には男も女も半裸體のまゝ紅の西瓜をむさぼり、石炭酸の强い異臭の中に晝は寢ね、夜は病魔退散のまじなひとして癈れた街の中、或は堀の柳のかげに Bank（椽臺）を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕した虎刺拉患者は恐ろしさうに蒲團を匍ひいだし、ただぢつと薄あかりの中に色變へてゆく五色花火のしたたりに疲れた瞳を集める。

（二）の印象主義の作例としては島崎藤村の『春』に幾多好適例を見出す。印象主義の簡單な說明として田山花袋の語を籍りる。

印象主義は、客觀的外面的でなければならない性質を持つてゐることを私は曾て言つた。印象主義は眼から入つて行つた藝術である。色彩を重んじ刹那の感じを重んずるも無理はない。

印象風に出て行つた作品は、唯其の外面から受ける感じ——それに由つて

味はれる味はひより外に何物をも要求して居ない。見る人の解釋の何物をも容れないと共にまた何物をも容れるといふ餘裕がある。

眼だけで、頭腦まで入つて行かない處に此の主義の面白味がある。

（三）の象徵主義は二葉亭の譯したアンドレーフの『血笑記』田山花袋の『一兵卒』などよき模範を示した。舊派の作者が比喩を用ゐて說明するのを新しき作者は隱喩を用ゐ、更に進むで象徵を用ゐるやうになつた。試に永井荷風の小說『牡丹の客』の結末にある

唯さへ濕氣の多い場末の事で、往來は隨分泥濘つて居る。自分は女と二人で水溜りをよけながら門を這入り大きな古木の鉢物を置き並べた敷石を傳つて行くと、雨を避ける低い葭簀の天井に、夕暮の光を遮つて奧庭一面は驚く程眞暗であつた。丁度二三人の女中が數多く釣した石油ランプに火をつけ廻つて居る處で、列をなして植付けし牡丹の花は、鈍く黄い灯の光の

達く處だけ朦朧として、僅に夕闇の影の中に浮出して來る。然し大方は散つてしまつて、然うでないものも憂はしく色が褪めて、蕋ばかりが黑く大きく開いて居る。强い日の光や爽かな風に曝して置いたら疾に潔く散つて了つたものを、人の力で無理やりに今日までの盛りを保つた深い疲勞と倦怠の情は、庭中の衰へた花一輪づゝから湧き出して、丁度それに能く似た自分等二人の心に流れ通ふやうな氣がした。佇んで見て居ると風も無ければ歩く人の足音も無いのに、彼方の花もこなたの花も、云ひ合したやうに重さうに花瓣を絶え間なく落す。花瓣は黑い葉の面に止まるのもあれば其處はもうランプの光の達かない葉蔭の土に滑り込んで了ふものもある。時間が遲いのと時節が過ぎたのとで、見物の人は這入つて來ない。外の河岸通りでは依然として子供が囃す唄の聲が、折々は人數の夥だしく增えるらしく高まつて聞える。

「本所の牡丹てたつた此れだけの事なの」
「名物に甘いものゝなしさ」
「歸りませう」
「あゝ歸らう」。

の一節を見るに、これは牡丹の花と男女との運命を比喩的に並べた樣にも思はれるが、單なる比喩、アレゴリイでは決して無い。其處に一種の象徴味があるのであるが、それが極無意識に働いて居る。象徴主義は此の味ひを強く出すのである。

ソフトな文體

以上三つのイズムを綜括して考へると朦げながら新文章の特色がうかゞひ得られる。或る一派の評家が長田幹彥の小說を新しい俗受小說だと云ふ。よしそれを俗受小說だとするも、昔の俗受小說に比べて尙ほ此の三ッのイズムの洗禮を受けて居ることは明白である。此の三ッのイズムの影響を總

勘定して見て後に定つた自然派文藝の新特色は島村抱月が殊に自然派の文體を見ると、著しくソフトになつて來たといふ事實が認められる。是はやはらかになつたといふ意味であるが決して柔弱になつたと云ふ意味では無い。卽ち畫家彫刻家などが使ふ專門語の上のソフトであつて言ひ換ふれば感情思想がごく細かな屈曲したところまで出され易くなつて來たといふのである。丁度彫刻家が佛像を刻む場合に木は堅いけれども名人がやれば曲線、直線が自由に美妙に、やはらかに出て來ると同じく、文體上に於ても作者の思想感情が動くまゝに出て來た。卽ち全體として硬ばりが取れて、內の曲折がよく出て來るやうになつたのである。

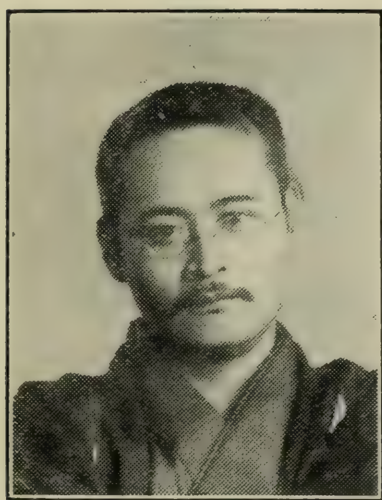
と云つたのを結論とする。かくの如く明治の初期以來何等かの方面へ新活路を見出して古文脈や德川文學脈や又は漢文脈を脫しやうと努めて止まなかつた明治の文章は、兎にも角にも現代的口語と合致した地盤の上に自由な纎細な明快

な的確な表現に役立つまでに發達して來たのである。云ひ換へれば舊來の制約的乃至遊戲的の境地から、生活そのものと併行して自由な發展をなし得る境地まで日本の文章が進步して來たのである。もつと平たく云へば言ひ表はさうとする事を言語や文體の爲めに制限して甘んじて居る境地から、言ひ表はさうとする事を本位として自由に變化し發展し得る境地まで進んで來たのである。而してこゝまで來て始めて文章の個性化――卽ち書く人の個性に應じて文章を自由に變化あるやうにする事が可能となるのである。

明治小說文章變遷史　終

明治小說內容發達史

田山花袋述



田山花袋氏

目次

明治小說內容發達史

田山花袋述

第一期（元年より十八年まで）

一　戯作者の戯作

茲に明治の文壇に提供された重なる小說の內容を辿らうと思ふが、もと〳〵文壇の思潮なるものは波瀾重疊して、且つその複雜した細かい空氣は容易に窺知することが出來ないのが常であるし、出版者と作者と批評家との錯雜した渦のやうな關係をも立入つて知らなければ、その眞相に觸れることは出來ない。要するに明治文壇のより眞實に近い姿は更にこれを後年に待たなければならな

い。それに明治の文壇で私の關知してゐるのは十八年の『小說神髓』以後であるから、それ以前は勢ひ正確に精密に說くことはむづかしい。

明治文壇の曙は坪內逍遙の『小說神髓』によつて開かれたと言はれてゐる。勿論その當時にも既に幾多の小說あり、ドラマあり、飜譯も少くはなかつた。また名高い政治小說『雪中梅』だの『新粧の佳人』だのゝ出たのは『小說神髓』以後であつた。併しながら當時の文學は今の意味の文學ではなく、その重な作品といふものも德川時代の戲作をその儘に踏襲したものか、または興味中心乃至方便のための文學で、眞の藝術的意識を以て書いたものは一人もなかつた。三世種彥だの二世春水だのが『白縫物語』や『北雪美談時代加賀美』といふやうな德川時代からの續き物に筆を執つたりした。文體から內容までも春水、一九乃至馬琴以外に一步も出なかつたのである。

一般讀者にしても文學に對しては眠りを續けてゐたが、それでも維新の革新

を享けた實社會の要求から飜譯熱はかなり盛んで、既に明治二年から四五年の間に、福澤諭吉の『世界國盡』『學問の勸め』だの中村正直の『西國立志篇』だのも出て、これ等が當期の小說に影響したことも尠少ではなかつた。

當時、脚本界の默阿彌と相對して小說界の人氣者として立てられたのは假名垣魯文であるが、『西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜圖解』など彼の代表作として見るべきものは、三年から五年に亘つて版行されてゐる。中にも『西洋膝栗毛』は福澤諭吉の『西洋事情』を骨子として一九の『膝栗毛』に倣つたもの、その巧みに當時の新舊思想、風習の衝突を諷したとはいへ、根本はやはり三馬一九の舊態を脱しなかつた。當時の代表作にして既にこの通りである。いかに彼等が德川末期の惰力によつて、卑俗な低級な無自覺な文學的生命をつゞけてゐたかは解らう。『胡瓜圖解』もまた福澤諭吉の『窮理圖解』を飜案しその字音を取つたやうなものだが、やはり滑稽本洒落本の範圍を出ない。

魯文の活動したのは重に明治四五年の交であつたが、彼の滑稽趣味は延びて服部誠一の「東京新誌」となり、成島柳北の「花月新誌」となり、「圓々珍聞」となり「魯文珍聞」となつた。一時もてはやされた『東京新繁昌記』の類なども、魯文の洒落と諷刺を漢文學に交ぜたやうなものであつた。尙ほ一方、魯文の流行と相並んで八九年頃、松村春輔などゝいふ人が馬琴の亞流を汲んだ際物風實錄物を出したり、萬亭應賀、笠亭仙果、柳水亭種清、梅亭金鵞など皆なそれ〲に筆を執つたが、いづれもその內容は勸善懲惡主義に則つて、善玉惡玉二種の人物の葛藤を叙し、結構から見れば草双紙、讀本の舊態を脫せず、文章もまた馬琴、春水、三馬、一九を踏襲したものであつた。

明治五六年の頃は民間に新聞雜誌が競ひ起つて、當代の文章に携はる者は筆を載せて多く新聞社に入つた。岸田吟香、末廣鐵腸、栗本鋤雲、藤田鳴鶴、矢野天溪いづれも新聞の人であつた。中にも「東京日々新聞」の福地櫻痴と「朝野

新聞」の成島柳北とは共に相拮抗して新聞界の双璧と謳はれ、社會上の新聞の位置は漸次重きをなした。七年には今の「讀賣新聞」が發刊され、次で翌年「平假名繪入新聞」の發刊されるや、茲に繪入新聞の流行となり、各新聞いづれも作者を聘して續き物を連載せしめた。從つて在來の盆と正月との二回に發行してゐた讀本の發兌はすたれ、續き物の隆盛となつた。魯文は元より染崎延房(二世春水)條野採菊、古川魁雷、伊藤專藏、やゝ後れて須藤南翠の諸家がいづれも續き物に筆を執つた。

二　飜譯小說と政治小說

明治十年西南戰爭が終つてからは、內政はほゞその緒につくことが出來たと言つてもよからう。維新の改革は全く一段落を告げて、人々は漸く平和的文明

の準備に取掛つた。そしてこれから以後、明治文學を最後まで支配して、そのまゝに大正の時代に入つた外國文學の飜譯乃至飜案の氣運は、この後四五年を經た十五六年の頃からぼつ〳〵と萠しかけた。

十年の役を終つた日本の政界には從來にない不思議な現象が起つた。それはかの板垣伯等の自由民權說に呼應して、民間政論家の多くがフランスの政治思想をそのまゝに輸入しやうとしたことである。フランスに於ける思想と問題とは在野政論家や思想家や學者の手に依つて直ちに日本に移植されやうとした。就中、中江兆民の譯したルソーの『民約譯解』(十五年)などは實に一世を風靡するの概があつて、世を擧げて政治に狂奔し、櫻痴、柳北、鐵腸をはじめ栗本鋤雲小野梓、馬場辰猪、末松青萍、藤田茂吉、矢野文雄など、當時の文章家はいづれも時に矯激な言議を試みて筆禍を買つた。自由黨の機關新聞や雜誌には、極端な革命小說だの殺伐な虛無黨小說だのが熾に掲載された。その多くは西洋の

政治小說の燒直しで、大體は自由民權の意を寓した傾向小說とも言はるべきものであつた。『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』などの題目を見たゞけでも、內容は推知される。言ふまでもなく方便のための文學で、結構、文章また舊時の草双紙に類するものであつた。

飜譯小說はやがて當時の流行となつた。先に述べた人々は無論英語も達者であるし、西洋の政治の硏究はやがてイギリスの政治小說或は歷史小說の耽讀となり、彼等は相率ゐてリットンの小說だの、アラビアンナイトだのゝ飜譯に從つた。織田純一郞の十二年に譯出したリットンの『花柳春話』を先驅として關直彥の『春鶯囀』藤田鳴鶴の『繫思談』牛山鶴堂の『梅蕾餘薰』尾崎學堂の『經世偉勳』服部誠一の『二十世紀』坪內逍遙の『慨世士傳』などがあるし、井上勤も直譯體の文章で『海底旅行』だの『月世界旅行』だのゝ科學小說を譯出した。中について最も歡迎されたはヂスレリー卿卽ちビーコンスフイルド侯の政治小說で、卽ち政

治と文學との一對の花のやうに思はれた當時に、經國の大政治家であり政治小說家であるビーコンスフィルド侯の閱歷は、實に彼等卽ち當代のハイカラ連の偶像であつた。

飜譯小說も次の政治小說と同じやうに、共に一時の流行文學に過ぎない。しかしこれ等の運動が隱微の間に明治文學革新の促因ともなり背景ともなつたことは爭はれない。

中江兆民の『民約譯解』の出た同じ十五年に、外山ゝ山、矢田部尙今、井上巽軒の集作『新體詩抄』が出た。これは實に今日の長詩の濫觴をなしたもので、當時西洋思想を愛好する一部の靑年の間には最も持囃されたものだ。飜譯の氣運と共に明治文學の革新にはかなりの役目をつとめたものと思ふ。集中にはグレーの墓畔吟だのテニソンの輕騎兵の歌だのが譯されてあるかと思ふと、まだろく〳〵格調をなさない七五の詩歌や、昔の今様だのゝ創作が無秩序に並べてあ

つたのを記憶する。

『小説神髓』が出たのは十八年四月であるが、逍遙にはその前々年にセクスピアの譯劇『該撒奇談』などがあつた。しかし『小説神髓』以後と雖も政治小説なるものはまた頗る流行を極めた。時期は既に劃然と自覺的の革新運動に入つたにも拘はらず、一般讀者は依然として政治小説を歡迎してゐた。

政治小説の由來は飜譯小説と同じく民間政論家の手で作られた。高野長英、渡邊華山兩志士の閲歴を取材とした藤田鳴鶴の『文明東漸史』(十七年)が、これが嚆矢だと言はれるけれど、これは題名の示す通り一種の史論とも見做してよいもので、後の『雪中梅』や『新粧の佳人』に至つて始めて史傳といふ境を離れて架空的の物語になつた。所謂政治小説の重なものには矢野龍溪の『經國美談』柴東海散士の『佳人之奇遇』末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』須藤南翠の『新粧の佳人』などが最も名のあつたもので、これ等作物の内容は多く才子佳人の身の上に人

情を織り込んで、性格など殆んど言ふに足らない粗笨な大まかなもの、國を愛する慷慨悲憤の士に才色絕美の佳人を配して、それに政治上の意見などを附した所謂傾向物であつた。その他にも一種センチメンタルな『世路日記』といふものがあつた。

『佳人之奇遇』の出たのは十八年頃と思ふ。作者は實際は高橋太華山人ださうで、一卷、二卷が出てから非常に人氣を博し、たしか八卷まで出たやうに覺えてゐる。漢文學の思潮と政治熱との橫溢とをあてゝ書いたものであるが、藍鼠色の表紙の和裝美本で、當時の書生は皆なこれを懷にして步いたものだ。筋は東海の遊子に愛蘭の一佳人幽蘭女史を配し、その周圍には世界の各亡國の志士が遊星のやうにそれを取卷いて、戀々たる別離の情などが到るところに繰返してかゝれてあつた。殊に文中に挿んだ詩などは最も靑年に喜ばれてゐた。勿論思想などの取立つて言ふべきものもなく、文章も漢文直譯體の非常に誇張した

ものだが、その誇張したところが、革新の後を受けた當時の粗大な趣味好尙に投じたのであらう。

『經國美談』の出たのもそれよりも少し前であつた。これは矢野龍溪が、ギリシアの正史を釋義布衍して稗史的に仕組んだもので、自序に據ると『本書は正史の實事に間々補述を加へ、人情滑稽を雜へて以て小說體とした。事實とはいへあまりに殘忍に過ぎ、或はその所行の人情に近くないと思はれる箇所は、間々改めたところもある。凡て讀者をして小說を讀むの愉快を得ると同時に、正史を讀むの效能を得せしめる』のが目的であるといふやうな斷り言をしてゐた。文章は片假名交りの雅醇な記事文體で、各章の終りには鋤雲、柳北、鳴鶴、學海などの批評を添へてゐた。殊にこの書の中心思想には日本の興國と相通ずるものが多かつたので、忽ちにして當時の讀書界を風靡し、殊に青年の間に讀まれて、祖國に對する實際的の思想を深く彼等に傳へた。

『雪中梅』と『花間鶯』とは共に末廣鐵膓の作で、十九年から二十年の間に出てゐる。やはり『佳人之奇遇』などの系統を引いたものだが、文章はやゝ和らかになつてゐた。それに寫實脈をより多く取入れてはゐたが、相變らず志士であり才子である人物を點出して、筋には當時流行の政治界の消息を取入れ、所謂『世態に感憤する處あり、情話に託して政治上の有樣を描出しやう』としたものである。尤も『政治上の有樣』といひ『描出する』と言つても今の所謂狀態を描き有樣を寫す意味には遠く、後の明治文壇に交渉のある作などゝは言はれないが、それでも當時――二十三年の國會開設といふ問題を當込んで書いてあつたから、その點で人氣に投じ、『佳人の奇遇』ほどの勢力はなかつたが、それでも一時讀書界を席卷した。

『新粧の佳人』の出たのは二十年頃であるが、南翠にはこの他にも『綠簑談』などがある。彼の作の歡迎されたのは二十年から二十一年頃で、卽ち當時の「改進

新聞」に書いた數種の小說は大に讀書界を動かしたのである。『新粧之佳人』もまたその一つで、作中には、當時流行の舞踏會の光景だの、若手の政治家や妙齡の佳人だのが描かれて居り、それも誰は誰、彼は彼と一々モデルを想像することが出來るやうに書いてあつたので、一層の興味を惹いた。勿論自覺的の態度に書かれたものではないし、ひどく誇張したものではあるが、當時の幼稚な世間を魅するには十分であつた。

第二期　（十八年より日淸戰爭まで）

一　初期の小說

坪內逍遙の『小說神髓』が出來たのは明治十八年で、幾度かに分冊されて市に

出た。普通この書は明治文壇の曉鐘だと言はれてゐるが、その書の以前にも多少の準備的氣運は芽ざしてゐたのだ。卽ち先に擧げた各種の飜譯小說、外山、矢田部、井上等の『新體詩抄』中江兆民、菊池大麓の英佛の美學、修辭學の譯書などは、これが萠芽もしくは背景とも稱することが出來る。『小說神髓』に至つてはこれ等を綜合して明かに意識的に改革運動を起したものと見てもよい。

『小說神髓』以前の小說が假名垣魯文か乃至は梅亭金鵞一派のやうな卑俗な戯作か、でなければ『佳人之奇遇』『經國美談』流の稗史的、記事文的の政治小說であつたことは、先にも說いた。この時に當り、一方才子佳人の空想的物語の歡迎される世に、突然、文壇の一角から覺醒の鐘を撞鳴らしたのが『小說神髓』である。

『小說神髓』は世人に小說なるものゝ原理を敎へ、作家に創作の法則を敎へた、言はゞ一種の小說論であつた。恐らくは當時イギリスあたりに流布されてゐた、

詩と小説と劇との區分を書いたやうな、極くポピユラアな書物の影響を受けて、ホワット、イズ、ノヴエルなる意味を始めて日本に傳へたものであらう。革新の初頭に立つた『小說神髓』からしてが、海外文學の移植であつたいふことは、明治文學を回顧するもの〻常に念頭に置かなければならないことだ。

『小說神髓』上下二卷十章、上卷にはまづ藝術たる小說の根本性質から、その起源と變遷との大體を述べ、更に小說なるもの〻眼目は專ら人情の描寫にあるとして、從來の勸善懲惡小說を根本から覆し、次で小說の種類とその四大稗益を列擧してゐる。下卷に於ては、更に小說の法則を論じて古來の日本の小說に解剖と批判とを加へ、作家の則るべき標準を示し、或は文體の得失、脚色、主人公の設置から敍事法に至るまで、細微を穿つて、博引旁證、所謂小說の神髓を說破して剩さなかつた。就中、この書の眼目とするところは、在來の勸善懲惡主義、實用主義、目的主義、方便主義的の作家の宿弊を打破して、眞の模寫

主義卽ち寫實主義を唱道しやうとする點にあつた。兎に角にも日本に於ける藝術本位の新說はこの時から始まつたと言つてもよろしい。小說の寫すべく描くべきものであることを道破した第一人者は實際坪内逍遙であつた。これからの明治文壇は直接間接に『小說神髓』の影響を蒙つてゐた。著者曰く『小說の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此人情の奥を穿ち、心の中の内幕をば漏す所なく描き出して、周密精到なるを小說家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとなす。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強て人情に悖戾せる、否、心理學の理に戾れる人物などを作り出さば、其人物は既に人間世界の者にはあらで、作用が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譯は奇なりとも、之を小說とは言ふべからず。彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八

士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり。されば小說の作者たる者は專ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正の情念をば作り設くる事をなさず、唯だ傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり』と。また曰く『模寫小說は人生の種々相收めて此裏に在り。されば模寫主旨の小說には求めずして諷刺諷誡の決備はり、暗に人を敎化する力あり。別に勸懲主旨の小說を要せざるなり』と。

寫實を敎へ、心理描寫を說き、主觀を沒したる客觀的態度を奬め、從來の小說の悉く邪道なることを道破した點はたしかに逍遙の偉勳である。また曰く『苟にも文壇の上に立ちて著作家たらむと欲する者は、常に人生の批判をもて其第一の目的とし、かくて筆を執るべきなり』と。

實際、明治文壇がこの書の出現に依つて、劃然と自覺の期に入つたといふの

は事實であらう。十九世紀に於けるリアリズムなるものは、こゝに始めて日本の文壇とも密接な關係を保つて來た。

『小說神髓』なる評論に依つて明治文壇の幕をあけた逍遙は、同じ年の翌月から、その書の旨意を體現した『當世書世氣質』といふ手本を世に出し始めた。この小說は全部十七卷で、十九年一月に至つて全部完結したが、その材料、その人物、その文章、すべて從前の小說とは大に趣を異にした。これを前の稗史的政治小說に比べると、兎も角も實際社會を材料にし、性格などにも注意して、文章もまた新味のある一種の雅俗折衷體である。さて一篇の寫すところは、當時の東京に於ける新時代の書生なるものゝ氣質で、まづ數人の書生を捉へ來つて、その性格と境遇と波瀾とを寫し、更に一書生と歌妓との情話を緯としてゐる。しかもかくの如き光彩に富むだ作が、當時一帝國大學生の手になつて、その作者は未だ年若く、才氣すぐれた人だといふ評判を聞いた時、世人はどんなにか驚

愕の眼を見張つたことだらう。それに、作中に描かれた書生の多くは一々モデルがあつたので、一層内輪の喝采の聲を高くした。

併しながらこの書の歷史的價値は兎も角として、作そのものだけを嚴密に評する時は、實際この作は傍觀を標榜し寫實を本旨としたものでありながら、內容それ自らは明かに作者の主張を裏切つてゐた。序文には『此を訓誨の料にすると之を奬誡の資にするとは讀者輩の心に任せる』といふ意味があるものゝ、實際はやはり作者自身がこれに敎化の意を託した氣勢がないではない。所謂小主觀や說明やを隨所に取入れたのは勿論、開卷第一段に『それとはいはず語らずして、讀む人々に悟らしむる覆車の誡、因果の關係、善きも惡きもあからさまに、作者が自儘の考案もて、いはぬが花か、讀む人が自得るも花か』などあるのでも、その一端は解る。從つて勢ひ描くといふよりも說くに近い作品であつた。やはり結構を重んじ、性格も曖昧にし、潑溂たる生氣に乏しい。そ

れに心理なども未ださほど深くは入つてゐないし、その文章に至つては掛け詞だの地口などが最も多く、要するに勸懲主義の戲作を排して立つた作でありながら、まだその根本から戲作の臭味を脫し切らないものであつた。創作としては寧ろ後の『細君』などが、より整つた價値のあるものと思ふ。

『書生氣質』以後、『妹と脊鏡』『內地雜居未來の夢』を經て、逍遙は二十二年「國民之友」第一春季附錄に『細君』を發表した。これは既に二葉亭の『浮雲』が出で「我樂多文庫」が出で、美妙齋の『武藏野』が出た後で、美妙の『蝴蝶』などゝ一緒に出たものだ。これを先の『書生氣質』などに比べると作としての價値は一層この方にある。一人の女中を點出して、その女の眼に映じ心に映つたその頃の紳士の家庭なるものが、よく書かれてある。周圍も見えてゐる。心理もある、作爲のあとも少なく、文章も滑脫自在な雅俗折衷體でさほど厭味がない。ことにこの作は某法學博士の家庭をモデルとしたものだといふので、かなりの評判で

あつた。かくてこの二十二年の『細君』以後、逍遙は全く小說には筆を絕つた。逍遙の『小說神髓』の主張を完全に具體したのはかの『書生氣質』ではなくて、却つて二葉亭四迷の『浮雲』であると言はれる。

明治文學が外國文學の暗示乃至その模倣に依て推移した事は爭はれないが、その初發からして、イギリスとロシアとの二國の文學が背景になつてゐた。卽ち『小說神髓』の背景にはイギリス文學があるし、『浮雲』の後ろにはロシア文學があつた。言ひ得べくんば二葉亭の『浮雲』はロシア文學の直輸入であつた。恐らくあの作は二葉亭がゴンチヤロフあたりの原本を机上に置いて、一方當時の世相を觀察しつゝ、そのまゝゴンチヤロフを日本の當時の社會に移植したものであらう。よし、その作の內容が藝術的氣分に遠い、卽いた內面的のものであらうと、內容と外形と接觸の度の少ないものであらうとも、『浮雲』のやうな價値ある作品が、當時の幼稚な初期の文壇に出現したのは、まさに奇蹟以上の奇

蹟である。

『浮雲』の第一篇が世に出たのは二十年であつたが、無論二葉亭の名前などで引受けてくれる本屋はない。そこで彼は第一篇に逍遙の名前を借り、翌年の第二篇には二人の合著とし、第三篇だけを後れて二十五六年頃始めて彼一人の名前で「都の花」に連載した。けれども『浮雲』の出るについて、逍遙と併びにその『小說神髓』とがその刺戟となつたのは言ふまでもない。中にも作者の苦心の一つは文體の點であつたらうと思ふ。それは從前の漢文直譯體などは元より彼の想を寫し得べくもないし、殆んど同時代の頃の美妙の言文一致もまだ彼には慊らぬところがあつたらしい。そこで逍遙などゝいろ〳〵相談の上、美妙の『です』調に對して『だ』調を創始した。かやうにして彼は兎も角も、ゴンチヤロフの樣式を以て日本の當時の世相を、彼獨自の文體で描寫しやうと企てた。

けれども當時、『浮雲』の精細な心理描寫に眼を聳てたのはほんの小數の有識

者に止まつて、あの作はたゞ單に妙なものゝ不思議なものとして世に迎へられ、決してその當時に於て反響を呼起したものではない。『浮雲』三篇の中、初篇にはまだ戯作風の筆跡を留め、ところ〴〵に作者の説明や駄洒落に近い註釋を加へ、或はその態度の嚴肅を缺いてゐる點がないではないが、しかもその精密な心理描寫の筆はこれ迄の創作類になかつたのは勿論、今日と雖も尚ほ棄て難い心地がするのである。よく書けてゐるのはやはり主人公の性格であるし、その新時代の面影を見せた女主人公の點出も、又異彩を放つたものである。これは後年、かの『其の面影』にもやはり同じ型の女主人公が出て來るばかりでなく、『其の面影』を書いた當時の彼の言葉には、時代の推移を見せた女學生を書きたいといふ旨を漏らしたのを記憶してゐる。ことに『浮雲』と『其の面影』との書出しなどのほゞ似通よつてゐるのを指摘した人さへあつた。『浮雲』の病所としてよく引用される箇所だが、第五回の新時代の女性とその母の爭を叙したところな

どは、最もよく彼の態度と說明の弊とを現はしたもので、『其の面影』『平凡』などにもこのやうな非難はあつた。第五回の一節に曰く『しかしながら之を親子喧嘩と思ふと女丈夫の本意に背くどうして〳〵親子喧嘩……………其の樣な不道德な者でない是れは辱くも難有くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と時代後れの舊主義と衝突をする所よくお目を止められて御覽あられませう。』

このやうにして『浮雲』は二十餘年前、早くも後の自然主義の本流を指示したものであつた。けれど不思議にも、その開拓者自身は自らの道を推究めようとはせず、却つてある時は下に說く硯友社の紅葉や露伴の藝術に從つて行くやうな態度を見せたのは妙である。曾て彼は紅葉の『多情多恨』をほめてツルゲネエフに似てゐると言つたりした。しかしそれは兎も角として『浮雲』以來の彼が、少數の人々の間にばかり認められて、或は隱れ、または顯はれ、不卽不離の端睨すべからざる狀態で、二十餘年を送つたのは面白い現象である。

二　民友社の人々

明治文學が革新期に入つてからまづ活動したのは徳富蘇峰を中心とする民友社一派の才人であつた。蘇峰が『新日本の青年』の一書を懷にして東京に出、忽にして名聲を天下に藉いたのは十九年の頃で、翌二十年に「國民之友」が生れて直ちに雜誌界の覇王となつた。そして一方、三宅雪嶺等の政教社一派と相對峙して、自覺と批判の相伴へる歐化主義の皷吹につとめ、當時の青年は靡然としてこれに赴いた。即ち蘇峰を中心として集つた才人達はその思想、その文章いづれも蘇峰一派の色調を帶び、平民主義を把持して、歐文直譯體の文章を書いた。尤も後になつては、民友社一派は紅葉の硯友社と相對抗するといふやうな位置に立つたが、この他にも露伴を同人とする根岸派は硯友社と向ふところを

異にし、千駄木の鷗外は根岸派に近づき、早稻田の逍遙はより硯友社に近かつた。

歐化主義の反動として起つた政敎社の國粹保存主義は、延いて落合直文等の國文學復興となつたが、文壇に對する感化影響は勿論民友社とは比べものにならない。その民友社の背後には、京都同志社のキリスト敎思想なども大分働いてゐた。

竹越三叉、山路愛山、人見一太郞、宮崎湖處子、塚越停春、矢崎嵯峨の家、松原二十三階堂、角田活々歌客など、當代の俊髦は悉く民友社の同人であつた。その頃まだ二十歲を越えたばかりの蘆花も兄蘇峰の下に「國民之友」の六號活字に、恐らく英譯になつたばかりであらうと思はれるロシア文學などの梗概を、イギリスの雜誌から翻譯したり紹介したりしてゐた。明治文壇末期の立物であつた國木田獨步なども、やはり「國民之友」の編輯局で、彼が悲慘なラヴ、アッ

フェアーのために陽に同情はされながらも、陰では輕蔑されてゐた。

社外の客員としては依田學海、山田美妙、森田思軒、二葉亭四迷、森鷗外、石橋忍月、中西梅花、内田不知庵の諸家がゐた。逍遙の『細君』露伴の『一口劍』三昧の『吾亡妻』一葉の『わかれ道』鏡花の『琵琶傳』透谷の『宿魂鏡』など、明治文壇の初期に於て名ある作は多く『國民之友』に出た。紅葉も『枯華微笑』を『舞姬』と一緒に出したのが、評判が思はしくなかつたので、それきり彼は『國民之友』に筆を絕つた。

森田思軒の『探偵ユーベル』も同じ雜誌の附錄に出た。これまで政論家の餘業であつた飜譯を、專門文學者の態度で譯し始めたのは彼であつた。中にも『探偵ユーベル』と『瞽使者』と『哀史』とは最も世に喧傳し、遂にはユーゴーの紹介者として世に知られたが、もと〳〵その譯は英語を通じた重譯のことであるし、誤譯も多く粗笨なものであつた。彼はよく漢學に通じ、多少譯字譯法には詳し

かつた。同時にその漢文體直譯體の文章は一時靑年の間に流行して、原抱一庵などにその餘流を傳へたが、しかしながら、大陸文學の輸入と飜譯の正確との期せられるやうになつたのは、やはり後の鷗外に待たねばならなかつた。蓋し彼の文壇に勢力を張つたのは、その時代に於てしかく英語と漢文とを自由に驅馳するものがなかつたゝめで、且つ彼自身の生活もその昵近せる矢野龍溪等の亞流を汲んだ、所謂『政治界の西行』であつたからである。

二葉亭四迷の飜譯はその創作と同じく當時の文壇では妙なもの、不思議なものとして迎へられた。ロシア文學の最初の輸入、明治文壇に於ける自然描寫の鼻祖とも言はるべき『あひゞき』の出たのは、二十一年の『國民之友』であつたが、これがツルゲネエフの『獵人日記』の一節であつて、獨步をはじめ後の自然主義運動に大きな役目をつとめたことは誰しも知つてゐる。且つその一言一句をも苟もしない飜譯の態度は、最も理想的のものとして、永く後年に範を垂れ、複雜

にして自由なその言文一致の文體、また永く後の人々を導いた。或は『浮雲』あたりの彼の新しい文章の試みは、主としてその私淑したロシア文學から來たもので、彼が心から意識して新時代の文章を書いたのは、それから後のことではないかとも思はれる。『あひゞき』の翌年頃、彼はまた『めぐりあひ』の一篇を「都の花」に寄せた。

「都の花」はもと硯友社と結んで「我樂多文庫」の一員であつた美妙が、急に彼等と袂を別つて廿一年に創刊した雜誌であるが、前記の『めぐりあひ』を始め、露伴の『露團々』紅葉の『二人女房』などいづれもこれに載つた。矢崎嵯峨の家の『初戀』またその中のすぐれたものゝ一と思ふ。嵯峨の家はまた二葉亭に次いで早くから西洋思想を消化してゐた。ことに彼の文章は『ありません』調の口語體で、言文一致の創始といふ點では、まさに美妙、二葉亭とその功を分つことが出來る。早くからツルゲネエフの感化を受けた人だけに、『初戀』あたりにもどこか

捨て難い新味の橫溢してゐたのを記憶してゐる。その筋は、自分の家に戀しい娘が來るといふ簡單なものであつたが、景情ともに頗る自然に出來てゐたやうに思ふ。この他にも彼の代表作としては北邱散士の名を以て「國民之友」に書いた『流轉』などがある。自然を愛好する理想派の文士としてその後もかなり名前があつた。よほど後ではあつたが、やはりツルゲネエフの『オン、ゼ、イヴ』を飜案して『美人と壯士』と題して、才子佳人風の小說に仕組み「文藝倶樂部」へ寄せたのを覺えてゐる。

三　硯友社の小說

自然主義が勃興してそれに代るまで、「硯友社」は殆んど明治文壇の主流となり、紅葉の名聲は遠く三十六年の死の枕邊までも續いてゐた。

硯友社の由來をたづねると、明治十八年三月、卽ち『小說神髓』の世に出る前月、尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案など、當時大學の豫備門にゐた若い才人達が、名々寄り持ちの廻覽雜誌を編纂したのが、そもそもの始めで、次で川上眉山、嚴谷小波、江見水蔭がこれに加はり、『小說神髓』と相呼應して二十一年に彼等の『我樂多文庫』を發刊した。

硯友社の勃興した原因については、『小說神髓』などのこれが刺戟となつたのももとよりであらうが、一は社會の要求に促された新運動とも言はれやう。一面に於てイギリス文學乃至ロシア文學、その他民友社の西洋的傾向を控へてゐながら、政教社一派ともまた毛色を異にした硯友社の日本趣味が勃興したのは面白い現象である。そして硯友社はそのリアリズムの精神を西洋に求めないで、却つて自國の西鶴に求めた。彼等が西鶴を復興したのはその文章の研究が重な動機となつたのは言ふまでもないが、兎に角、西鶴が復興してから明治文學は

著るしく調子を變へて來た。

硯友社の初期に最も活動したのは紅葉と美妙とであるが、美妙が紅葉と分れた時には、廣津柳浪、大橋乙羽、中村雪後などもそれ〴〵同人に加はつた。

その頃の文體と言へば、一方に戲作の文あり、一方に記事文あり、或は雅俗折衷、飜譯體など〻、各種の文體は相混亂して、その趨くところを知らなかつた。かやうな時代に山田美妙はその獨特の言文一致を以て世に顯はれた。彼の出世作は『武藏野』といふ短篇で、たしか二十一年の暮頃「讀賣新聞」に載せられたと思ふ。一篇の筋は武藏野に昔の武士を點出したもので、さほど光彩を放つたものではないが、その描寫に至つてはいかにも細かく、且つ西洋の小說に似てゐて、在來の飜譯物とは大分趣を異にしてゐた。そこで讀書界は非常に驚いて一時は沙翁の再生とまでた〻へた。當時雜誌界の覇者たる「國民之友」もわざ〳〵その一節をぬいてこれを激賞したほどであつた。そしてこれを「讀賣」に

紹介したのが饗庭篁村であつたなどは頗る面白い。

けれども『武藏野』にしろ、「國民之友」に出た『胡蝶』(二十二年)にしろ、これを紅葉の諸作にくらべれば、まだ描寫よりも叙述味の勝つた、内容よりも形式のすぐれたものと認められた。『胡蝶』は最も彼が精力をそゝいだ作で紅葉の『色懺悔』と併び稱され、頗る當時の文壇を動した。平家沒落以後に取材して、戀と忠義との葛藤に煩悶する一少女のあはれな運命を叙出し、ことにその挿畫として添へた裸體畫は隨分世間の物議を惹き起したもので、丁度その頃ドイツから歸朝してゐた鷗外なども、覆面の野次馬となつて、「讀賣新聞」の寄書欄で裸體畫の價値を堂々と論じ、世の漢學者流をへこましたりした。

これ以後、美妙には『ぬれ衣』『此の子』『いちご姫』などの作があるが、『いちご姫』の頃になると、作者の言文一致も既にその精神を失つて、地の文に言文一致を用ひ、言文一致たるべき會話の方が『候ふ』とか『侍る』とかの文章になつて

ゐた。やはり苦心の作であり評判もあつたらうが、大したものではなかつた。

言文一致を西鶴調に基いた一種の雅俗折衷體にし、或は描寫的にしたのはやはり紅葉の功としなければならない。紅葉一代の心血をそゝいだ點は、その內容よりもその思想よりも、實にかの文體の選擇にあつた。紅葉を議するに當つては、必ず彼の文體に言及ぼさねばならない。

美妙が「都の花」へ行つてからは、「我樂多文庫」も倒れ、やがて紅葉對美妙といふやうな關係になつたが、二十二年月刊小說集『新著百種』が出るやうになつて以後は、主として硯友社同人の作をこれから出し、まづ第一號に紅葉の『色懺悔』を刊行した。この作は詳しくは『二人比丘尼色懺悔』と稱し、彼の名の世に揚つたのは實にこの作から始まるのである。尤もこの以前の作で『紅子戲語』などゝいふのが「我樂多文庫」に出たりしたが、それは三馬風の輕快な筆で、縱橫に中阪の硯友社の同人を書いたもので、それだけでも彼の才氣の尋常でない

ことは認められる。そして彼の最初影響を受けたのは三馬で、西鶴を好んだのは暫らく後のことであるといふ事も解る。『色懺悔』は『胡蝶』から見ると半年おくれた位に出たものであるが、筋は自序にもある通り『涙を主眼とした』時代物で、しかも『時代を説かず、場所を定めず、ある時ある處にて、ある人々の身の上譚』を書いたものである。＊の記號を施して、物語を一夜の出來事に縮めた手際など、頗る當時の讀書界を驚かしたものだが、要するに全體として脚色に重きを置いた、舊型を脱しない小說であつた。

けれども、その文章に至つては言文一致でもなく、普通の雅俗折衷でもなく、また飜譯調でもなく、全く一種オリジナルなものであつた。文章なども現今でこそ、全く和文漢文の領域を離れて立派な整つた體をなしてゐるが、『色懺悔』當時に於ては作家は文章の苦心といふことが大變であつた。現にこの作などでも文體に關する作者の煩悶は十分に顯はれてゐると思ふ。殊更に句の短いもの

を使つて、その間に誇張した長い感嘆詞を挿んでゐるところなど、今日から見てこそ、どうしてこんな佶倔な文章を作つたものかと怪しまれるが、それでも當時のものとしてはその描寫はある程度まで成功してゐた。一體、紅葉がある思想を描かうとして、第一に氣にかゝつたのは文體だつたさうで、彼の考によれば書く材料にはそれ〴〵の特色がある。輕快なことを四角四面な文で書くことも出來ず、と言つて悲しいことを輕快な言文一致で書くのも不都合と言つたやうに、彼はその最後の『金色夜叉』に至るまで、生涯を通じて文體の煩悶に暮した。

これから以後、日淸戰爭當時に至るまで紅葉の重な作には『此ぬし』『夏瘦』『新色懺悔』『拈華微笑』『おぼろ舟』『むき玉子』『二人女房』『伽羅枕』『三人妻』『心の闇』などの諸作がある。『色懺悔』以後、彼は漸く歷史物を去つて寫實に筆をつけ、最も西鶴から深い影響を受けた。

『新色懺悔』はかなり面白い特色のあつた作だと記憶してゐる。後の『伽羅枕』『三人妻』風のものよりも寧ろかういふ方面に進んだならば、紅葉も尚ほ一層の進歩を見たであらうと思はれる。宇治の一少女、思がけなく老人の妻となつていつの間にか年老いるといふ趣向はなか〳〵自然で面白かつた。しかしあまりに輕い筆を用ゐたのは、當時の傾向として止むを得ないことだが、遺憾なことに思はれた。

『伽羅枕』(二十三年)になると、文章は全く西鶴の感化のもとにあつて『色懺悔』の文章などゝはまるで別人の手になつたものかとも思はれるほどだ。『伽羅枕』は少なくとも紅葉が全力をあげて作つたものと思はれる理由がある。それは丁度この當時、紅葉と露伴とは共に一緒に讀賣新聞に入つてゐて、競爭的に一つ大作をやらせやうと言ふので、紅葉は『伽羅枕』を、露伴は『ひげ男』をそれ〴〵に筆をつけた。既に當時に於ては兩家とも第一流の花形役者だつたので、

一般の傾向は紅葉を實際派、露伴を理想派といふやうに見做して、前者は文章が好いが思想がない、後者は思想はあるが文章が書けないとは衆口の一致するところであつた。しかもこの兩雄が同時に全力をあげて競爭的に著作しやうといふのだから大した評判であつた。さていよ〳〵出始めたところ、露伴は五六回書出したかと思ふと、急に筆を捨てゝ赤城の山中へ隱れてしまつた。そしてそこで有名なかの『一口劍』を書いた。一方、紅葉は熱心にこの大作を倦まず撓まずつゞけてほゞ三月で稿を脫した。これは無論西鶴の感化の下に書いた作で、その全篇には中心思想を置かず、たゞ一人の女の追懷談として書いたところなどは、一代男乃至一代女に髣髴としてゐる。文章も例の名詞止めの多いもので、殆んど西鶴の壘を摩してゐるやうな好い箇所もあつた。けれど一度その根本に入れば、例の西鶴が眞のためには醜をも赤裸々に開いて示したのとは違つて、彼のこの作は美のために醜をつゝみ、わざと美をばかり作り出してゐるやうな

ところがあつた。しかし、これ等に關しては後に重ねて説くことにして、兎に角『伽羅枕』一篇は彼がその趣味の對象を江戸氣質に求めて、所謂意地と張りと伊達とを生命とする一遊妓の類型を寫し出したものに過ぎない。

『二人女房』（二十四年都の花）は紅葉が始めて試みた言文一致體の小説として、明治文壇に相應の位置を占める作品と思ふ。既に『色懺悔』の時は美妙の言文一致に對抗してわざと雅俗折衷を用ゐたが、この作を書く當時、紅葉自身の私への直話に『どうも山田（美妙）のでも面白くないし、又「だ」調ではぶつきら棒だし、「ありません」調は丁寧過るし、實にどうも文體には閉口する』と。美妙、二葉亭、嵯峨の家の以外に、別に『である』調を創めたのは實に紅葉の功であつた。殆んど同じ時代に『伽羅枕』のやうな堅苦しい美文的の物を書き、一面にはこの作のやうな奔放なものを書いたのも面白い。『二人女房』は多少心裡に立入つてはゐるが、あまりにそれの精細を期したゝめ、説明だの作爲のあとだのゝ

うるさい作であつた。

『二人女』は『むき玉子』と『朧舟』との二作を收めて、共に二十三四年頃「讀賣新聞」に出た作である。『朧舟』の主人公は其哀愁の多い點に於て紅葉全集中に傑出してゐるし、『むき玉子』は畫家をモデルにするため裸體にするといふ趣向で、着想はさまでに面白くはないが、文章は例によつてかなり凝つたものであつた。

紅葉の文章の絢爛は『三人妻』に於て殆んどその極致に達した。同時に作者がその文章を持餘してゐるやうな氣持が明かに見える。後の『男心』その次ぎの『隣の女』更に續いて『むらさき』『心の闇』『多情多恨』『金色夜叉』と皆なそれぞ〳〵に文體が變つて、努力のあとの歷然たるのも、紅葉の研究者に取つては見逃してはならない點であらう。

『三人妻』(二十五年讀賣新聞)は『伽羅枕』以後作者の最も力を盡したものと思はれる。もしも『多情多恨』『金色夜叉』の二篇を以て彼の後期の代表作と認める

ならば、その前期の二大作として上の二篇をあげるのに異存はない。さてこの作は葛城餘五郎なる紳商を主人公として、才藏、紅梅、お艶の三人をこれに配し、明治の社會を寫さうと期したものであるが、全體として例の文章に煩はされ、强ひて情を作つたり場面の變化を求めたり、誇張が多かつたりして失敗してゐる。性格も所謂氣質の範圍を脫しないもので、『伽羅枕』と等しくやはり文を以てすぐれたものであらう。

『心の闇』(二十六年讀賣新聞)はまた作者の前期の小說中、最も完成した作と思はれる。その文體についてもあまり凝り過ぎてゐないところに捨て難い味がある。盲人佐之市と千束屋の娘お粂とを配したもので、最後を强ひて結ばなかつたのも當時に於ては珍らしく自然の書方であつた。聞くところに據ると、この作の材料は門下の泉鏡花が持つてゐた種で、これを書いて紅葉に出したが例の誇張したものに書いてあつて、どうも氣に入らない。二三度書き直させて見

たが、やはり好けない。それぢあ己が一つ書いて見せやう、かう書くのだと言つて見本を示したのがこの作だと言ふ。この作では筆致は近松に寄せてゐた。紅葉の生命とした文章は洒脱であり、獨創的であり、烹練、艶麗の極致を盡したものだが、しかも今日それを仔細に振返つて見れば、頗る煩瑣な感じを起すものが多い。第一うそが多く、誇張がわざとらしく、それに面白い文章を書くのに都合のよい材料ばかり撰擇して來てゐるから、突込まねばならぬところが案外に突込んでなく、書かないでもよいところがダラ〳〵と長くつゞいてゐる。簡潔でなかつたといふことが著るしく眼立つてゐる。

紅葉の自身の言葉に曰く『實際にあつたことでも不自然と思はれることは書くな、實際にないことでも自然と思はれるやうなことは書け』と。事實、彼の全集のどの頁を繙へして見ても、實際らしくて本當は實際でない、不自然な鍍した事實が鼻につくほどある。そして實際にある特異な不自然らしいことを書

かないために、却つて事件が不當に不自然になつたり、性格の類型に陷つたりしてゐるところが隨所にある。上の如き信條から見ても、紅葉が眞のリアリストでなかつたことは明白である。

それに彼の作中では一般通俗社會を標準にしたやうな一種の道德の觀念らしいものが、到る所で邪魔をしてゐる。その判斷力は人情に煩はされ、同情に墮してゐる。それは彼自身でも會心の作と言ひ、比較的斧鑿のあとのない後年の『多情多恨』あたりでさへ、作者の判斷力は一種の型に囚はれて、あまり正しくないことをも正しいと思ひ、つまらないことをも興がつたり、意味を附けやうとしてゐる。部分〳〵に寫實はあつても、全體として見れば技巧ばかり勝つた空想澤山の作物である。態度の嚴肅を缺いてゐたのは勿論で、純粹な客觀的態度などはとても彼の作には望まれない。けれどもまた一方、明治の文章をしてやゝ描寫風ならしめ、人物と結構とをして共に平淡な寫實に似たものとして、後

の純客觀文學に寄與するところ多かつた彼の作風の價値は、また甚大と言はねばならない。

さて紅葉を始め、硯友社の人々の中心舞臺であつた『新著百種』は、重に一人一作を以て一篇としたが、社外の人でも露伴の『風流佛』などはこれから出もした。しかし乙羽の出世作『露小袖』小波の『妹背貝』柳浪の『殘菊』眉山の『墨染櫻』思案の『乙女心』など、硯友社の同人の世に認められたのは主としてこの叢書によつたものである。硯友派の同人と認め得べきもの、以上の他にも、江見水蔭、中村花痩、岡田廬心亭、丸岡九華の諸家がゐた。

巖谷小波は、紅葉よりも更に洒落な、輕妙な風致を具へて、特に小說の方面からもよく好んで可憐な少年少女を寫し、二十四年『少年文學』の第一卷として『こがね丸』を出してからは、主として少年文學の開拓者に轉じた。處女作『妹背貝』は『新著百種』の四號に出たもの、戀人が江の島鬼ケ淵に身を投げて死ぬ

といふ趣向であつた。それから「我樂多文庫」の『初時雨』もその同情的態度を以て少年を寫したものと記憶するし、『片絲』『友禪染』をはじめ、後の二十八年頃の『照君怨』『菫日記』など、いづれも可憐な少年少女物語である。

大橋乙羽には『露小袖』の他に政治小説めいた『累卵之東洋』などがある。石橋思案の言文一致は頗る調子の輕いもので、且つ頗る無邪氣な小説であつたのを覺えてゐる。『乙女心』の他には『小説群芳』に收めた『京鹿子』があつた。

眉山も柳浪も硯友社の初期には、まださほどの活動を見せなかつた。『黃菊白菊』『雪折竹』『墨染櫻』は前者の作であるが、その措辭の艶麗にして瀟洒なる點に於ては、一時紅葉と併稱された。柳浪となると他の硯友社同人とはやゝ趨くところを異にしてゐたが、その作の內容については後に重ねて細說しやう。『二おもて』は二十一年彼の編輯してゐた「大和錦」に掲げたもので、『殘菊』と共に彼の初期の重な作に推されてゐた。『殘菊』は二十三年『新著百種』の五號に出た。

しかも彼の後年の才氣は既にその頃から十分に認め得べく、一病女の所謂深刻、悲慘な苦悶だの憂悶だのを描出して、心裡の解剖は比較的によく出てゐた。特色のある作として評判もよかつたが、その頃彼は頗る不遇の位地にあつて、これを書くにも机がなく、石油箱に倚つて書いたといふ逸話を殘してゐる。曾て紅葉が硯友社の同人を評して『水蔭は奇矯、小波は溫雅、眉山は艶麗、思案は暢達、各々にその得るところはあるが、柳浪の文の枯れたのは、他諸子の多く及ばないところである。柳浪はそれ市川團藏の如きか』などゝ言つたのは、當時の彼の立場をよくうがつてゐた。『殘菊』から『黑蜥蜴』などといふ後年の所謂深刻小說の出たのは、決して偶然ではない。『殘菊』に續いて『五枚繪姿』以下數篇の作があつた。

四　所謂理想派

露伴は紅葉の全盛期にもよく肩をならべた作家だが、紅葉の寫實的なのに對して主觀的なのが一番眼立つた特色であつた。彼には最初から客觀的態度といふものがあまり無い。『風流佛』『髑髏』『新浦島』『五重塔』その他隨筆もの、『潮待草』あたりを讀んでもいつも主觀が中心となつてゐた。彼の作物を一貫した人生觀は、それが作者のライフの千變萬化を觀察して得た上の結果に打建てたものではなく、作者自身の個性、乃至は性癖といふやうなものによつて得來つた主觀の上に立脚してゐた。從つて儒者が門生に敎へるといふ態度だ、餘裕がない。

彼は好んで脫俗的の特色のある男性を主題とした。その文章はまた元祿あた

りから系統を引いて來たらしい、センテンスの長い意味の容易に切れない、首尾聯絡し、複雜し、ほぐしてもほぐし切れない、さながらに渦を卷いたやうな文體であつた。一葉と綠雨とがこれに近かつたほか、明治の文壇にかうした文章をかいた人はあまり見當らない。けれども、西洋文學の日一日と輸入されてゐた文壇では、だん〳〵それが不自由なものであるといふことが認められた。ことにシインを描くといふやうなことなどには最も向かない文體であると分つて來ると、賢明な露伴は、後に『新小說』で一度言文一致の小說を書かうと企てたことがあつた。『雁坂趣』などがこれである。『風流悟』などの時分には、近松と西鶴と、それに自己の特色を交ぜたやうな面白い文體の作物を見せたが、一轉して『一口劍』とに『椀久物語』とかの藝術肌の男性に興味を持つやうになつてから、だん〳〵と型が出來て來た。その型を破らうとつとめた時代に卽ち『雁坂越』などが出來たのである。この作をした當時には露伴自身ももつと自由な

ところに出て行きたいと思つたに相違ないし、また出て行けるやうにも思はれたのである。

硯友社の人々にしろ、露伴にしろ、その文章の捨てられたといふのは、たま〳〵西洋の譯語脈の文章の勝利を意味してゐた。鷗外などはそこへ行くと全然違ふ。彼のは非常に堅い、漢文と國文とをつき交せたやうな文章でありながらその脈は全く洋文に屬し、そのまゝ西洋の文に飜譯するにもさほど骨は折れまいと思はれる。硯友社當時の作物がお話風に傾いたのは、やはり文章が最も多く關係してゐた。內面的にしろ、外面的にしろ、自然派が起つて以後の文章には狀態を描いたものが甚だ多い。それに尙ほ紅葉、露伴の時代には事象の記實に平氣で嘘を書いてゐたが、明治の末期になると、もうそんなことは夢にも見られないやうになつて行つた。

露伴の處女作は二十二年の『都の花』に寄せた『露團々』で、かなりの長篇であ

つた。米國と日本と支那とを舞臺にした、よほど風變りなものであり、何でも非常な富豪がその令孃のために婿の候補者を募るといふ趣向であつた。西洋人の名を平假名でかいたのが甚だ目新しかつた。それから彼がその稿料を懷ろにして、行當りばつたりの旅に出かけたことは『枕頭山水』中の『醉興記』にかいてある。そしてこの旅行中、木曾の須原で得た材料が『風流佛』となつた。

『風流佛』は二十二年に『新著百種』の第五として出で、次の『對髑髏』と共に彼の名をなした作である。評判は必ずしもよくなかつたが、それでも彼獨特の微妙な着想は、當時の若い文學渇仰の人々の間にいろ〳〵の方面から刺戟を與へた。『對髑髏』は初め『緣外緣』といひ、二十三年の彼の最初の文集『葉末集』の初めに收めてある。さる詩人が日光の山奥から上州に越える山中で、髑髏に對して空想を逞うする一夜をかいたもの、當時に於ては露伴の理想的な頭腦でなければ出來ないものとして大に珍重された。

他に數多い彼の作の中で『風流艶魔傳』は女の手管を書いたやうなもの、どこの書肆でも引受けるものがなかつたのを『柵草紙』がその一部を割いて世に出した。『風流悟』は雷音洞主の名で世間に公にされたが、作者自身の戀愛に對する煩悶錄とも言ふべきもので、よほど突込んだ面白い觀察があつた。

紅葉の『伽羅枕』と時を同うして「讀賣」に掲げた彼の『ひげ男』はことに評判がよかつたが、それでも彼は間もなく筆を擲つて赤城に隱れた。『ひげ男』の書き方などにはよほど放膽なところがあつたやうに覺えてゐるが、その後一冊になつて出たのを見ると、當初のものとは書き方などもまるで趣を異にしてゐた。それは競爭の對手であつた『伽羅枕』が單行本になつてから四五年も後のことで、『伽羅枕』とは似もつかぬ時代物であつた。即ち武田家の沒落を主としてかいたものだが、長篠の戰の前の光景などは、まことに理想派主觀派の極致を盡したものと言はれた。老將連の落涙、折からの落日といふやうな一節などは實にクラ

シックの味が津々として盡きないものゝやうに思つた。

赤城山の荒屋でかいた『一口劍』は二十三年の「國民之友」夏期附錄に攻められた。執筆當時の有樣はやはり、『枕頭山水』中の『地獄溪日記』に詳しくかいてゐるが、七八十枚になつたを三四十枚に書きちゞめるのが一通りならぬ苦心だつたさうで、そのちゞめたあとは歷然と作に殘つてゐる。その頃はことに彼の名聲の最も高い時で、お蘭といふ女、刀鍛冶の男も頗る讀者の注目を惹き、作の最後の『切れ、これを、たしかに二つになつて見せん』の一句などは甚だ有名な文句として知られた。

紅葉が「讀賣」に勢力を張るにつれて、彼は次第に「讀賣」を離れた。それに親友――わが明治の詩壇の先覺者の一人で、最も熱狂的の詩人であつた中西梅花の狂死は、ことに彼の精神上に打擊を與へたものと思はれて、彼は終に谷中の庵に引籠つて久しく世に出なかつた。戶をすつかり釘づけにして、一週間斷食

して坐禪を組んだなどの噂も傳へられた。どことなく自らを韜晦してゐるやうにも見えた。『風流悟』に書いた戀愛の苦悶から、藝術に對する渴仰の念も燃えて身に寒熱の往來するといふ時代であつた。

『五重塔』(二十五年國會新聞)はかうした境遇にゐた彼の谷中の庵の記念作であつた。のつそり十平、名人の心血をそゝいだ五重塔、彼獨特の人物と結構とで大に世を驚かした。十平が苦心慘憺の餘になつた塔の暴風に揉まれるあたりの敍事などは、甚だ名高いものである。尙ほその作については、作者がある夜、谷中の天王寺の塔の落月に聳立してゐるのを見て、ふと藝術と、藝術をつくる人の不朽を感じ、そしてこの一編の着想を得たのださうで、彼のある人に與へた手紙に、毎日一回を書いて郵便函に投ずるため自身戶外に出ると、五重塔は高く天空に聳え、風のふく夜、月の落つる夜、實に言ふに言はれぬ興會を覺えたとかいてゐる。作の最後の數句の精彩に富んでゐるのも恐らくこれがためで

あらう。後の文壇にさほどの影響を與へた作とも思はれないし、空想と誇張と作爲の多いものであるが、明治文壇に於ける所謂理想派の代表作として特色のあるものである。

その後露伴には『風流微塵藏』の第一を出す前に『新葉末集』などがある。

五　「柵草紙」と「早稲田文學」

森鷗外の西洋から歸朝したのは二十三年の頃と思ふ。この人がその學殖の深い身を以て文壇に立つたのは、坪内逍遙の早稲田にあつて二十年熱心に英文學を說いたのと共に、まさに明治文壇に特筆大書しなければならぬことゝ思ふ。既に西洋文學は明治の初年から日本に入つてはゐたものゝ、鷗外の出づるまでの西洋文學輸入はまだ眞劍ではなくいゝ加減の程度のものであつた。西洋文

學の移植は、まづ龍溪一派の漢文直譯體に失敗し、思軒の飜譯時代に失敗した。それと言ふのも、當時の飜譯者乃至紹介者といふものが甚だ淺學で、且つその移植された西洋文學そのものも實に取るに足らないものであつたからだ。民友社一派の人々などもやゝ眞面目な主觀的の文學に讀者を導いては行つたが、それでも純文學の方面では未だ左程深く研究をしたものはなかつた。石橋忍月なども多少ドイツ文學の鼓吹はしたが、でも當時の青年はまだ西洋にどんな作家がゐて、どんな作品を出してゐるかなどのことにはまつたく盲目で、且つその方面に興味を抱いた青年などはあまりなかつた。

ドイツ語を通じて、わが文壇の始めて完全に大陸文學を受入れたのは、實際鷗外の力であつた。ハイネを知り、ドーデーを知り、ツルゲネエフを知り、パウル・ハイゼを知り、ゲエテのエルテルを知り、カルデロンを知り、オシツプ・シユビンを知り、レツシングを知り、就中ハルトマンの審美學の一部を知ること

を得たのは、全く鷗外の賜物であつた。

批評家――文章家――學者――小說家、さういふ資格を凡て鷗外は一身に備てゐた。『舞姬』は作家としての彼の處女作で、二十三年の「國民之友」の春期附錄に出てゐるが、少なくともこの一篇によつて、當時の讀者は、紅葉露伴以外思軒篁村以外に、大に發展して行かなければならぬ新境地のあることを敎へられた。單に面白いとか、美しいとか、滑稽だとかいふ一種の傾向から、更に深いもの新しいものを描かなければならぬといふことを敎へられた。『舞姬』はまことに小なる人の小なる生涯と作者自身は言つた。けれど、その頃の幼稚な日本の文壇にあつては、まだこの短篇に含まれてゐるやうな意味の深いことは、いかなる作家いかなる作品にもこれを見ることは出來なかつた。それは單に事を面白く書く人は澤山あつても、眞に人を描き人生を描いたものとては一つもなかつた。當時、紅葉の『枯華微笑』に對して、この作を擧げた雜誌の多かつた

のも道理である。同じ年の夏「柵草紙」に出た『うたかたの記』もロマンチックな長く忘れ難い作であつた。

「柵草紙」の發刊は二十三年で、もとの「早稻田文學」の發刊はその翌年であつたと思ふが、後者は逍遙を中心としてその周圍を種々の人達がめぐつてゐたが前者は殆んど單獨の經營で、しかも當年に於ける彼の「柵草紙」に於ける活動は明治文壇稀に見る壯觀であつた。彼の快刀亂麻を斷つたやうな鋭利な評論には、忍月、思軒、正一など皆な手痛き鞭を受け、やがて沒理想論に關して逍遙との論戰が始まつた。之よりさき、鷗外は『小說神髓』を批評して、そのイギリス風の詩の分類法に慊らないといふ風を見せたが、こゝに至つて、ドイツ風の新らしいクリチシズムが全力をあげて、逍遙のシエキスピアを中心とする沒我論、沒理想論に突進した。日清戰爭に至るまでの作家としてはやはり紅葉、露伴であるが批評家としては逍遙、鷗外の二家を推すべく、その太刀打の偉觀に至つて

はまさに明治評論壇の最高潮であつた。

鷗外は評論の傍ら、また筆を執つてシルレルの傳を叙したり、新しい小說の飜譯を出したりした。オシップ・シュピンの『埋木』がその雜誌に載つたのは確か六號あたりからかと記憶する。

「柵草紙」の出現に對しては、硯友社同人は少なからぬ勢力の對抗を感じて來たらしく、一方鷗外は紅葉の筆には多少の尊敬を拂つてゐたが、他の同人連中には殆んど一顧だも與へなかつた概があつた。それでも硯友社の人達は、彼に小說がかけるものかとその價値を拒んだ形があつた。且つ實際に於ても、硯友社の人達の作が、最も世の歡迎するところとなつた。筋の解り易いのと、文章の花やかなのとがその重な原因だつたのは言ふまでもない。鏡花だの風葉だのもそろ〳〵頭をもたげかけてゐた。

鷗外の文章は和文脈、漢文脈、洋文脈を完全に具備して、それが實に痕跡を

止めぬばかりに巧みに作られてあつた。『うたかたの記』の洋文脈、『文づかひ』の和文脈、議論文の漢文脈、いづれも立派なものであつた。それから『染ちがへ』あたりとなると急に柔かい雅俗折衷となり、次第〳〵に轉化し、型を破つて今日の文章となつた。

『文づかひ』はドイツのザクセンを舞臺にした所謂洋行小說であるが、落合直文の書簡が序文として添えてある。當時は國文學復興の中堅として落合直文と小中村義象とがあつたが、鷗外の雄を以てしても、尙ほ『文づかひ』の一篇を萩の舍に致して、國語の誤謬を訂してもらつたといふのは面白い。

『水沫集』は二十六年に出版した。創作三篇、飜譯七八篇、その多くは「柵草紙」に出たものを集めたので、日本に入つた大陸文學の淸新なる內容と形式とは、實にこの一卷から流出したと言つてもよい。『惡因緣』『地震』の二篇にクライストの名を記し、『一夜』にハックレンデルの才を知り、ことに『埋木』の一篇

は後の『卽興詩人』と共に、文學に志すもの丶是非讀まねばならぬ作とされたものので、一かどの作家もこれによつて開發されるところが多かつた。その他レッシングのエミリーカロッチー、カルデロンのサラメヤ村長など『水沫集』中皆な讀むべく誦すべきものがある。

沒理想論に關する逍遙の說は、收めて『文學その折々』にあるし、鷗外の說は後の『月草』にある。『月草』にはハルトマンの美學は勿論、ドイツ、フランスのリアリズムの形勢もほゞ窺ふことが出來るやうに書いてあつた。ニイチエ、ストリンドベルヒ、ハウプトマン、ズーデルマンの片鱗なども見ることが出來た。

六　所謂撥鬢小說と探偵小說

硯友社の『新著百種』の第二が、硯友社乃至露伴とも系統を異にして、魯文、

金鵞の末流とも認め得られる舊式の作家饗庭篁村の『掘出し物』を出したのは不思議なやうな氣もされるが、それでもこの『掘出し物』の出た當時は紅葉の『色懺悔』にさへ勝るといふものがあつたのである。他に『良夜』は「國民の友」の附錄へ出た。單行としての『當世商人氣質』、『新作十二番』の『勝閧』などもそれぞれ篁村の作であるが、就中、彼の代表作とも見るべきは『むら竹』(二十二年)であつた。これは彼の全集ともいふべく、十二篇の作を合卷にしたもので、文章と措辭の滑稽洒脫なるを以つてかなり評判を取つた。その中にヂッケンスの『クリスマス、カロル』などの飜案があるのは面白い。

齋藤綠雨は、始め二十三四年の頃、正直太夫の名を以て、諷刺家として顯はれた。銳い獨特の諷刺と冷罵と奇警な觀察とを以て聞え、一時は紅、露と併び稱せられたものである。『かくれんぼ』(二十四年頃文學界)は彼の特色の最も顯著なもの、文章は舊式な雅俗折衷體で今から見れば不思議なものだが、內容は

皮肉な痛快な面白いものであつた。緑雨後に語つて曰く『あの頃、色つぽいものと云へば、硯友社の受持で、それが何うだと言へば、例の才子佳人を少々向きを變へたばかり、何でそんなものが色つぽいものかといふ料簡と、今一つはその頃流行つた戀は神聖だといふ說が癪にさはつたから書いたのが私の「かくれんぼ」だ』と。これでもわかる通り、緑雨には隨分思切つたところがあり、人間に對する理解なども他の作者よりずつと深いところがあつた。彼は西鶴と自ら相通ずるところがあるやうに考へ、而も紅葉などには慊たらなかつた。『油地獄』（二十四年）は彼の代表作の一であるが、これはお坊ちやんが藝者買を始めてだん〳〵と深味に入つてゆく心理的傾向を書いたもので、頗る細緻を極めてゐた。文章も彼としてはめづらしく言文一致で、例の皮肉な筆でえぐるところは飽くまでもえぐつてあつて面白い。

紅葉、露伴の時代にも、低級な通俗な流行小說の跋扈したのは勿論であるが、

更に硯友社乃至上に述べた作家の他に、最も勢力のあつた當時の作風を大別すると、所謂政治小說だの、撥鬢小說だの、歷史小說だの、社會小說だの、探偵小說だの、冒險だの、いろ〳〵の色分けがあつた。

『浮城物語』(二十三年)は『經國美談』に次での矢野龍溪の著である。科學を寓した空想的の物語で、局面趣向共にベルネの小說に似てゐた。一面にはこの作は當時の所謂傳奇小說とも見るべく、空想を主とした一種の冒險小說であつた。

原抱一庵の『闇中政治家』(二十四年)は思軒の漢文直譯體の文致を學んだもので、國事犯をかいた社會小說の一種であるが、凡てが飜譯調で、西洋の流行小說か何かを譯したのではないかとさへ思はれるところがあつた。

村上浪六も原抱一庵、村井弦齊、遲塚麗水と共に思軒門下の四天王を以て目せられた人で、『三日月』(二十四年)の一篇を以て彼は一擧にして讀書界の流行

兒となつた。その內容は露伴の作中によく出て來る主人公に似て非なる遊俠兒の行爲と事件とを寫したもの、無論、文學上の價値を云々するに足りるものではないが、しかも結構の珍奇なのと波瀾重疊的な事件を巧みに開展したので、一時世間を騷がし、撥鬢小說の名を以て迎へられた。『井筒女之助』『奴の小萬』『深見笠』『髯の自休』など續々と出た。

宮崎三昧の『塙團右衞門』なども『三日月』に追隨して出た所謂傳奇小說の一であるとも言はれやう。依田學海にも『楠木』『十津川』などの時代小說があつた。村井弦齊の歷史小說乃至世話小說といふやうなものも世に出始めた。『小弓御所』『衣笠城』『櫻の御所』『譽の兜』などから、『小猫』などに來ると、讀書界の歡迎は大したもので、その作は「報知新聞」に二百回もつゞいた。

わけても二十三四年から二十七八年に至るまで、一方、撥鬢小說と相呼應して出版界に勢力を張つたのは黑岩淚香の探偵小說であつた。當時は丸善の二階

にボベスコベやカポリウの探偵物が盛に來てゐたので、涙香はこれを譯出し、「報知」だの「都新聞」だのに連載した。純粹な意味の文學がやゝむづかしくなつて來て、且つあまり傑作も出ないといふ時だつたので、この種の探偵小説は盛に賣れ、『死美人』『人耶鬼耶』を始め『非小説』『鐵假面』『大金塊』など續々刊行された。そこで逍遙を主として、當時の評論界の立物たる鷗外、忍月、不知庵などはいづれも撥鬢小説の撲滅を計るし、一方、硯友社の諸家もまづ讀者をして探偵物に厭きさせなければならぬと言ふので、卒先して探偵小説の叢書などを出したが、やはり依然として涙香物はその勢力を保つてゐた。

續いて歷史小説の呼聲が高くなつた。言はゞ戲作風の時代物以外に眞に價値ある歷史小説の要求の聲が高くなつて、二十六年「讀賣新聞」では逍遙、紅葉、露伴の諸大家を選者として、賞を懸け、廣く世間に歷史小説を募つた。『瀧口入道』は卽ちこの選に入つた作で、作者は後年評壇の雄として明治文壇に獅子吼

した高山樗牛その人であつた。彼はその頃まだ一大學生であつたが、夙に才筆を以て聞え『瀧口入道』の一篇未だ文壇を動かすほどではなかつたが、兎に角にその文名を認められた事は十分であつた。そして作者自らもその作を『小說と云はむよりは寧ろ抒情的叙事詩として見るべきである』と言つてゐる通り、橫笛の戀のいかにも淸く美しく書かれてあつたのを記憶してゐる。

かやうにして折角翹望された歷史小說も、終に希望を滿たされないで止み、僅に塚原澁柹園の小說だけにその將來の希望をつなぐといふ有樣に終つたが、評論界には尙ほ社會問題を材料とすべしとか、風敎を稗益する小說を出すべしとか、宇宙、人生に關する自己の理想を發揮すべしとか、いろ〳〵な注文もあつたが、しかも文壇は二十四五年來依然として不振を極め、更に日淸戰爭以前に至つて、層一層沈滯を來し、徒らに探偵小說と撥鬢小說との跋扈に任せた。

北村透谷等の雜誌「文學界」が出たのは、上に述べた評論界の傾向と相通ずる

ところがあつた。その同人の一人上田敏などはまだ大學の一學生であつたが、盛んに鷗外の飜譯に誤譯があるなどゝ憤慨して歩いたのを覺えてゐる。民友社の實用的文學と、また硯友社の非歐洲的文學と、早稻田の團體とに慊らなくて起つたのが「文學界」の同人であつた。集るもの透谷、敏などの他に、島崎藤村馬場孤蝶、戸川秋骨、平田禿木、星野天知など、いづれも西洋文藝の絶えざる愛讀者であり、且つあまりに早い先覺者であつた。「文學界」が出たのは二十四年で、透谷の死んだのが二十六年だから、僅々二ヶ年の間に不滅の事業をなしとげたと言つてもよい。透谷の狂して終に自殺したのは生理上その他の原因もあつたらうが、やはり彼があまり早い先覺者で、當時それを容れるだけの餘地が文壇になかつたのも大きな原因の一つであらう。透谷の在世中は彼を詩人として見る批評家すらなかつたが、後年新文壇勃興に依つて漸くその眞價を認められるに至つた。そして一方、西洋文藝を完全に味ひ得る人の少なかつた硯友社

は、またそれがために却つて通俗な創作に留まつてゐるやうな立場を作つた。『宿魂鏡』は透谷の作、「國民之友」春期附錄に出たもので、舞臺は磐城の白河で、鏡に魂が宿るといふ筋であつた。文章も拙なく、會話にも特色はなく、且つ内容が頗る不思議なので、世間ではつまらないものだと思つたに相違ない。當時の識者の批評もあまりよくはなかつた。けれど後年その作の内容がやはりシンボリズムを覘つたものであり、彼が稀有な先覺者であつたことが世に解されて來た。

内田不知庵がドストエフスキーの作を譯した『罪と罰』が世に出たのは二十七年頃であるが、これを譯した不知庵の心を解剖するとなか〱面白い。それは當時例の探偵小說が旺盛を極めてゐるのを見て、さういふ風の趣味なら、このロシアの悲慘小說を一つ譯してやれといふやうな考から、この作を譯したのではないかと思はれる。現にその二卷の卷尾に附した諸家の批評に見ても、世間

がこの作を探偵小説として迎へてゐるものが多い。『水沫集』の中にもホフマンの『玉を懐いて罪あり』といふのが譯されてゐたが、あれなども鷗外が西洋の大家の探偵小説を譯して見せたのださうだ。これ等を見ても、探偵小説がいかに當時の人氣に投じ且つ文壇を動かしたかゞわかる。後の深刻小説、續いては悲慘小説などの世に迎へられたのもやはりこの餘流を汲んだものだとも言へやう。『罪と罰』はロシアの人生派脈の暗い實感的の小説であるが不知庵の飜譯は半分だけで全部完成しない。譯筆は最もよく熟してゐた。そしてこの作の眞價が明かになつたのはやはり後年で、透谷が『罪と罰』を愛誦した有樣は藤村の『春』にも書いてあつた。

けれども『罪と罰』を譯した不知庵はさすがに文壇の先覺者で、その『文學一斑』『文學者となる法』などにも卓見が多い。意地の惡い批評家として、ことに硯友社からは憎惡の眼を以て見られてゐた。不知庵は又日露戰爭中にトルスト

イの『復活』を譯しはじめた。

民友社の企てた『十二文豪』(二十四年頃――二十八九年頃)といふ叢書も文壇に多大の智識と刺激とを與へ、竹越三叉の『マコーレー』宮崎湖處子の『ワーズワース』德富蘆花の『トルストイ』などそれ〴〵に西洋文學の趣味精神を傳へた。透谷にも『エマアソン』の未定稿があつた。この叢書以外にも小說ではないが、湖處子の『歸省』(二十三年)は最も當時の青年に歡迎されたものであるし、蘆花も二十四五年頃の「國民新聞」に『夏の夜がたり』などゝいふ小說を書いたが、後の『不如歸』が出るまでまだ彼の文名は顯はれなかつた。

第三期 (日清戰爭より三十九年まで)

一　觀念小說と深刻小說

日清戰役によつて日本は驚くべき飛躍と發展とを遂げたが、文壇もまたこの二十七八年の間に顯著な變化を來した。二十七年では文壇もまだ初期の發展を終つたばかりで、紅葉、露伴の二作家を創作界の双璧としたばかりで、顯著な作物とても出ず、徒らに流行小說の跋扈跳梁に任せた。それが二十八九年となると、永い間、押へに押へられてゐた若い人達は、ヒシ〳〵と戰後の文壇に押し寄せて來た。

明治文學第一期の黃金時代を二十二三年とすれば、二十八九年はまさに第二期の黃金時代と云はねばならない。鏡花、一葉、風葉、宙外、蘆花、秋聲、抱月、天外、不倒などいふ創作家と、樗牛、桂月、抱月、嶺雲などいふ評論家が、雨後の筍の如く簇生して文壇の沈滯を破つた。「太陽」「文藝倶樂部」「帝國文學」「新小說」などといふ雜誌もその年に出來るし、二十九年には「柵草紙」も「目ざまし草」と改題されて、再び文壇に復活した。從來は評論壇に唯一人であつ

た鷗外にさへも打突かつて行かうとする若い人も出て來た。『新進作家つて言つても、大抵は己のところに來る奴ばかりだから』と豪語した紅葉も暗々の裡に時代の推移を氣附かぬわけには行かなかつた。復活した「目ざまし草」では綠雨、露伴、鷗外の幹部達が『三人冗語』といふ欄を設け、他に綠雨は『金剛杵』といふ文で、盛に新作家を壓迫し、第二期に於ける大家對新作家の對立は最もよくこゝに見られた。その露伴、綠雨は勿論、鷗外も『染ちがへ』以後創作の筆は執らず、紅葉も依然として書いてはゐたがもう從前のやうな獨創的のところはなく、門下の作を改作したり西洋通俗小說を飜案したりしてゐた。

紅葉、眉山、柳浪、水蔭、小波を硯友社の初期の人々とすれば、鏡花、風葉、秋聲、春葉などは、日清戰後の硯友社同人であつた。中で最も早く頭をもたげたのは泉鏡花の觀念小說であつた。

觀念小說乃至悲慘小說の出現は、從前の流行小說の缺陷を補はうため、或は

流行の探偵小説そのものゝ變態、在來の空想的外形的の寫實に對して、より確實な深味のある哲學的思想が欲しいといふやうな點から生れて來てゐた。そして悲慘なるもの、またはある種の觀念乃至概念の籠つたものは深刻であると思惟して、玆に鏡花、眉山、柳浪の觀念小說または悲慘小說なるものが勃興した。

泉鏡花の『夜行巡査』と『外科室』（共に廿八年文壇倶樂部）とは、少なくとも觀念小說の先驅であり、其の作者の出世作であつた。從前の作者の着目した艶麗とか瀟洒とか、乃至は文章美とかいふものから全く離れて、ある思想を現はすといふ態度に出た。しかし形式こそ進步はしてゐたが、材料そのものはやはり昔の戲作者の用ゐた粗笨な極端なものであつた。筋を言へば前者は夜行巡査が人民保護の義務のためには憎むべき戀の妨害者をも救はうとして終に命を犧牲にするといふもの、後者は醫學士と伯爵夫人との悲慘な戀を寫したものだ。これか

ら後鏡花には『琵琶傳』だの『化銀杏』だの『海城發電』だのがあつて『化銀杏』などでは結構は殊に悲慘となり、表現は愈々怪奇なものとなつて一作毎に寫實の風を失つて行つた。二十九年には『一の卷』から『六の卷』に至る長篇を「文藝俱樂部」に寄せたが、これは大して世の視聽を動かさず、次第に神祕幽玄の作風を進めて『龍潭譚』をものし『照葉狂言』を作り以後「風流蝶花形」『化鳥』『清心庵』『鬚題目』に筆をつけ、三十一年に入つては『辰巳卷談』『笈草紙』『梟物語』を著はした。文章には益々獨特の妙趣を發揮して、容易に他の企及を許さないものがあつたが、その晦澁怪奇の空想は一方に固定した讀者を持ちながら、次第に一般世人の倦むところとなつた。『照葉狂言』はその三十年の代表作とも見るべく、作者の幼時の記憶を中心として、その上に一種の結構を施した、詩趣の多い作であつた。當時「柵草紙」から「目ざまし草」にかけて鷗外の『卽興詩人』が出てゐたから、鏡花も或はその感化の下にこの一篇に筆を執つたかとも思はれた。『辰

巳巷談』は遊女の末路を叙して、凄涼の氣全卷を掩ひ、かなりの喝采を受けた。
川上眉山の初期の作品としては『白藤』『賤機』(共に二十六年讀賣新聞)が、その艷麗な文と清新な想とを以て世に聞え、「國民之友」の批評家八面樓主人(湖處子)なども紅葉を押へて眉山をあげたものだ。たまたま觀念小說の氣風が文壇に動くと、彼もまた率先して『うらおもて』(二十八年國民之友附錄)を書いた。これは前に「太陽」に揭げた『書記官』の系統を引いたもの、先には父の名利の犧牲となつてゆく處女の悲慘事を寫したが、これでは社會の冷酷無情なのが、德行家をして賊たらしめるといふ經路を書いて、作者自身の對社會觀を、篇中の主人公に托して言はしめてゐた。所謂觀念小說なるものの一代表作ではあるがその觀念が露骨で狹く、作爲もあるし、不自然でもあり、描寫も結構も全然失敗の作であつた。けれど『白藤』と『賤機』とはまた別樣の趣を存して當時に於ては頗る目新しい題目として評判が高かつた。眉山にはこれに次で『松風』『朧富

士』『絃聲』を經、廿八年「讀賣新聞」に『暗潮』の大作を掲げ始めた。そして今迄の雅俗折衷體を廢して流麗な言文一致を用ゐた。これが始て紙上に出た當初の評判は大したもので、明治の大作初めて成らんとまで推賞された。けれど一種の煩悶を得て容易に解決を得なかつた作者は、中途に筆を捨てゝ飄然と旅に出で、そして有名な『ふところ日記』を書いた。日記は卽ち湘南遊記で、文趣の艶麗、感想の清新なのに加へて、早くからダヌンチオなどを繙くといふやうな人のことゝて、その煩悶懊惱も面白く、彼の傾向を知らうとするものゝ見逃してはならぬ作だ。『暗潮』は後に『網代木』と改題して出版された。

廣津柳浪も眉山、鏡花と相併んで觀念小說卽ち當時の新派の先驅として認められた。彼の作風は別に深刻小說又は悲慘小說の名を以て目せられたが、それは觀念小說の變態に他ならない。二十八年『黑蜥蜴』を以て一躍文壇の雄となり、翌年一葉が出で、露伴が復活するまで文壇は殆んど彼の獨壇場であつた。

柳浪の『黑蜥蜴』は彼が當時の探偵物傾向に見るところがあつて、つとめて奇矯不自然な境地に取材し、讀者の好奇心を挑發しやうとしたところから出來たものではないかと思はれる。そしてそれが後に罪惡の事件の消長、心理の經過といふやうなものに轉化し發展したものらしい。『黑蜥蜴』の他にも『變目傳』『龜さん』など世を動かしたものであるが、當時これを新派と稱し、寫實小說と稱し、心理小說とまでたゝへたのは、まだ彼の眞髓を洞察しなかつたものだ。これは鏡花などでもさうで、この時代の寫實なるものは極くアイデアリスチツクなもので、自然を粉飾することの平氣なのは勿論、人よりも事、事よりも想を主として、概念を誤つて眞實と見てゐた。ことに柳浪の作などでは、リアリズムの作家の必らず注意を拂はなければならぬ寫生などをも、最もおろそかにしてゐた。それは天外は勿論、紅葉も寫生は重んじてゐたのに、彼れはたゞ一室に閉籠つて自己の經驗したこと、又經驗の達することの出來る範圍內の想像

とによつて筆を執つた。かやうにスケッチを缺いた彼のリアリズムが、深く核心に達し得られるはづはない。平板な抽象的の程度に止つて、深く人生を味はせるといふよりも、實感を以て低級な讀者を動かすといふ程度に止つてゐたのは仕方がない。『變目傳』『龜さん』などの暗黑描寫も、それが中心からそれに深い意味を感じたといふよりは、單にさうした異常な事件と性格とに興味を持つたといふ程度であつた。『黑蜥蜴』に續いて彼は多く心中物を作つた。『今戶心中』『河內屋』(二十九年)などその代表作であり、かなり喧しく世に傳へられたものだ。けれど今の眼からこれ等の作を評すると、單なる人情小說、同情小說に過ぎない。作中の人物に對しては最も好惡の判斷が加つてゐた。人情化、道德化といふやうな鍍金が行はれてゐた。突込むべきところもそのまゝにそつと撫でて置くといふ風であるし、分析といふ境地には甚だ遠かつた。作品から受ける感じも人情に訴へるといふやうなところから來る感じて、人生の再現とい

ふやうな藝術的の感じではない。ヂッケンスやサッカレーや、小デューマの摸倣であつた。結構に囚はれ、趣味を重んずるに過ぎ、餘程理想がゝつた物である。しかしこれは今日からの議論で、その當時にあつては彼の心理描寫は硯友派中の異彩であつた。『河内屋』などを見ると、結構の老成していかにもドラマチックで、事體の錯雜したところが、彼の作風を最もよく示してゐた。『畜生腹』(三十年太陽)は『河内屋』と共に彼一代の傑作と傳へられるもの、畜生腹の一婦人、苦惱のあまり、惡婆の勸誘に應じて一兒を暗から暗に送るといふ筋である。次で『あにき』『青大將』を經て三十一年には『女仕入』を書いた。悲慘小說、深刻小說から心理小說の領域に入つて行つた經路はよく窺はれた。

江見水蔭は硯友社の古い同人であるが、以上の諸作家ともその行くところを異にし、詩味に富んだ短篇作家として一時世に迎へられた。實際、彼の筆は彼自身特獨のもので、紅葉などの感化は少しも及んでゐなかつた。たゞ惜むらく

はこの作家は頗る芝居氣が強く、單なる好奇心に支配されて、珍しいことといふとすぐ熱中し、從つて筆も想も著るしく誇張したものであつた。結構にも不自然な個所が多かつた。作物は頗る多く、長篇にも乏しくないが、異色のあるのはやはり短篇で、日淸戰爭中にも盛に短篇の際物を亂發した。『水車』(二十八年)の中に收めた『燒山越』『一夜宿』『斷橋』『雪折竹』『狂詩人』などいづれも彼の特色が顯はれてゐたし、『女房殺し』『炭燒の烟』及び『泥水淸水』などそれぞにその頃評判の高い作であつた。ことに『女房殺し』は一時は一葉の『濁江』と併稱され鷗外は『炭燒の烟』の詩趣をドーデーの『星』に比較してほめた。

二　大家と新作家

明治の文學に最も深甚な感動を與へた日本の古い作家は、勿論西鶴であつた。

紅葉、露伴、この兩作家はまづその文章から結構乃至觀察の奇警な點に於て西鶴を學んだが、しかも西鶴の徹底的な人生觀だの、その性慾描寫だのについては、彼等は全く盲目であつた。その中で樋口一葉だけがやゝ西鶴の面影を傳へてゐたかとも思ふ。

一葉の認められたのは『にごり江』(二十八年七月文藝倶樂部)の一篇であるが、少なくともこの作あたりを過渡時代として、彼女の作品は前期と後期とにはつきりと分けられる。彼女の全集を繙いて見ると始めて小説に筆を染めたのは二十五年二月の『闇櫻』であるが、其の後二三年の作即ち『曉月夜』『うもれ木』『やみ夜』『大つごもり』などの作には、いかにもすねものゝひねくれた女史が作中に出て來る。作者の薄倖な境遇の生んだ女らしい感傷的の主觀が、露骨に作中に出て、世を恨み人を呪ひ自己を暗く見たといふやうなところが到るところにあつた。それがどうした理由かは知らないが、『ゆく雲』(二十八年四月)『にご

り江』の頃から彼の女は大きな心の煩悶と經驗とを味はつたので、その後期の作物『十三夜』『われから』『わかれ道』『たけくらべ』などになると、劃然これまでの態度から脫却して、同じすねもの丶主人公を書くにも、作爲を施したやうな痕跡は著るしく減じてゐた。ことに『たけくらべ』あたりになると、眞に天衣無縫、自然の趣が赴くがまゝに流露してゐて、從前の小主觀などは見たくも見られない。ライフといふものがはつきりと彼女の眼に映つてゐるやうに見えた。表面リアリズムとかナチユラリズムとかに關聯してゐないで、しかも最もナチユラリズムの趣きに適つてゐたのは面白い。比較的初期の作の『にごり江』でも周圍を見る力は紅葉よりもはつきりとしてゐるし、少なくともアイデアリスチツクのところは多くない。尤もその描かれてゐる男なども今の眼から見れば頗る描劣だが、さすが女性の解剖にはすぐれて好いところがあるし、結末はまづいが女主人公の狀態はよく書いてゐて、作者自身の心理描寫といふやうなところ

があつた。それにまた生活難の中に短い一生を終つた彼女としては、後期にな
つて無論紅葉の作に見るやうにふざけたり與がつたりするやうなところはない。
ことにその作の內容と再現の氣分に於ては紅葉よりも一歩をぬいてゐたと思ふ。
中にも『たけくらべ』(二十八年十二月)が、最も再現の氣分に富んでゐた作と思
ふ。吉原に近い大音寺前の陋巷に生立つた少年男女、それが各々異なつた性格
事情のもとに、いろ〳〵と考や境遇の變つてゆくさまが實に巧みに描出され
て、しかも强ひて解決を施さず、ライフをして赴くがまゝにたゞ赴かしめ、且
つその背景には例の人生意の如くならずといふ悲しい氣分が面白く出てゐた。
吉原のカラーとか空氣とかも巧みに寫し出されてゐて、全集中の傑作である
ばかりでなく、明治文壇に不滅の光を放つ作かと思はれる。この他『行雲』(二
十八年四月)にしろ『わかれ道』(二十八年十二月)にしろ『十三夜』(二十八年九
月)にしろ、それ等の傑作が當時の徒らに觀念をあらはに顯はしたり、結構を衒

つたり、中心點を求めたり、燃燒を施したりする作品の横行してゐる時代に出たのは、頗る面白い現象であつた。

一葉と前後して女作家が多く輩出したが、無論、彼女と比肩するに足るやうな作家は一人もなかつた。小說に於ける三宅花圃、北田薄氷、田澤稻舟、大塚楠緒子、飜譯に於ける若松賤子、小金井喜美子などはそれ〴〵その尤であつた。

先に述べた大家對新作家の對立は、二十九、三十、三十一年と三ヶ年も續いた。けれども新作家の作品はいよ〳〵增して、「目ざまし草」の大家連も後には一々これに眼をくれるのが却つて馬鹿〴〵しいといふやうな風になつた。讀書界の形勢もさう紅葉露伴とは言はず、新作家を物色してゐた。

鏡花について、紅葉の門から出たのは小栗風葉であつた。『寢白粉』(二十九年)に兄弟相姦を寫し、『龜甲鶴』(二十九年)に知多半島に於ける造酒家の內部を細寫して、文壇に認められた。しかしながら彼が一躍して大家に列したのは

後の三十一年の『戀慕流し』に待たねばならなかつた。『十七八』は三十年の「新著月刊」に出たもので、初期の自然主義者の取材にあるやうな結構が、當時に於ては最も刮目するに足りるものであつた。作中の一人の男がショペンハワーに見るやうな戀愛觀を振廻すのも面白かつた。

「新著月刊」は三十年に發刊された雜誌で、一方の「早稻田文學」と呼應し、宙外、不倒、抱月、天外、青々園、巴干等が主に筆を執り、他にも金子筑水、綱島梁川などが早稻田から出た。赤門派と呼ばれた青年文士には高山樗牛を始め、姉崎嘲風、大町桂月、佐々醒雪、武島羽衣、鹽井雨江、土井晩翠、登張竹風の諸家がゐた。硯友社には尙ほ春葉、秋聲があるし、露伴の門には田村松魚がゐた。私などもこの當時の新作家であつた。

後藤宙外は『ありのすさび』(二十八年早稻田文學)から『闇のうつゝ』(二十九年新小說)を書いて、次で『思ひざめ』『亂れ心』『白露』などを出したが、その特

獨の心理描寫もあまりに空想の多いもので、硯友社の人達の作品から見ればやゝ眞面目なものでありながら、さほど高い名聲を得るに至らなかつた。けれどもそれ以來彼は心理描寫に細密だといふのと、併びに田園を寫した叙景の筆がすぐれてゐるといふので、かなり世間に推賞された。

水谷不倒の「新小說」第一號にかいた『錆刀』『薄唇』の二篇、島村抱月の『めをと浪』(三十年)、『月暈日暈』『墨繪草紙』などはそれ〴〵注目された。抱月の作は布置の整然たるを以て特色とされ、一般に近松の感化を受けたものと認められた。

小杉天外は始め綠雨の門に出で、綠雨と合著で『五ツ紋』などの作を公けにしたが、更に『奇病』(二十八年)『改良若殿』『卒都婆記』(共に二十九年)等の諷刺的作品を世に出し、その後三十三年『初姿』を公けにして後にリアリズムを唱道するまで隱れてゐた。その他、歷史小說をかいた遲塚麗水、三宅青軒、松居松葉

前田曙山などいろ〳〵な若い人達がゐた。

新派が崛起してから紅露の兩大家共に久しく筆を絶つたが、それでも露伴には『風流微塵藏』の大作があつた。それは既に二十六年頃から「國會新聞」に揭げて置いたものだが、これが數年を經てから數册になつて版行された。『さゝ舟』『きくの濱松』『ひとり寢』などはその最も傑出したものであらう。一般の評は『五重塔』以來作者が現實的の作風に近づいたと云ふことで、或は作者は此一大禪史に人生の複雜した實寫圖を作らうとしたものらしく、人物も事件も頗る廣汎なものであつたが、作者の力が伴はなかつたのか、それとも興が盡きたのか、遂にその完成を見るに至らないでやんだ。その他『ひげ男』の出る前年にやはり「國會新聞」に『新浦島』を揭げ、三十一年に『二日物語』などを書いたが、クラシカルなその文辭を一部の人々が推賞したばかりで文壇には別段の刺戟も與へなかつた。三十六年の『天うつ浪』も完結に至らずに止んた。

紅葉は二十八、九年に起つたこの勃々たる新氣運を冷かに見流しつゝ、モリエルの飜案『夏小袖』をはじめ、二十七年以後二十九年に至るまでは『隣の女』『不言不語』『片靨』『名出クロイツェルソナタ(トルストイ)』『笛吹川』『冷熱』などゝ多くは飜案物、合作物に筆をつけて、批評家の嘲罵を浴びてゐたが、たまく寫生風の作品『靑葡萄』を出してますく惡評を買つた。そこで彼竟に憤然として蹶起し、二十九年『多情多恨』の大作を世に公けにした。その廣告文を自ら書して曰く『これ俳諧にあらず、雜報にあらず、飜案にあらず、合作にあらず、實に快腕一揮の大作なり』と。また曰く『これは自家の米の飯だ』と。これ、事件の奇、結構の妙を以て世人を瞞着する小說に對して一面反語を加へたものであるが、しかしながらこの『多情多恨』が全く當時の文壇に橫溢した寫實主義の空氣の中から生れて來たのも事實である。

紅葉一代の傾向は、その文章を說けば卽ちそれが內容の解剖となる。『三人妻』

の絢爛を經て來た『多情多恨』はまことに平淡の趣を示してゐた。當時に於てまづかうした日常平凡の境地に筆をつけたのは大きな功と謂はねばならない。全體として見てもコンポジションが成たけ自然に近いやうにといふところを覘つてゐたし、日常の生活に再現の氣分を現はさうと心掛けてゐるところも見える。結末の一段、鷲見が葉山の家を去つて下宿住ひをするのに『花も無しに……』といふ一句で、解決もつけずに全卷の筆を擱いてゐる氣分などはいかにもアーチスチックであり、作以外の人物のライフが卷外に無限に發展されてゐるやうな氣がした。しかし主人公の鷲見の描寫が頗るまづい。想像で無闇に誇張してある。鷲見たるものゝ個性はさつぱり出てゐず、作者がある思想の下にまづく造りあげた人形としか思はれない。それに作者が社會だの一般道德だのを標準にして事象を判斷したり、ある特種の事件だのその内容だのに興味を寄せたり面白がつたりするところが到るところにあつた。勿論、嚴正な藝術的態度だの

氣分などは少しも了解されずに書いてゐた時分だ。說明と描寫との區別にもまだ不十分なところがあつた。それに面白いのは、想像でなく、事實によりモデルがあつてかいた事象や人物になると、甚だ生々として、いかにも再現に近いパアソナリチーを持つてゐた。主人公が書けてゐないで、葉山とその家の人々がよく出てゐたり、待合の場所の精彩に富んでゐるのなどはその最も好い例だ。けれどもモデルであつても作者が面白がつて書いてゐるところとなるときつとその眞相が出て來ない。お種だの老人だのが眞實性を持つてゐるのは、モデルがあつてそして作者が面白がつたり興がつたりする餘裕がないからだ。兎に角『多情多恨』はまづ彼の全集中批評する價値のある唯一の作であつた。

紅葉はこの作の縞を終ると、直ちに筆を新にして三十年一月から「讀賣新聞」に『金色夜叉』の稿を起した。しかしこの作は、その後五年の歲月を經るも尙ほ完結に至らず、そして三十六年に紅葉は歿した。『金色夜叉』は單に文章の上か

ら見ても、ことに絢爛の極致に達したものであるが、それでも作者はその後篇あたりでもう型にはまつてどうすることも出來ない心持を示してゐた。內容の意義を考へて見ても、時代の推移に呼應して行かうとしたものでありながら、やはり從來の空想がゝつた寫實から脫し切れないでゐた。

三十年、彼が『金色夜叉』の稿を起してから死ぬまでには、高山樗牛がニイチエを論じ、個人主義だの時代精神論だのが盛に呼號された。見神などゝいふことも言はれた。當時は既に觀念小說の下火になつた頃で、三十四五年から六七年にかけては、文壇は詩と歌との橫行に任せた。殊に三十六七年の頃は文壇の闇黑時代とも稱すべく、紅葉、樗牛相共に世を去り、鷗外は小倉の任地に去り、逍遙は三十一年に「早稻田文學」を廢刊して倫理敎育に沒頭してしまふ。文壇には元老が全く跡を絕つといふ有樣であつた。小說にも西洋の作品を飜案したやうなものが跋扈し、今では活動寫眞でなくてはその存在を認められないや

うな家庭小說などが、しきりに評壇の的となつた。自然主義の勃興はさういふ間にも芽ぐみかけてゐた。

三十七年に日露戰爭が始まつた。淺間の麓の方にゐた自然派の作家藤村などは、この戰爭中、更めて寫生から出逹してまことの寫實主義に赴かうとしたりしてゐた。

三　寫實主義

空想的、外形的の寫實主義に慊らない一般の傾向は、三十一二年の頃、時代精神論の唱道となつたり、作家と實世間との接觸の議論となつたりした。

內田不知庵はやはりその論者の一人であつたが、三十一年まづ『暮の二十八日』を「新著月刊」に寄せた。これは二十九年頃早く萠芽を發した實業小說また

は社會小說の潮流に應ずるもので、その根柢には宗教思想、政治思想乃至諷刺的傾向だのが橫はつてゐた。笞庵は批評家として硯友社の戲作氣質を痛罵した人、飜譯から一轉して始めて創作に筆を執つたのであつた。そして冷靜な態度で仔細に社會の種々相を描いて見せたが、尙ほ作物の價値は議論に伴はないといふ衆評であつた。續いて同じ作者の『今樣厭世男』『片鶉』『霜くづれ』などが出るに及んで、新作家のこれが風潮に動かされるものも多く、宙外の『腐肉團』風葉の『政黨』をはじめ秋聲、曙山にもこの種の傾向があつたが、所謂社會小說は久しからずしてその聲をひそめ、木下尙江の作風などに僅かにその痕跡を殘した。

自然主義勃興に至るまでの文壇はやはり柳浪、天外、風葉の寫實主義がそれぞれ主力と見るべきものであつた。けれども三十二三年の頃から文壇の不振に乘じて、一面小說の局面展開の要求と、天外、風葉の寫實主義に對する一部讀者評家の非難とに呼起されて、こゝに家庭小說なる流行文學が勃興して來た。德

富蘆花の『不如歸』は三十二年「國民新聞」に掲載し始められた。彼は久しく小說家たらんとして小說家たるを得なかつたが、この作一度出でゝ聲譽忽ちに揚つた。凡そ明治の小說中この作ほど讀書界に歡迎されたものはあるまい。勿論その然る所以は取材と實感と同情とによるのは言ふまでもなく、評家は一般に藝術上の價値を附するのを拒んでゐる。爾來、彼は三十四年に『思出の記』を三十五年に『黑潮』を公けにした。

菊池幽芳の『己が罪』『乳姉妹』、田口掬汀の『伯爵夫人』草村北星の『濱子』などもそれ〴〵に賣行の最も多いものであつた。

中村春雨の『無花果』(三十四年)も家庭小說、光明小說を以て目されたが、藝術的の價値は以上の家庭小說より上にあるし、宗敎的色彩に富むを以て特色とされた。

柳川春葉はその瀟洒溫雅な筆を以て、よく人生の推移を寫し、家庭を書いた

が、三十八九年の頃から次第に家庭小說のサークルに近づいて行つた。しかし『錦木』(三十四年)『わすれ水』などの短篇には一種棄て難い味があつたものだ。

德田秋聲も早く『藪柑子』『都落』などでやゝ人に知られてゐたが、紅葉の歿後、同門春葉と共に大に世に顯はれた。文に一抹の哀愁を有し、推移描寫の筆は、その當時から獨特のものであつたと思ふ。『雲のゆくへ』(三十四年)『春光』(三十五年文藝界)『桎梏』(三十七年)などがあつた。永井荷風の『地獄の花』(三十五年)もかなり評判のあつた作であつた。

泉鏡花は『梟物語』以後、ます〳〵怪奇な空想の境に入つて、もうその筆は人間を描き世相を寫すといふことは出來なくなつた。『通夜物語』『黑百合』『湯島詣』『高野聖』などそれ〴〵に彼の愛讀者を喜ばせた。三十五年には『風流線』が出た。

廣津柳浪の悲慘小說、深刻小說は次第に所謂心理小說に進み、三十年以後三

年間は著るしくその價値をあげた。無數の作の中『縺れ糸』と『骨ぬすみ』とは共に三十二年に出で、『目黑小町』と共に目黑附近を舞臺とした三部物であつた。始めこの作の着想はたしか宙外と郊外を散步した時、草むらに赤い糸くづを見つけてから筆を執つたといふので、先に述べた通り單純な人情小說、同情小說の範圍を出ないものであるが、それでもよく讀者の淚を誘つて、當時の創作界は殆んど柳浪を盟主とするやうな觀があつた。他に『紫被布』と『二人やもめ』(共に三十二年文藝俱樂部)の二篇もまた前後連關した二部作であつた。

小杉天外の寫實小說も柳浪の作と同じく會話譯山な冗漫な小說であつた。三十三年彼は『初姿』を公けにして揚言した。『小說は須らく實社會のことを寫すべし。人物事實を正實に丁寧に筆記すれば卽ち足る』と。かやうにして彼はその寫實主義を標榜して立つたのである。

天外のリアリズムはまことに明治文壇の一產物であつた。さすがにゾラに私

淑して立つたゞけにその寫實主義は柳浪などより一歩を進めてゐた。もう彼に見るやうな人情化などゝいふ赤く爛れたリアリズムではなく、寫生の氣分もかなりに出てゐたし、平面的な感じもよく出てゐた。判斷といふこともなるたけかはらないやうに、やうにと心がけてゐた。けれど尚ほそれにも拘らず、彼自身の宣言を裏切つて、彼には天才を重んずるといふやうな空想的創造的の氣分が到るところにあつた。彼の宣言に從へば、彼は現象を現象として見るやうな境に達しなければならない作家であつた。ライフライクといふことなどを眞先に念頭に置かなければならないはづであつた。ところが實際に彼はよくその人物と生活とを、自己の想像――彼の所謂天才によつてよく創造してゐた。そしてそのライフと性格とが、いつも類型的のものに墮してゐるのを彼は悟らないでゐた。『魔風戀風』(三十六年)は『コブシ』(三十九年)と共に彼のリアリズムの二大所產であつたが、やはり前者の女主人公も、『コブシ』の多賀子なども

類型に落ちて、生氣に乏しく、自然の持つてゐるパアソナリチーといふものがない。これを彼の所謂天才に賴らず、創造を排して、ひたすらに謙虛な態度で、現象の中から生々とした人間を捉へて來たならば、一層まことの生彩のある人間が描けたであらう。三十五年の『はやり唄』は彼のリアリズムの最高潮に達した作であるが、後にはだん〳〵と空虛な人物をやたらに創造し、その立派なリアリズムもいつか意義のないものとなつてしまつた。そればかりか、果ては通俗小說といふやうな境地にまで落ちて行つた。それから彼の例の會話も死んでゐるところが多かつた。會話そのものが、作中人物の心理を語るものでなく、その變化と複雜とをも傳へるものでもなく、柳浪と同じく單に方便に用ゐられたりしてゐた。『魔風戀風』などにもさういふ箇所が甚だ多い。それから彼はまた寫實主義の背後に橫はる作者の人格乃至氣分といふやうなことにも硏究が至らなかつたと思ふ。しかしそれは兎も角として、純粹に西洋の寫實

主義を日本に入れた天外の功績はまた多とせねばならない。その他の彼の作には『初姿』以前三十二年に『肱枕』『亂れ髪』『蛇いちご』『娘心』などがあるし、『戀と戀』『にせ紫』は『初姿』の續篇として出で、爾後『女夫星』『新學士』などの作もある。『コブシ』の後には『長者星』等がある。

明治文壇の長老で青年に最も大きな影響と感化とを與へたのは、鷗外と二葉亭であつた。後の國木田獨歩なども鷗外の『埋木』『即興詩人』、後者の『かた戀』『浮草』などの歐文脈の文章を常に愛誦してゐた。『即興詩人』は始めて「柵草紙」に掲げて以來八年の長日月を經て三十五年に完結したものである。アンデルゼンの譯であることは誰しも知つてゐる。譯者曰く『今の寫實派は暗を畫き罪惡を描きて些の忌憚する所なきよし、されど、玲瓏として隱影なきこの理想境も亦佳ならずや』と。即ち知るこの譯は、當時の寫實風に對して殊更にこの理想小說を選んだのであつた。

二葉亭四迷は二十九年に至つて再び文壇に復活し、『片戀』(二十九年)に次で『浮草』(三十年)『廢れ緣』等ツルゲネエフの作品を多く譯出し、その思想と文章と譯法とは共に〳〵後の文壇に根本的の感化を與へた。

紅葉、露伴、鷗外、柳浪、そのいづれもの文體に慊らない若い當時の青年達に、據るべき標準を與へたのは實に二葉亭の『浮草』などであつた。小栗風葉の『青春』も『浮草』から多大の暗示を受けた。

風葉の出世作『戀慕流し』が「讀賣新聞」に出たのは三十一年であつた。今から見れば形式と內容とが相伴はず、缺點だらけの作であるが、當時にあつては、その絢爛の文、ロオマンチックの想を以て大に文壇を騷がせたものであつた。鷗外の『埋木』を學んだとの評もあつたが、あれよりも寫實的傾向を多く持つてゐた。引續いて『鬘下地』『涼炎』『沼の女』を經てから、彼は一時盛にツルゲネエフの飜案物などに名を著して出したが、三十八年『青春』を公けにするに及んで、

後の新興文學の魁をするかの觀があつた。

由來、風葉は一種複雜なる觀察眼と、熱心な藝術的良心及び憧憬といふやうなものを持つてゐた。新藝術を翹望するの心、鋭敏な感受力、さういふものが彼をして常に自身の硯友社脈から裏切らせやうとしてゐた。『青春』は實にこの間の消息をよく語るものであつた。しかし彼の踏んで來た道は、實際、動搖の多い混亂した時代にあつた。文章を文章として作る硯友社氣質、事件の對照を重んじ、筋の興味のあるのを貴ぶといふ硯友社の病所、さういふ資質を備へた彼の中へ、新しい西洋の文藝がどし〳〵と入つて來た。なるほど『青春』は硯友社時代の意味に於ては文章がうまい。それに官能描寫に於ても、當時の文壇に於て一歩を先じた概があつた。即ちその意味から言へばロマンチツク、リアリストといふやうなところがある。しかし『青春』の全體としてのコンポジシヨンから言へば、それはまだ『多情多恨』の再現といふ域にまでも達してゐなかつた。

『魔風戀風』と共に、女學生の一部はなるほどよく描けてゐた。けれど作者の抱いた一種のアイデアは絶えず全體としての構圖を小さくして、ライフライクといふ氣分はどこにも見當らなかつた。天外ほどに現象的、外面的にもなつてゐないが、自己を標準とした興味だの趣味だのから、勝手に事象の色を濃く淡く塗つてゐたのは慊らない。既に人生の多種多樣といふ考がない。從つて人生の雜多紛々を捨てずに描くところから、眞の人生の姿が浮んで來るといふことも悟らないやうであつたが、たゞ彼が理解したところだけは、濃厚に描いてゐた。

第四期（三十九年より四十五年まで）

一　自然主義

明治文壇末期の大勢力たる自然主義の勃興については、いろ〳〵な細かい複雜した原因がある。例の三十四年頃しきりに唱へられたニイチエ論、美的生活論などのこれが遠因となつてゐるのは勿論、日露戰役によつて覺醒されたわが國民の個人的自覺、その他一般學術の普及につれてプラグマチズムだのヒユーマニズムだのが、直接西洋から輸入されたのもこれが背景になつてゐやう。讀者の側から言つても、從來の低級な家庭小說だの乃至は飜案物だのに慊ならぬものが多く出て來たのも事實だ。就中、自然主義促進の重な動機となつたのは、

露、佛、獨等大陸文學の輸入であつた。

鷗外の『かげ草』には早くハウプトマン、ズーデルマンの名が出てゐた。二葉亭の譯したツルゲネエフの『うき草』『片戀』、魯庵譯ドストエフスキーの『罪と罰』など大陸文學の名什はいち早く日本に移植されて、ある一部の人々の間には深い感銘を與へてゐた。「明星」及び「藝苑」に據つた上田敏、馬場孤蝶、戶川秋骨、平田禿木その他の諸家によつて、モウパツサン、ダヌンチオ、ゴルキー、メーテルリンクなど耳新しい西洋作家の名前が續々と入つて來た。けれどもまだ本當のリアリズムさへ起らない日本の文壇へ、ロシアやフランスのシンボリズムなどがどうしてそのまゝに根を張ることが出來やう。それに紹介者の鑑賞力にも甚だ疑はしいところがあつた。モウパツサンなどが單に典雅な文章家として傳へられたりした。

日本の自然主義に火をつけたのはやはり島崎藤村の『破戒』であつた。詩を棄

て〻物語に移つた藤村の足迹は、取りも直さず日本に於ける小ロマンチシズムの潮流を渉つて、當然の歸着點であるプロゼイツクの自然主義に到達したものである。

同じ三十九年には「早稻田文學」が再興され、「文章世界」も新たに興つた。『破戒』と共に自然主義の勝利の功を分つたものは國木田獨歩の『運命』であるが、獨歩には既に三十四年に『武藏野』があり、三十八年に『獨歩集』があつた。彼の出逹點も同じく敍情詩人としてゞあつたが、特に推奬すべきは彼が徹頭徹尾獨創的の作家だつたことである。彼は紅葉の盛期に身を處してゐながら、常に彼一流の痛罵を以て『多情多恨』だの『不言不語』だのゝ技巧内容をのゝしつた。その他露伴は勿論、西鶴にも近松へも赴かずに、古臭い無數の日本の作家を捨てゝ、寧ろワーヅワースから更にツルゲエネフに行つた。これは恐らく新奇を好み、直觀の鋭敏といふことを生命とした彼の當然赴くべきところであつた。

戀愛に失敗するまでの獨步は宗敎家であり、實行家であつたが、その後の彼は、轉じて社會や戀愛に眼が覺めて、よほど客觀的な藝術家風の態度に出て來た。けれどまだ純然たる藝術家ではなく、やはり刻々に推移する內部生活はた外界の境遇事情と戰ひ行く實行家であつたと言はれる。卽ち凡ての人に對し周圍に對して、何よりもまづ自家の眞心直情を推し、所謂習俗や道德には累はされまいとした實行家であつて、同時にまた一面には、客觀的な藝術家風の態度もあつた。逆境も薄僥も所詮は自然の事で、人は如何にもがくとも到底この大自然の寰外へ逃れ出ることは出來ないといふやうな、つまり彼は一種の運命論者としての實行家であつた。彼の集に『運命』があり、作に『運命論者』のある所以はこれに他ならない。自然を好愛すると同時に運命說をも信ずるといふやうな立場に彼はゐた。『運命』集中の『空知川の岸邊』の主人公岡本が、廣漠たる北海の荒野にあこがれて、さてその空知川の邊に行着いた時の感想、落木蕭條たる大森

林の底から自然の威壓におのゝくくだりなどは、卽ち彼のこの自然觀はた運命觀の最もよく具象化されたものであつた。

『武藏野』には二葉亭の『あひゞき』に刺戟されて書いた『武藏野』を始め、『源をぢ』『忘れえぬ人々』などが收めてある。當時の彼の自然觀は極めて靜穩なスヰートなものだが、轉じて『運命』時代になると、その凄慘な人生觀と結びついて、なつかしい自然の奧底に汲めども盡きぬ悲哀を味つてゐた。

曾て獨步自身の言葉に『僕の自然主義はワーヅワーシアン、ナチユラリズムだ』と云つたのを覺えてゐるが、私達から見た彼の文藝上はた思想上の態度は、單に無技巧無修飾を標榜する牧歌的のワーヅワーシアンには留まらず、その上更に一種凄慘な主觀を加味したツルゲネエフの行き方ではなかつたかと思ふ。しかしこれらも彼が單に自然人生の觀方に於て、比較的多くツルゲネエフに負ふところが多かつたらしいといふ程の意味で、それがいさゝかも彼自身の創才

を累はすわけではない。彼の中にあるワーヅワースもツルゲネエフも、一度表現される場合には、卽ち彼の文致筆致に至つては、それは全く彼獨自の個性的のものであつた。その無遠慮に打切棒に筆をやるところ、その簡勁雋邁にして技巧をぬきにした素朴の文章、直截に端的にすぐ思ふツボに嵌つて行くやうな技巧は、事實彼特獨のものであつた。

彼曾てまた揚言して曰く『自分は天成の詩人である』と。世間でもまた小說家としてよりも詩人として彼を待つものが多かつたが、これは或は彼が趣味中心の人であつたところから來たものであらう。實際、彼は談話にも議論にも趣味を重んで、分析の斧も無意識には用ゐるが、意識的には餘り用ゐたことがない。常にイギリスの紳士の立派なことを讃美して、彼自身もそのイギリスの紳士の瀟洒と堅實とを持つてゐた。『獨步集』に收められた『牛肉と馬鈴薯』などを讀んだゞけでも、その會話のいかにキッドに富み、諧謔に富み、いかに熱情に富ん

であたかはわかる。從つて彼の作品は機微を穿つたものが多く、彼の敏捷な眼に觸れた人生の一角がいかにも手際よく描出されてゐた。しかしその根本の趣味中心はやはり累をなして、まだ醜を醜としては寫さなかつた。現象を現象として見るやうなアナリストの態度が明白でなかつた。『正直者』などでもどこか綺廉に手際よく書いてあつて、ライフライクといつたやうな感じを持つ作品は少ない。つまり彼のは廣くライフを見るといふよりも、その一角を把握して、そこから深くライフに入つて行かうといふ行き方であつた。曾て彼が藤村の『破戒』を讀んで『僕ならこの十分の一で書く』と言つたのを聞いたが、それは卽ち彼にうつるライフは『春』や『家』の作者の眼にうつたやうな廣い散漫な無解決なものではなく、むしろ刹那的な區切のついたものらしいく思ふ。少なくとも彼のライフの見方は輻射的ではなくて、集中的であり、客觀的ではなくて主觀的であつた。彼の初期の作に『一家内の珍聞』といふのがあつた。アメン棒事件と

ハガキ事件とを二つ合せて書いたもので、頗る機微に觸れた、日常生活中の一片であるが、それでもそれがあるがまゝに見たのでなくやはり解釋を加へて書いてある。パッド、テーストだからかういふことが起るのだといふ風に書いてあつた。

客觀的で、よほど再現の氣分に近い作品は比較的後期にあつた。『二老人』『疲勞』などそれであつた。その他幾多の短篇中、『女難』と『正直者』とは少なくとも明治文壇に於て自覺を伴へる最初の肉慾小說であるし、眞に肉の力を認めて、それを大膽に眞率に比較的嚴肅な態度を以て書いたのは獨歩に始まる。尤もその態度の根柢には多少センチメンタルな分子が伴つてゐて、後悔するやうな氣分もありはあつたが。

獨歩の作品に力があり、またイムプレシヴだつたのは、彼が何よりも眞實を尊んだ賜物である。實際、日本の自然主義が彼のその眞實といふところから出

達したのも事實であつた。近代西洋作家の逸品にも劣らないやうな短篇が、獨歩の手によつて始めて明治の文壇に提供されたのは面白い。

『破戒』の出版も明かに明治文壇の一時期を劃したものだが、これより以前、藤村には『うたゝね』『舊主人』『老孃』『水彩畫家』以下七八篇の作があつた。

『破戒』は藤村が二年間の勞作になるもので、舞臺を千曲河畔の飯山に取り、穢多の一小學敎師が新平民であることの自覺、その苦悶、恐怖、絶望を感じながらも、父の戒と彼自身の自我慾とから素性を包み寂寥な生活を續けてゐる中圖らずも素性が暴露し、終に父の戒を破つて敎室の兒童の前に告白懺悔するといふのであつた。この作一度出づるや、あるものは目するに無戀愛小說を以てし、その客觀的描寫を稱し、寫生とか、カラーとか、官能とかいろ〳〵の語を擴めて行つた。その未だロマンチックの感情を脫し切らないところ、技巧の精細に過ぎてまだ所謂露骨なる描寫の域に達しないところ、作爲の跡の歷然と見

える點などを責める人々もあつたが、しかも藤村の名は一躍にして獨歩、漱石と共に當時の文壇の首班に列した。

『破戒』の勞作中、彼は「藝苑」に『朝飯』を寄せ更に『家畜』を「中央公論」に書いた。其後『春』と『家』の長篇の他に『藤村集』『食後』の短篇集があつた。

既に『破戒』を動機として廻轉期に入つた文壇は、翌四十年に於て自然主義は全く文壇の主潮となり、賛するもの否とするもの凡て自然主義を題目としないものはなかつた。私の『蒲團』を書いたのもこの年であつた。所謂性慾問題、中年の戀の問題、モデル問題、主觀の嚴肅說、傳習打破、排技巧の說など皆なこの頃から行はれた。人物、事件の平凡化といふことも議された。續いて翌年には長谷川天溪の『現實暴露の悲哀』が出で、宙外、龍峽、孤島等は「新小說」に據つてこれに對抗した。岩野泡鳴が『靈肉合致の事實』を發表し、自然主義的象徵主義を宣言したのもこの年であつた。二十年來文壇に根を張つてゐた硯友社の

勢力も一朝にして根柢から覆へされた。名ある作家がドシ〳〵と遠慮もなく圏外へ放り出されて行つた。

先に『並木』で時代の推移を描き、『黃昏』で錯雜したその手法を示した藤村は四十一年に入つて長篇『春』を朝日新聞に連載した。その作は透谷を始め舊「文學界」の同人をモデルとして、一にはその時代の藝術界の春ともいふべきものを背景とし、併びに人々の若々しい春のやうな生活を寫したものであつた。この作を讀んで第一に氣のつくことは、作者が飽まで再現を心がけ、そして細かいところまで目をくばりながら、いかにも素朴な印象派風の手法を用ゐたことであつた。例へば作中の一主要人物である靑木の死を寫すにしても、いかにも落着いて書いてゐる。これを普通の見方から言へば、當然色を濃くして書かなければならないやうなところだが、作者はそれを際立たせないやうに巧みに筆を運んでゐた。つまりその靑木の死は周圍の若い人達に取つてこそ大事件に

相違ないが、廣いライフの上から見ればさう力を盡して描くべきところではない。かう見て筆を惜んだところに、ライフに對する作者の廣い客觀的の見方が窺はれてゐた。それにこの作者は殆んど斷定といふものを用ゐない。青木の死の原因などについても何も言つてゐない。今、少し入つて行つても好さゝうなものだと思はれるくらゐに、作中人物の心理を書くことを避けてゐた。狀態ばかりを寫して、しかも心理を歸納させやうと心がけてゐた。その手法がすつかりオブヂエクチーブになつてゐる。內容が凡て選んだ事件、選んだ人物、撰んだ思想ではなく、複雜した狀態につゝまれたまゝのライフである。ライフの雜多紛々が非常にライフそのものに意味をもつてゐるといふ考へ方らしかつた。少なくとも『春』に見えた作者は、藝術派でそして人生派のやうなところのあるのが特色で、西洋にもかういふ作風はあまり見かけないと思ふ。

この他の短篇では『奉公人』をことに私はすぐれた作品だと思つた。作者が自

己の周圍を描いて、そしてこのくらゐの程度にまで再現の氣分に達したのは珍らしいことゝ思はれる。しかし『芽生』あたりから作者は自己を押へずに、ある程度までは主觀的であつても構はないといふやうな氣分を出して來た。『家』などにはその傾向は明かに顯はれてゐた。勿論、全體のコンポジションはライフライクといふことを失はないが。尤も『家』は全體として描くといふよりは說く風の作柄であるが、その細部の描寫、就中その文章の排列にはかなり苦心を潛めてゐるらしかつた。句と句との間に書かないで意味を殘して置くやうなところが面白いと思ふ。そのラインとラインとの間には複雜した意味が有機的に籠められてゐると思ふ。『食後』に收められた短篇は大抵ストーリーである。序文には『自分はあまりこの生を凝視し過ぎた、もつと一瞥したものを書きたく成つた』とある。この前後、私も長篇では『生』を書き更に『妻』を書いた。

小栗風葉は『青春』の後、『おと娫』『ぐうたら女』『世間師』『耽溺』の諸短篇の他

に『天才』『慰さめ』の長篇に筆をつけたが、『耽溺』以後漸く振はず、長篇『解脫』も中途で筆を絕つて終に今日に及んでゐる。しかし三十九年から四十年にかけて自然主義勃興の初頭に於ては、この作者はまた功を分つた一人であつた。

德田秋聲は硯友社から藻社を經て來た人であるが、やはり新しい潮流に乘つて次第〳〵に文壇の表面へ出て來た。秋聲の新たに認められて來たのはその北國的の暗い陰欝な作風が偶々ロシア文學と一味相通ふ點があつたことなども一原因であらう。彼の新らしさは決して派手な新らしさではなかつた。けれども自分の持つてゐるものを忠實に出すといふ點に、常に盡きざる新しい泉が湧いてゐた。彼の作品に接すると、地道に世の中を渡つて行く苦勞人といふことがしみ〴〵思はれる。現實に壓迫されて、そしてそこから離れることの出來ないやうな執着に一種のねばり强い力があり、書くことにうそがなく、空想がなくしつかりとした確かな步調で一步〳〵今の境地に步いて來た。

『焔』『犠牲』『凋落』『出産』を經て『新世帯』『足迹』『黴』に至つて作家の聲名はその頂點に達した。勿論『焔』から『黴』に至る距離は甚だ遠いもので、作風も多大の變化を經て來てゐる。『足迹』は『黴』の姉妹篇であるが、可憐の少女の周圍と境遇との變轉につれて移つて行く姿が、いかにも複雜に客觀的に描寫風に表現されてゐた。『黴』は世評の高かつた割合には、敍述脈の勝つたもので、追懷的の描寫が多く、前者ほど深い感銘を與へなかつた。『足迹』一篇は實に描寫的手法の極致を示したものと言つてもよからう。しかしこの作者のものはあまりに老練であると同時に、あまりに枯切つて熱がなく、潑溂として人を突動かす氣力に乏しいのを遺憾とする。

正宗白鳥と眞山青果は共にこの廻轉運動の初頭に立つた兩花形であつた。青果の初めて名を出したのは確か四十年の「新潮」に載せた『南小泉村』であるが、ツルゲネエフの『スポーツマンス、スケッチエス』に似通つた作風で、東北の僻

村のカラーを描き、殊にその態度の純なるを稱する者があつた。以後『茗荷畑』『癌腫』『家鴨飼』その他脚本『第一人者』『生れざりしならば』等を以て、新運動に寄與するところも少なくなかつたが、その筆致の暢達勁健なのに反して、態度は頗る眞摯を缺き、他にいろ〳〵な原因から、師風葉と相前後して、漸く文壇の中心から遠かつた。

白鳥の出世作は四十年二月の「趣味」に載せた『塵埃』であつた。市井の塵埃に埋もれた老人を描いて、當時の有識者間に認められ、次第に文壇に名聲を馳せた。續いて長短篇幾十種の作物を公けにして今日に至つた。概して言ふと、彼の作は規模は小さいが、しかし同時によく緊張されて居り、人生自然に對する觀察も理解もかなりに深かつた。その鋭いナイヒリスチックなシニカルな傍觀的態度は、『何處へ』でも『世間並』でも『泥人形』でゞもよく現はれた。そして私は曾て彼のさうした態度を、センチメンタリズムの變形した弱い青年の絶叫で

あり反抗に過ぎないと言つたことがあつたが、それでも『明日』から『二家族』などになると、ずつと趣を異にした大きな自然に近い作風を見せてゐた。それから『落日』は再現といふ氣分から言へば、まだその目的を達してゐない。『泥形人』と同樣にやはり作者と主人公とが卽き過ぎてゐて、周圍の人々に對する主人公の判斷が、主人公自身の判斷とならずに、作者自身の判斷となつてゐたところがかなりに多かつた。つまり自己に對する判斷がまだ十分に行渡つてゐなかつたのだ。尤もかの作の主人公が料理屋に泊つた、あくる朝、人間のあさましさを感ずるあたりは思切つて大膽に描かれ、よほど分析の苦痛といふやうな氣分は出てゐた。『泥人形』あたりでも主人公の夫婦を他人として——かうした夫婦もあると言つたやうな氣分で書いたならば、もつと好い作になつたらうと思つた。『二家族』はそれ等の諸作にくらべると深味は乏しいが、全體の感じは廣く、コンポジションにも解決のないやうなところが面白かつた。『毒』といふ

のもスッキリとした氣持のよい手法で書いてある長篇であつたし、『微光』も評判の高い作であつたが、短篇ではやはり『一夜』などが面白いと思つた。

岩野泡鳴は三十九年『神秘的半獸主義』を著して以後、自然主義的表象詩論を提唱して詩壇に活動し、『新自然主義』を出して一時評論界の闘將であつたが、四十二年の「新小說」に『耽溺』を掲げた前後からその創作的才能をも認められた。『耽溺』に現はれた作者の心持は少なくとも眞率であり、無邪氣であつた。作者は實に明かな鏡のやうな心を開いて、普通人ならば口にするにも忍びないほどの悲慘、殘忍、冷酷の事象を、たゞ事象そのまゝの姿で映寫してゐた。恐らくこれほどまでに澄んだはつきりした主觀で、暗い事象を寫出した作は從來にはあまり見かけなかつた。この作については、作者自らの言葉に『耽溺の主人公は古來の英雄豪傑と同じである』といふ意味を言つたが、甚だ面白いと思つた。傳習に支配されず道德に縛られずに、人間本來の性能を縱橫に發揮することの

出來た態度は、實際、英雄豪傑の眞面目であらう。泡鳴には尙ほ『耽溺』の他に『放浪』『發展』などの長篇があつた。『放浪』は四十三年に出た作であるが、例のこの作者の病所と認められてゐる主觀の偏狹な態度が甚だ露骨に見えてゐる作であつた。けれどももと〳〵この作者のやうな人生派に近い立場では、再現だの描寫だのの境地に達するのは甚だむづかしい。現に『放浪』などに現はれた作者は、まだ好惡是非などゝいふところを離脱してゐないし、自分の取扱つた人物に對して、恐ろしい判斷の斧を振つてゐた。卽ち勇夫婦に對し、氷峰に對し、そも〳〵作者はいかなる權利があつて、さうした判斷を下すことが出來るかと思はれるくらいであつた。尤もそれは、『放浪』の主人公と勇夫婦と氷峰とそれ〴〵の間に區別差違を認めるだけなら異存はないが、しかし藝術家の立場として、殊に再現といふことを作品に望むわれ〳〵から言はせれば、その間に價値といふものは置きたくない。少なくとも價値は讀者がその描寫の中から探り得

て行くに任せて置きたかつた。それからまた同じ作で、主人公を主人公として單に是認してゐるのなら好いが、作者が立入つて主人公のやつたことを肯定しあまつさへそこに意味をさへつけやうとしてゐるのは慊らなかつた。

四十一年から四十二年にかけては、實生活と藝術、印象的手法、外面描寫といふやうな問題が多く文壇で議せられた。眉山の自殺は傳習破壞、幻影破壞、義理人情の破壞といふやうな新潮流の渦卷の中で行はれ、獨步は世をあげて哀悼の涙の中に死んだ。續いて四十二年、明治文壇の恩人長谷川二葉亭も印度洋上に客死した。

既に三十年の『うき草』以後、二葉亭の飜譯としてはガルシンの『露助の妻』『四日間』トルストイの『筒を枕』降つてはゴーゴリの『むかしの人』ゴルキーの『ふさぎの蟲』アンドレエフの『血笑記』などがあつた。『むかしの人』以後は新興文學の勃興に際會してゐて多大の歡迎を受けたが、ガルシンのものなどを譯した

時は、刈心といふ匿名の下に日露戰役中「新小說」に寄せたものであつた。

『其面影』(四十年)と『平凡』(四十一年)の作者が、文學を死身でやる氣になれないと言つたのは名高い言葉だ。けれど彼はさう言つたゞけ文學を重く見たといふよりも、むしろそれだけ文學に眞劍であつたと私は言ひたい。由來實生活と藝術との關係は常にむづかしい問題である。私は二葉亭が曾て『到底實感を描くことは出來ない』と言つたのを覺えてゐるし、『私は壞疑派ならざるを得ない』と語つたのをも知つてゐる。『其面影』や『平凡』は竟に彼の本領を出さなかつたものとして認められてゐるが、私は、しかしその本領を出さなかつたところが卽ち却つて彼の本領ではないかと思ふ。上の二つの作品の出た當時は、その文章に古い殼がついてゐたのと、人生觀こそ懷疑的な强い色彩のものだが、その描寫の態度に至つては冷やかに世を見下した、隙のあるあそびの態度だといふので、一方には少なからぬ非難を招いだ。けれど『平凡』となると、何所か

また不思議な、見透かされないやうな好いところもあつた。それは、『平凡』が一人稱で書いてあるから、三人稱で書いたものよりもより再現に近い離れた氣分の味はれる點で、恐らく作者の位置が離れ過ぎてゐるためか、それともかくされてゐるためか、作中の何所にも出て來ない。作者は實に巧みにその眞意の所在を讀者の眼から晦ましてゐる。本來がロシャ式の人生味の深い作品でありながらも、一種不思議な藝術的のにほひがする。もしも自己を完全にかくし得た作品からこそ、本當の再現に近い感じが味はれるものとするならば、『平凡』はまさにその好適例と思ふ。そこからは實に無限の人生が泉の如く掬ひ味はれるやうに思ふ。『平凡』に描かれたあの平凡な一ライフが空中に遊離してゐて、そこから更にそれ以外のさま〴〵なライフが無限に想像されるやうな氣持がされる。

小川未明は『霰と霙』とを以て、小山薰は『色の褪めたる女』を以て、水野葉舟

は『あらゝぎ』を以て、その他「新古文林」からは中澤臨川、吉江孤雁、窪田空穗等の作家が出た。いづれも自然主義勃興當時であつた。高濱虚子と同じく俳句から小說に入つた佐藤紅綠も『行火』を出し『鳴』を書いて生田葵山の『都會』と共に發賣禁止を命ぜられて、文壇にも物議を起した。三島霜川にも三四の短篇の作があつた。

四十二年頃になると、舊作家と新作家との階級的區別はつけられないといふ狀態になつた。永井荷風はもとより、森田草平は「朝日新聞」に『煤烟』を連載して文壇は勿論一般讀者の視聽をも聳て、葉舟には『微温』以下の諸作あり、中村星湖にも『一切の事』以下の作があるし、更に翌年には、德田秋江の『別れたる妻に送る手紙』鈴木三重吉の『小鳥の巢』などが出た。上司小劍、相馬御風、長塚節、伊藤左千夫、野上臼川、岡田八千代等新進の俊髦は雲の如く崛起した。蘆花は『寄生木』などを書いた。

飜譯は四十一年からトルストイ、アンドレエフ、チエホフ、ツルゲエネフ等ロシアの作品が主として紹介され、更に翌年から翌々年へかけてアルツイバアセフ、ザイチエフ、ソログーブ、ホフマンスタール、シユニツラー、ワイルド、キーランドなど續々輸入され、森鷗外だの、昇曙夢だのが主としてその紹介につとめた。

二　非現實派

森鷗外は飜譯だの戲曲の創作だのを出してゐる傍ら「スバル」が發刊されてから小說にも筆を染めはじめた。四十二年は彼がかなり活動した年で『ヰタ・セクスアリス』以下の數篇が出たし、四十三年には例の『あそび』の他に『靑年』を「スバル」に連載した。『心中』や『百物語』といふやうなものも出た。

鷗外の作品を讀むと、要するに面白いから面白いと言つたやうな行方である。勿論その種類は多岐に亘つて、寫生文らしいのもあれば問題小說のやうなものもあるし、批評を小說に托したといふやうなものもあつた。何も窮屈な自然主義などに拘泥してゐる必要はない。かうした心持で書いたやうなのもあつた。自然主義以外にもかういふ書方がある、かういふ形式がある。さう言つて作をしてゐるやうに思はれた時もあつた。然し多少に拘はらず、彼の作風が當時の文壇の空氣を複雜にしたのは爭れなかつた。且つ新たに小說に復活した彼の態度はまたいかにも自由で、ドシ〳〵と平氣で型を破つて出て來てゐる。『文づかひ』や『うたかたの記』を書いた同じ人が『心中』や『百物語』のやうなものを書くのは不思議なやうに思はれる。その『百物語』の中には傍觀者といふことが出てゐたが、確かにこの作者は傍觀者であつた。けれども彼の傍觀的態度は、他の白鳥や藤村のやうに苦痛だの疑問だのをじつと抑へて、火水のなかに齒をくひ

しばつて默つて見てゐる傍觀者ではなく、離れたまゝでノンキに平氣に、興味を以て人生を打眺めてゐる傍觀者であつた。『あそび』の出た時はかなり是非の聲が高く、「あそび主義」だの「あきらめ主義」だのがよく文壇の話頭に上つた。それからまた、鷗外の作品を他の作家のものに比べると、際立つて平面的な感じのするものが多かつた。たゞ書くために書いたといふやうな氣分のするものもあつたし、どうしてかういふものを書く氣になつたかと疑はれるやうなものもあつたりした。

この鷗外の作品から受ける感じに似通つた感じを持つたのが、上田敏の『うづまき』などであつたが、それはやはり、學者肌のいかにも思索に富んだものであつた。

永井荷風には、既に三十五年に天外の寫實主義と相呼應して、ゾラの作風に模して遺傳と境遇に支配される女の獸性を書いたものなどもあるし、ゾラのナ

ナなどを譯したこともあつたが、彼が眞個文壇に主要な地位を占めるに至つたのは、四十一年歐米の旅から歸つて、『アメリカ物語』を出して後であつた。

『アメリカ物語』も現實に脚を置いて、かなり强烈な主觀的なにほひのする作品であつたが、更に歸朝後の彼の眼に映じた日本のすがたを書いたもので『監獄署の裏』などは最も純なフレッシュな感じを與へる作であつた。『祭の夜がたり』も色彩の濃い、誇張した分子の多かつた物語風の作ではあつたが、でもかなりの評判を博した。四十二年は彼の最も鮮かな活躍ぶりを見せた年で、上の二作の他に『フランス物語』だの『冷笑』だのその他、『歡樂』『深川の唄』『牡丹の客』の數篇があつた。『歡樂』から以後、彼の作風も文壇の位置も漸くに變轉して來て、「三田文學」に同好の士と集まり、所謂三田派の新作家を率ゐるやうな位置に立つた。四十三年は文壇の漸く統一を失つた年で、自然主義以外にも享樂主義だのあそび主義だの江戸趣味だのネオ・ローマンチシズムだのゝ聲が高ま

つて來た。

『歡樂』當時からの荷風の文章が、洋行前とは見違へるほどの新味と情緒と色彩とを加へて來たのは言ふまでもない。且つその情緒は單純なものではなく、新しい複雜した高いにほひを帶びしたものであつた。抒情、憧憬――さういふ境から生れてまた新味を持つてゐる筆であつた。これは恐らく彼がロチなどに私淑して、その影響が甚だ多いのではないかとも思はれた。ピエル・ロチはもともと美文家として知られた作家だ。外形美を繪のやうに描いて見せるインプレッショニストとして知られた作者である。ロチにも時には心理描寫がないではないが、まづその方面は影になつてゐるか閑却されるかしてゐた。解剖だの、分析だの、眞劍な態度だのは容易にロチには望まれない。そしてそのロチに對する批評は直に移して荷風に當はめることが出來る。彼もロチと同じくペインターではあるが、サイコロジストではない。恐らく心理のプロセスといふやうな

ものを、具體的に彼の作品から窺ふことは困難である。彼の心のプロセスは卽ち多くは單なる情緒的の說明といふ程度に止つてゐた。態度に至つてはどこか遊んでゐる。張りつめてゐない。贅澤な文藝といふところであつた。死身になれないのではなくて、ならないといふ態度が見えた。それに文章がいかにも派手でアトラクチヴであるところから、讀者はまづその質には動かされないで、文章ばかりの感じに動かされて、作者の人生に於ける地位とか、人生に對する態度とか、さういふものを知ることは甚だ困難であつた。切離して、空中に漂つてゐるやうな藝術的氣分などは少しも味はれない。藝術を好愛する荷風、かういふ風には言はれるだらうが、彼の作品が眞に再現に近い、藝術的のものだとは言はれなかつたやうに思ふ。

三　低徊派の小說

夏目漱石の文藻と學殖とは、夙に一部の人々の間に認められてゐたが、三十八年以後『倫敦塔』を「帝國文學」に『我輩は猫である』を「ホト、ギス」誌上に連載してから、俄かに文壇の視聽を集めて、藤村、獨步などと併稱されるやうなことになり、三十九年には『漾虛集』を四十年には『鶉籠』『虞美人草』を、そのあくる年以後『三四郎』『それから』『門』等幾多の長短篇に筆を執つた。そして此等の作品はまた四十年唱道されはじめた虛子等の寫生文の自然主義と暗々裡に脈絡を通じつゝ、その門からは草平、三重吉、臼川などを出した。

漱石は自家の立場を說明して、俳味、禪味の小說であるといひ、そしてその俳味或は禪味はイブセンなどに見えるやうな、所謂第一義の生死問題を超越し、更にその上に立てられた出世間的の人生觀であり、俳句及び寫生文に現はれた趣味が卽ちそれであるといふ意味を說いた。餘裕派、低徊派、俳諧派などいろ

いろの名前がつけられた。

まづ態度から言ふと、無論彼は傍觀者であるが、それは鷗外ほどに完全な傍觀者ではなかつた。從つて文章も彼ほどに平面的ではなく、やはり主觀的なもので、感じだの色だの匂だのは明かにはつきりと、出過ぎるほどに出てゐた。だから、彼の主觀をすく人にはますく向くが、嫌ひな人にはすぐ反抗的な眼で見られるといふやうなものであつた。句と句、章と章の間には例の低徊趣味が纒綿して說明が多く、理窟ぽく、いやに煩瑣なところもあつた。才に任せて輕く筆を走らせ、作をするといふよりも文章を作るといふ調子があつた。書く事と文章とがしつくりと合はないところにもよく出會つた。要するに狹い主觀や興味や趣味の上に彷徨して、作者の抒情にこそ適好な筆であるが、作者自身の嗜好や趣味を沒して、具象的に物を描寫するには甚だ向かない筆と思はれたし、彼の愛讀者が常に彼の文章を愛讀して、質卽ち內容の愛讀者でないことは、

實際尤もなことゝ思はれた。けれど、その新味のある點に於て、彼の文章の明治文壇にかなり多くを寄與したのは爭はれない。現友社の型にはまつた文體が打破されたのにも、彼の力が與つて大きい。それから、彼の文章の煩瑣な感じを與へる理由の一は、彼が常にその作中の人物に干渉して、その心理を揣摩し推察し說明するところから來てゐた。彼の作中の人物に個性だの心理だのはいつもあまり出てゐなかつた。『それから』は彼の作中、最もすぐれた作のやうに思はれる。一種の方式を用ゐた心理描寫は、十分に特色のあるものと思はれたが、やはり全體は說明的であるし、煩瑣でしつゝこく、常に讀者を前に置いてくど〳〵と說明をしてゐる風があつた。從つてまた内容よりも文章の量が過ぎ、この作など描寫式で行けば、その半分位でも十分に書きこなせるものでありながら、徒らに冗漫に書いてあつた。『門』などではことにその弊が甚しく、宗助とお米と小六とか云ふ人物の生活が、性格は勿論、別にその細かい氣分を

も見せずに、類型を寫したまゝで二百頁もつゞいてゐた。やはりあの作なども漱石一流の輕い見方から出て來てゐる。一體に彼の作の內容を占めるものは想像と嗜好と興味とで、現象そのまゝを摑んで來たやうな生々とした氣分は、その人物にも事象にも現はれてゐなかつた。どの作を見ても拵へものといふ感じを起させた。

漱石と同じく、正岡子規の寫生文の脉を引いてゐた作家に高濱虛子がある。而も漱石が次第に所謂寫生文の型を脫してしまつて居たのに比べて、寫生文を正しく繼いで、これを小說に應用したのはまさに虛子一人の觀があつた。

子規の所謂寫生文は、猶ほその俳句に於けるが如く、繪畫の寫生に於けるが如く、常に客觀的態度を持して、自然人事を忠實に描寫するにあつたが、虛子、四方太、鼠骨等に至つてます〳〵洗練を加へられ、たま〳〵寫實主義乃至自然主義の勃興、漱石の出現等に促されて、次第にその手法を小說に轉用するこ

とゝなつた。子規の時代には純客觀的態度を以て重に周圍の事柄に重きを置いたものが、四十年頃からしてやゝ主觀的のものとなり、作者の感想などに重きを置くやうになつた。主觀を通じて現はれた精細なる客觀的描寫といふことが虛子などの當時の立場であつた。中にも虛子自らは同好の人の多く寫生に拘泥して一步をも踏みだせないものゝ多い中に、彼一人だけは流石に一步を踏み出して四十一年の『俳諧師』あたりではまだ寫生脈も多いが、『東京市』などになるとます〳〵そこから出て行かうとする試みが見えた。その文章は時には非常にインプレッシヴな美しい凝つた文章であることも多いが、やはり寫生の弊である冗漫を全く擺脫するに至らなかつた。彼の主觀はかなり色の薄い瞬昧なものであるが、同時に甚だ自由であつた。四十二年に出た『三疊と四疊半』など、當時評判の短篇の一つであつたが、その態度はやはり在來寫生文の型を襲踏してゐた。この他に彼の主な作としては『雞頭』『續俳諧師』『朝鮮』などがあつた。『東

京市』は四十四年に「ホト、ギス」へ出しかけたものであるが、この當時の文壇は既に大きく現實派と非現實派と相對立したやうな狀態であつた。「三田文學」からも谷崎潤一郎以下の新しい享樂派の作家が輩出するし、所謂『新らしい女』たちの雜誌「靑鞜」が出るし、理想主義だのネオ・ロマンチシズムだのゝ聲も諸所で聞かれた。

明治小說內容發達史 終

明治小説史研究書目

明治の時代が漸く過去の區域のなかに入つたばかりの現時に於いて、其の小說史研究上の參考書目を掲げると云つても、吾人は寧ろ餘り書籍が澤山なのに望洋の感を抱くばかりであつて、極力之れを選擇するより外はない。明治年間に世に出た小說も三都のやうな都會に居れば大抵手にする事が出來るし、明治時代に活動した小說家も尙ほ多く殘存し且つ盛に今後の文藝上の開拓を企てゝ居る。小說は別に茲に掲げないが明治小說史上の參考となるべき重なる參考書を列記すると、

岩城準太郎『明治文學史』　明治四十二年育英舍

大和田建樹『明治文學史』明治二十七年博文館
高橋淡水『時代文學史』三十九年開發社
坪內逍遙『小說神髓』（博文館明治名著集にあり）
坪內逍遙『接神子』（春廼屋漫筆のうち）
高山林治郎『明治の小說』（博文館發行樗牛全集のうち）
田山花袋『明治の作品研究』（花袋文話のうち）
早稻田文學社編『文藝百科全書』明治四十二年隆文館
後藤宙外『美妙、紅葉、露伴の三作家を評す、』（明治三十三年春陽堂出版
風雲集のうち）
相馬御風『最近十年文壇史』（『新潮』明治四十四年一月號所載）
太陽臨時增刊『文藝史』明治四十二年
文章世界臨時增刊『明治文學の概觀』大正元年十月

等は其の重なるものであるが、まだ明治小說に關して一個の權威を有すべき著作は一冊も出で居らぬ。新たに明治小說を研究しやうとするものは之れ等の手引を度外視して直接個々の作品に就いて新たなる歸納と演繹とを試みるより他に道は無い。尙明治文學硏究者の好參考となるものは前期「早稻田文學」の時文評論欄（之れは坪內逍遙が其の沒理想論上の記述主義より詳しく文學上の推移變遷に着目して執筆せるもの）及び「めさまし草」「萬年艸」の三人冗語及び雲中語後期「早稻田文學」の彙報欄等は、最も參考となるべき文藝雜誌の時評である。其の他坪內逍遙の『文學その折々』『文藝瑣談』『文藝と敎育』『作と評論』と森鷗外の『月くさ』幸田露伴の『欄言』『長語』島村抱月の『近代文藝の硏究』上田敏の『文藝論集』島崎藤村田山花袋長谷川天溪等の『文藝入門』（新片町より、インキ壺、萬年筆）宙外等編『唾玉集』海賀變哲編『新式小說辭典』があり又醒雪の『近世國文學史』及び大町桂月『日本文章史』の明治の部も一讀すべきもの、其の他『透谷全

集』『樗牛全集』及び岩野泡鳴の『新自然主義』長谷川天溪の『自然主義』後藤宙外の『排自然主義』相馬御風の『黎明期の文學』片上伸の『生の要求と文學』生田長江の『最近の小說家』も必讀の部に屬する。

大正三年五月十三日印刷
大正三年五月十六日發行

早稻田文學社
文學普及會
講話叢書
第一篇

著者　德田秋聲
著者　田山花袋
發行者　島村瀧太郎
東京府豊多摩郡下戸塚村字諏訪六十五番地
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地
發行所　東京市小石川區小日向水道町六十一番地
文學普及會

日清印刷株式會社印行